

池の平遺跡群II

——八千穂村駒出池遺跡の尖頭器文化——



1996年3月

八千穂村教育委員会

池の平遺跡群II

——八千穂村駒出池遺跡の尖頭器文化——

1996年3月

八千穂村教育委員会

序

発掘報告書の刊行に際して

八千穂村は八ヶ岳の北東の山麓に位置する豊かな水と緑に恵まれた村である。この地域には旧石器時代から人間が生活し、水や食糧を求めてあるいは交易のため他の地域から人々がやってきた。特に黒曜石は当時の貴重な天然資源の一つであり、麦草峠産や和田峠産の黒曜石の流通範囲は中部地方から関東地方までの広範囲に及んでいる。従って、八ヶ岳の黒曜石原産地とその周辺地域は、当時の最も優れた道具である黒曜石製石器の原料供給地及び生産加工センターの一つであり、その意味で文化の発信地であったということができよう。それゆえ、麦草峠と池の平遺跡群はわが国の貴重な文化遺産であり、その調査・研究と保護は当村にとっても重要な課題である。

この度、前回の昭和61年の報告書に続いて、池の平遺跡群の一つである駒出池遺跡の発掘報告書が刊行されることになった。これは昭和61年から平成3年まで4回に渡って行われた発掘の成果である。今回も前回と同様に、大阪市立大学の熊井久雄先生の指導の下、八ヶ岳団体研究グループや野尻湖人類考古グループ、野尻湖博物館や野尻湖友の会、村内有志などの協力を得て、実り多い調査をすることができた。ご協力をいただいた方々に対し厚く御礼申し上げる次第である。

また、この研究成果が当時の自然や歴史及び社会の解明の一助となれば幸いである。さらに、この報告書を通じて当村の遺跡や文化財の重要性が再認識され、文化財に対する興味関心や保護の意識が高まることを願ってやまない。

1996年3月

八千穂村長 高橋秀一

発掘報告書の発刊に寄せて

今年度は、昨年12月に森嶋稔先生によって池の平の塩くれ場・トリデロック・湧水地点の発掘報告書がまとめられ、さらに今回、駒出池遺跡の発掘報告書が刊行されるという八千穂村の文化財行政にとって極めて有意義な年度となった。

駒出池周辺はかつて八千穂村の前身の一つである畑八村の村営牧場があったところであり、自村はもとより近隣町村から牛馬を預り放牧していた。その後、村の治山事業や観光事業の推進に伴って池や林道や施設が作られ、遺跡が発見される契機となった。一万数千年もの長い時を経て先人の生活の跡が発見され、その文化に光があてられるに至ったことは感慨深いものがある。発掘の成果を通じて八千穂村の祖先たる人々の残した文化を理解し、高度に発達した現代文明の中にある我々に対し、遺物を通して祖先が語りかけることに耳を傾けたいと思う。

長年に渡る発掘作業や報告書の編集に関しては、調査団副団長の熊井久雄先生、編集委員長の新海正博先生、発掘作業と報告書の編集に主導的な役割を果たされた野尻湖博物館の中村由克氏をはじめとして、たくさんの方々にお世話になった。あらためて深く感謝を申し上げたい。

1996年3月

八千穂村教育長 今井道春

例 言

1. 本報告書は長野県南佐久郡八千穂村大字八ヶ岳下2049番地に所在する池の平遺跡群の駒出池遺跡の発掘調査報告である。
2. 池の平遺跡群の発掘調査は今までに6回実施された。第1回(1983)第2回(1984)は大反遺跡および塩くれ場遺跡で行なわれ、第3回以降は駒出池遺跡で実施された。第3回は1986年7月23日～7月27日、第4回は1989年10月7日～10月10日、第5回は1990年7月30日～8月4日、第6回は1991年10月10日～10月13日に実施された。
3. 第1回発掘の成果は『池の平遺跡－八千穂村池の平遺跡発掘調査概報』(1984, 8)、第2回発掘の成果は『池の平遺跡群－八千穂村大反遺跡・塩くれ場遺跡の尖頭器文化』(1986, 3)に公表されている。
4. 本報告書で取りまとめられた発掘の成果はすべて巻末に記した発掘参加者全員のものである。報告書作成にあたって分担した者の氏名は下に示した。編集については下記の編集委員会の責任において行なわれた。成果については編集委員会での議論にもとづいているが、その考察に關しては必ずしも全員が一致した結論を得ているものではないことを付記する。
5. 発掘出土品、写真等はすべて八千穂村教育委員会が保管している。
6. 発掘調査報告書の作成にあたっては多くの方々のご協力やご援助をいただいた。深甚なる謝意を表す。特に発掘資材ならびに施設の利用などで野尻湖発掘調査団、野尻湖博物館、八千穂村婦人会、信州大学理学部地質学教室にお世話になった。
7. 編集委員は次の通りである。

熊井久雄、新海正博*、石塚二侍子、市川(長谷川)桂子、小林(佐々木)早苗、田辺智隆、津金達郎、中村由克、矢口裕之、渡辺哲也、矢嶋勝美、関本真一、小宮山一美、相馬文雄

(*印 編集責任者)

8. 執筆者一覧

- | | | | | |
|---------|---|--|-----|------|
| 1 経 過 | A | 熊井久雄 | B～D | 新海正博 |
| 2 立 地 | A | 田辺智隆 | B | 中村由克 |
| 3 地 質 | | 矢口裕之(執筆責任者)・田辺智隆・内山美恵子・金川和人 | | |
| 4 遺物と遺構 | | 石塚二侍子・市川(長谷川)桂子・小林(佐々木)早苗・渡辺哲也
川端結花・小池幸夫・菅沼 亘・土橋由理子 | | |
| 5 周辺の遺跡 | | 中村由克・小池幸夫・関本真一 | | |
| 6 遺跡の性格 | | 石塚二侍子 | | |
| 7 編年的位置 | | 中村由克 | | |
| 8 ま と め | | 新海正博・中村由克 | | |
| 付 編 1 | | 井出正義 | | |
| 付 編 2 | | 佐々木廣雄 | | |
| 英 文 要 旨 | | 熊井久雄 | | |

9. 協力者として、特に次の方々にお世話になった。

伊藤公夫、金川美幸、上加世田聡、金子良仁、田中俊廣、深沢哲治、三原 哲

目 次

序 例 言 目 次

1	駒出池遺跡調査の経過	1
	A. 調査の目的	1
	B. 調査の経過	1
	C. 調査の方法	2
	D. 発掘日誌	5
2	駒出池遺跡の立地	8
	A. 地 形	8
	B. 八千穂村の遺跡	13
3	地 質	18
	A. 地質概要	18
	B. 発掘地の地質	19
	C. 佐久ローム層および黒色火山灰層の標準層序	25
	D. 遺物包含層の年代について	28
4	遺物と遺構	29
	A. 遺物の出土層準と分布	29
	B. 遺 物	30
5	駒出池周辺の遺跡	58
	A. 池の平遺跡群の研究史	58
	B. 新しく発見された遺跡と遺物	58
6	池の平遺跡群における駒出池遺跡の性格	64
7	駒出池遺跡の編年的位置	66
8	まとめと今後の課題	67
	A. 地質学的成果と問題点	67
	B. 考古学的成果と問題点	67
付編 1	八千穂高原の歴史	69
付編 2	昭和34年（1959年）駒出池で尖頭器発見	72
	あとがき	74
	引用文献	75
	参加者名簿	77
	英文要旨	79
	図 版	

1 駒出池遺跡調査の経過

A. 調査の目的

1983年から1984年にかけて実施された第1回・第2回八千穂村池の平遺跡発掘では、標高1,650mと本邦有数の標高にある大反・塩くれ場両遺跡が発掘され、ここが尖頭器製作址であることが明らかにされた。また、この遺跡の下位の層準から上位にかけて出土する尖頭器の形状の相違から、尖頭器の調整加工の変遷史も明らかにされた。これらの遺跡は後期更新世の八ヶ岳火山の活動に由来する池の平溶岩の上に分布し、周辺の開析された山肌と違って、比較的なだらかな斜面に立地している。この斜面の上方には黒曜石の原産地が存在することから、これらの遺跡はその原産地に通じるルート途上に位置する加工調整場所だったと思われる。

発掘で出土した遺物の大半は、製作途中で破損したものを含めてほとんどすべて尖頭器であり、尖頭器以外の石器はほとんど見るものが無いほど貧弱な出土遺物構成であった。したがって、これら尖頭器を製作した旧石器人類の普段の生活は出土遺物からは伺い知る由もない。幸いなことに、池の平溶岩の上にはまだ多くの遺跡が散在しているので、その中から比較的多様な石器群が発見されている遺跡を選んで発掘すれば、当時の生産様式などを解明する手がかりが得られると考えられる。そのようにして選定されたのが今回の発掘地である駒出池遺跡である。この遺跡からは、農業用水路の調整池として築造されたこの池の造成時や、その後設置されたバンガローの建設時などに、尖頭器とともに多様な石器が発見されている。大反・塩くれ場両遺跡より標高の低いこの遺跡は、溶岩台地上に位置しながら近くに湧泉があるなど遺跡立地上優位な位置にある。

したがって、今回の駒出池遺跡の発掘の主要な目的は、尖頭器製作集団の生産活動や生活を復元するための資料を得ることであり、出土層準を明確にしつつ、多様な石器群を採取することである。このことによって、石器の用途から得られる生産活動の姿が浮き上がってくるものと思われる。しかし、この発掘ですべてが氷解するかといえば、それは困難であると言わざるを得ない。先回の発掘と同様に、この発掘でもまたいくつかの問題点と課題が発掘されると思われる。槍先を輝かせながら白樺林の中を歩む旧石器人の生活を復元するためには、さらなる調査と研究が必要であることは論を待たないし、またそのための息の長い取り組みが必要であろう。今回の調査は前回同様にその長い道程の一里塚としての意義がある。もちろん、この調査の中から前回同様に多くの新しい問題点も浮き上がってくるであろう。

B. 調査の経過

1983、1984両年にわたる池の平遺跡発掘調査により、標高1,650m前後の大反・塩くれ場遺跡は、出土遺物の大半が尖頭器の未製品であることなどから、石器の加工場としての性格をもつもので

あることが判明した(八千穂村池の平遺跡発掘調査団, 1986)。この成果は同時に尖頭器の製作者である先史人類の生活の根拠地はどこかという新たな問題の提出でもあった。

キャンプサイトはどこにあったのかという新たな謎を解いてくれそうな有力な候補地が駒出池であった。駒出池は標高1,300mの池の平溶岩類のつくる南東向きの緩斜面で、池の平溶岩類の1 flow-unitである池の平溶岩I上に位置し、池の平溶岩II末端よりの湧水も豊富であり、前項および付編2で述べられているように、各種の石器類が発見されている遺跡でもある。

第3回池の平遺跡発掘は、1・2回の発掘報告書の完成を待って1986年7月23日より27日まで延べ5日間行われた。駒出池の造成、周辺キャンプ場施設建設等の経過をふまえ、この発掘調査は、遺物包含層を含む周辺の地質層序の確立および遺物包含層の分布の確認という本格発掘への予備調査的性格の強いものであった。この調査によって遺物包含層はかなり失われてはいるものの、駐車場周辺、バンガロー周辺に残存していることがわかり、本格的発掘による成果が期待された。

しかしこの発掘の後には発掘調査団事務局の移転という出来事が待ち受けていた。第1回発掘以来調査団の事務局であった信州大学理学部地質学教室内では、小林雅弘をはじめ中心になって活動していた多くの大学生・院生・研究生らが就職等で大学を離れ、また常に事務局の中心で指導にあたり、調査団の主催団体の1つである八ヶ岳団体研究グループの代表でもある熊井久雄が大阪市立大学へ転勤する等、事務局体制の大幅な変更をせまられ、数年間の発掘の中断を余儀なくされた。

地元八千穂村に比較的近い長野県東部高校に勤める新海正博に事務局が引き継がれ、八千穂村教育長岩波英雄、同公民館主事小宮山一美を交え運営委員会が再開されたのは1989年8月17日であった。第4回発掘は1989年10月7日～10日の4日間行われた。晩秋の高原という厳しい気象条件と八千穂村の運動会と重なるという困難な状況ではあったが、第3回発掘で確認された遺物包含層・デカパミローム層およびその上位の層準から何面もの生活面が発見された。

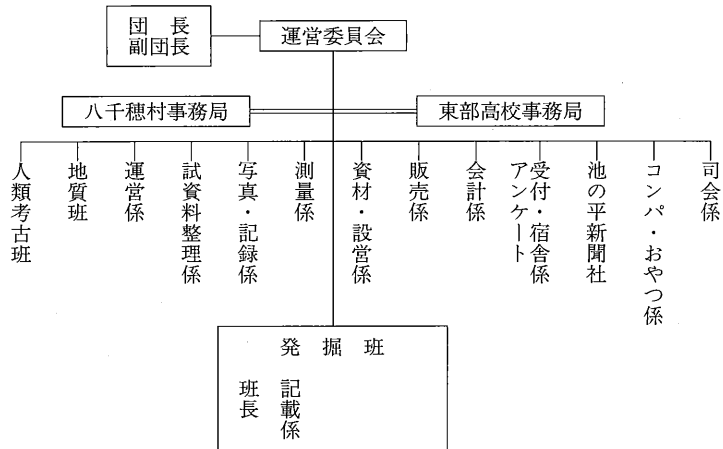
その後、駒出池の発掘は第5回(1990年7月30日～8月4日、6日間)、第6回(1991年10月9日～13日、5日間)と継続され、ほぼ遺跡の全容と性格を確認して終了することになった。なお第5回発掘から調査団長は八千穂村教育長出浦勇次となった。台風21号の接近で天候不良だった第6回発掘の最終日は台風一過の抜けるような青空のもとに締めくくられた。

C. 調査の方法

(1) 調査団の編成

八千穂村池の平遺跡発掘調査団結成の経過は前回報告書(池の平遺跡群<1986.3>)に詳しいので省くが、第3回発掘以降も基本的には同じ体制で行った。すなわち主催参加団体の八千穂村教育委員会・八千穂村史談会・八ヶ岳団体研究グループ・野尻湖人類考古グループ・中南信野尻湖友の会・東北信野尻湖友の会・上越地区野尻湖友の会・北関東野尻湖友の会・ひがし東京野尻湖友の会・むさしの野尻湖友の会・埼玉野尻湖友の会・西東京野尻湖友の会・山梨野尻湖友の会

第1表 発掘の組織

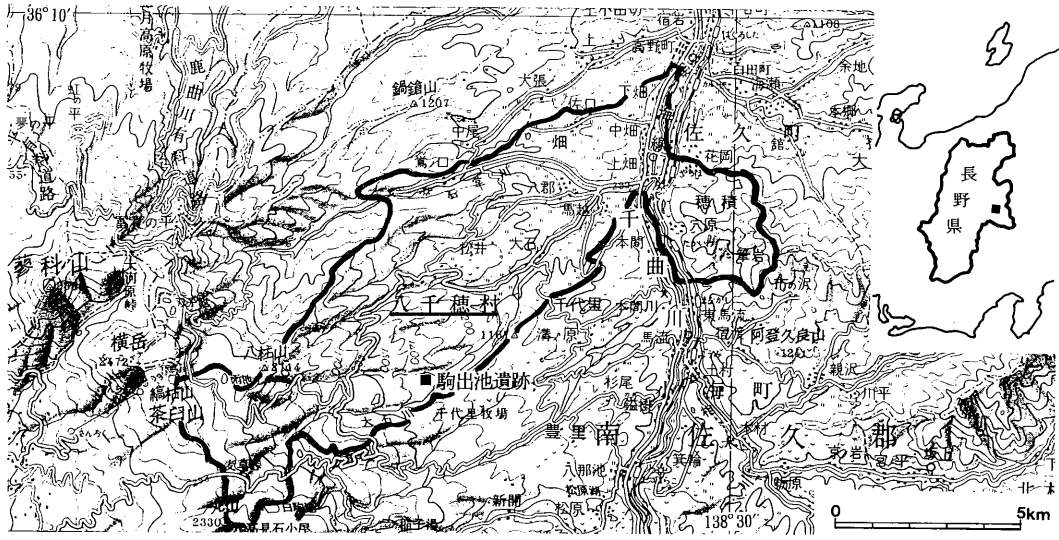


* 団長—出浦 深（第1～3回）、岩波英雄（第4回）、出浦勇次（第5～6回）
副団長—熊井久雄（大阪市立大学理学部）

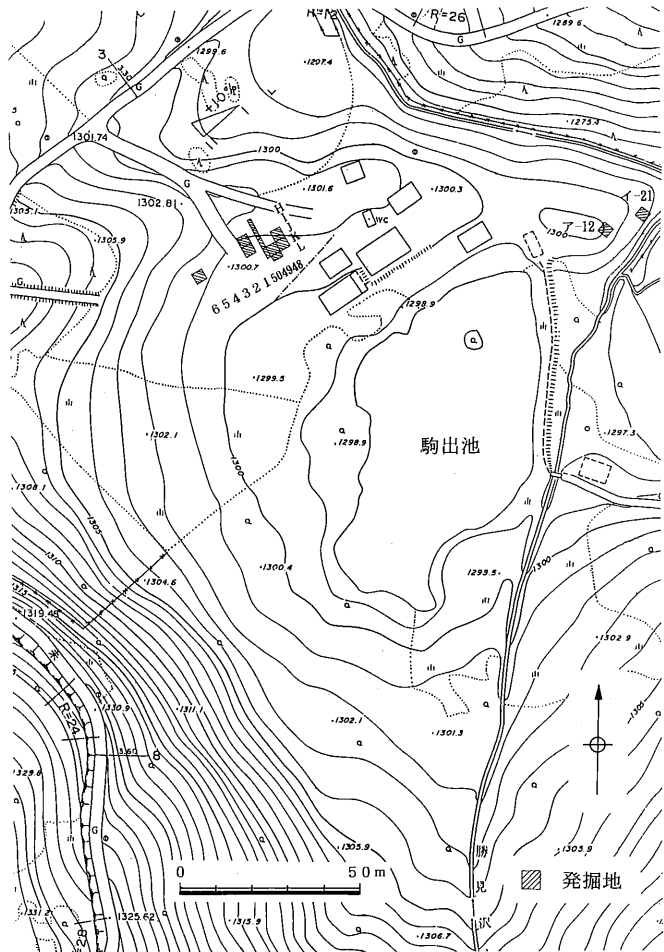
を中心に広く参加を呼びかけ、第1表の組織体制の下に行った。

発掘では、地質班、人類考古班が専門班として編成された。地質班は試掘溝の地層判定と地層区分をし、さらに発掘地周辺の地質調査を行い発掘地周辺の地層の分布を追跡し、第1～2回発掘地の大反・塩くれ場の地質と比較対比した。人類考古班は出土遺物を鑑定し、出土状況を検討した。また、表面採集等遺物の分布状況を調査し、周辺への遺跡の広がりを検討した。

運営係は発掘期間を通じて発掘が円滑に進行するよう運営につとめた。試資料整理係は出土遺物と記載カードの点検と試資料の整理を行った。写真・記録係は発掘全体の様子や遺物を写真で記録した(写真図版参照)。測量係は発掘に先立ちトランシット等測量機材を使って、発掘区画(グリッド)を設定および確認した。さらに区画杭、補助杭を設置し、地盤高の測量と発掘地の地形測量を行った(第2図)。資材・設営係は発掘に使用する道具を準備管理し、参加者・見学者への指示・注意看板を作った。また雨天のさいは、発掘が継続できるようにグリッドにビニールハウスやビニールシートによる簡易テントを設営した。販売係は発掘に必要なノートや書籍を販売し、参加者の力量向上に役立てるとともに発掘資金の一助にした。会計係は参加費や宿泊費の徴収と諸費用の支払いを行った。受付・宿舎・アンケート係は参加者の受付や宿舎の世話をした。また、参加者などへのアンケートを実施し、発掘体制の向上につとめた。池の平新聞社(係)は前日の成果やお知らせ等をのせる新聞を毎日つくり、発掘参加者のみならず八千穂村の関係者にも配布した。コンパ・おやつ係は期間中のコンパ(懇親会)、おやつの世話をし、参加者等の慰労、活力の回復に力を発揮した。司会係は発掘期間中の運営会議、まとめの会の司会・進行を行った。発掘参加者は必ず一人一係(班)以上を分担した。これは参加者は何人といえども対等・平等であり、一人ひとりが責任をもって調査を担うののだとの調査団発足からの精神のひとつの表れである。



第1図 駒出池遺跡の位置



第2図 駒出池遺跡のグリッド位置図

(2) 発掘地の設定と発掘方法

発掘位置は第1図のとおりである。発掘方法は前回報告書に詳しいのでここでは省くが、発掘終了後の埋め戻しの際、斜面崩壊の心配がないよう、一部土嚢を積んで補強した。また、イ-21グリッドは今後の再発掘の可能性も考慮して最終到達面に土嚢を敷きつめて埋め戻した。

D. 発掘日誌

第3回から第6回の発掘は同一地域の同一場所で行われた。ここでは各発掘期間中に発行された手作りの新聞「池の平タイムス」から、発掘調査の様態を概略紹介する。

(1) 第3回発掘 (1986年)

7月23日 午後1時集合、宿舎の八千穂村福祉センターと発掘現場にわかれて準備作業。午後7時から福祉センター講習室にて結団式。熊井副団長より発掘の意義と簡単な説明。次いで地質班田辺さんより6月28、29日に行われた予備調査に基づいた発掘地周辺の地質説明。運営係からの翌日の予定等各係からの諸連絡。引き続き第1回学習会(第1・2回池の平発掘の成果、石塚二侍子さん)。

終了後、参加者中最年少の塚本さんの乾杯の音頭でコンパ。

7月24日 午前9時からくわ入れ式。9時半発掘開始(J-1、J-6、ア-12、イ-21計4班4グリッド)。人類考古出土遺物60点。試掘溝「青スコローム」まで掘削、層序の確認。午後7時15分から第2回学習会(池の平遺跡の特徴と日本の尖頭器文化、故新堀友行さん)。

7月25日 夕立にあうも発掘は順調に進行。人類考古遺物124点、うち重要品7点。ア-12グリッドではスポール(モヤ層準)ほか、イ-21グリッドではスクレイパー(モヤ層準)ほか。J-6グリッドでは「デカパミローム」下部層準よりフレイク、チップの遺物発見。発掘地周辺の地質層序と地質図の完成。第3回学習会(八ヶ岳周辺の遺跡、中村由克さん)。発掘中、駒出池造成に伴う遺物包含層の破壊箇所や斜面崩壊による流出箇所もみつきり、まとめの会では駒出池のような人手の入った場所の発掘には綿密な計画性が必要なことを確認しあった。

7月26日 発掘最終日。「モヤ」「デカパミローム」2層準の文化層の確認。駒出池溶岩とその上位にのる「オレンジパミス」の発見、「デカパミBII下半部」からの火山ガラス(池の平火山灰II)の発見。「デカパミローム」の分布等詳細な地質図づくりおよび遺跡の広がり等問題点を残す。まとめの会終了後、出浦団長、食事づくり等お手伝いをいただいた地元婦人らを変えて大コンパ。

7月27日 午前8時半より埋め戻し、午後後片付け。再会を期し解散。

(2) 第4回発掘 (1989年)

10月7日 きびしい日程のなか、午前から発掘準備。午後、岩波教育長(団長)参加の下、くわ入れ式。台風に刺激された秋雨前線の活動で、降り続く冷たい雨に進行が大幅におくれた。発掘グリッドはイ-21およびJ-48、K-48の3区画、3班。夕刻移動、八千穂村福祉センターにて

夕食後、運営委員会、団結コンパ。

10月8日 ほぼ終日曇天。寒さにふるえる。イー21グリッドにて礫群?を中心とした(尖頭器基部、スクレイパー、石核ほかを含む)生活面の発見。J-48グリッドにて縄文時代のピット発見。

10月9日 拡張したK-49グリッド(「デカパミローム」上～中部)から尖頭器4点をはじめとする200点ちかい遺物集中ブロックの出土、J-48グリッドから珪質頁岩製の二次加工のある剥片の出土。イー21グリッドでは、「モヤI～II」から礫群?に伴うブロックおよび縄文土器口縁部(諸磯b式)の出土。まとめの会終了後、岩波教育長、小宮山さん、食事作りでお世話いただいた須田加久代さん、佐々木あさよさん、佐々木美美子さん、富田かずえさんを交え打ち上げコンパ。

10月10日 午前発掘現場の埋め戻し後かたづけ、午後福祉センターに移動して後片付け。3時解散。

(3) 第5回発掘(1990年)

7月30日 前日集合の先発隊を中心に午前、発掘準備。午後昼食後、出浦団長出席の下くわ入れ式、のち発掘。発掘区画はJ-48、K-48、K-49、L-49、イー21の5区画、2班。K-49南側で尖頭器基部表採。午後8時より団結コンパ。今回から朝・夕食は自前で作るようになる。そのため食事係を設ける。

7月31日 晴天の下、発掘は順調に進んだ。K-49では前日とあわせて100点以上の遺物が出土。珪質頁岩製スクレイパー、黒曜石製尖頭器の未製品など。イー21では微細剥離痕のある剥片(「モヤI」中部)、ノッチ、コア(「モヤII」下部)ほかの遺物および礫群?(「モヤI」)の出土。広域調査により新たに石骨からも縄文早期～平安にいたる土器の発見。

8月1日 終日猛暑の下、K-49のブロックより珪質頁岩製尖頭器未製品、黒曜石製微細剥離痕のある剥片等出土。同ブロックの範囲確認のため発掘をL-49まで拡張、同ブロック完掘近し。イー21より片面調整の尖頭器基部、微細剥離痕のある剥片、石核(いずれも黒曜石)ほか出土。昼休みに麦草峠近くの黒曜石原産地の見学。

8月2日 連日の猛暑。K-49を中心とするブロックの範囲確認、完掘。スクレイパー等出土。イー21ではてまどっていた大量の礫群?の記載、採集が山を越える。スクレイパー、ノッチ、大型剥片等出土。

8月3日 発掘最終日。K-49を中心とするブロックの性格を確認する。同ブロックからの出土遺物の総点数は第4回発掘を含め674点。イー21からの出土遺物の総点数は同じく前回発掘を含めて1,197点。同グリッドの「デカパミローム」上面に配石および炉跡様の、炭質物を含む変色部分を発見。発掘による確認作業は次回に持ち越しになる。午後8時から地元報告会(30分)ならびに懇親会(大コンパ)。発掘の成果におおいに盛り上がる。

8月4日 埋めもどしおよび後片付け作業。午後、来年の発掘と再会を期して解散式。

(4) 第6回発掘(1991年)

10月9日 日中の短い時間を最大限に使い、限られた日数で発掘を終了させる目的のために、

参加者全員が発掘地のキャンプ場の施設、第1ヒュッテ(通称牧童小屋)とカマボコ型ヒュッテに宿泊して発掘を行う。なお、第1ヒュッテおよびカマボコ型ヒュッテは発掘終了後キャンプ場整備事業のためとりこわされた。午後集合、炊事用品、貸しふとん等の搬入、食事準備等。池の平タイムスをキャンプ地でも発行できるように廃棄前のコピー機を借用するも、不調。タイムス製作に苦勞する。

10月10日 午前、発掘の準備。発掘グリッドの設定(H-50、I-50、J-50、K-50の1×12mの細長いグリッドおよび第3回以降継続のイー21グリッド、2班)。午後、佐々木廣雄さん(八千穂村文化財調査委員)出席の下、くわ入れ式。後、発掘開始。

10月11日 終日冷たい雨。ビニールシートの簡易テントを設営、目標(1班は「礫群?」の完掘と「デカパミローム」層準の発掘、2班は「デカパミローム」層の完掘)めざし、意気たかく発掘続行。

10月12日 台風21号接近にともなう断続的な雨のなか発掘を続け、ほぼ目標を達成する。夕食後のまとめの会では第6回発掘のまとめとともに、その後の予定(研究成果報告書づくり、公民館保管の池の平遺跡出土遺物の整理作業など)について意見交換。まとめの会終了後コンパ、夜更けまで歓談、激論をまじえつつおおいに盛りあがる。

10月13日 台風一過、時折強風が吹くが晴れ間がみえる。朝食後、班毎に記載、断面図等の作成。10時のおやつ終了後、発掘グリッドの埋めもどしと後片付けおよび資材の撤収。昼食後、灯油ストーブ・コピー機等借用機材返却。ヒュッテ、管理棟のシャワー室、トイレ等キャンプ場施設の清掃後、公民館にもどって解散式。

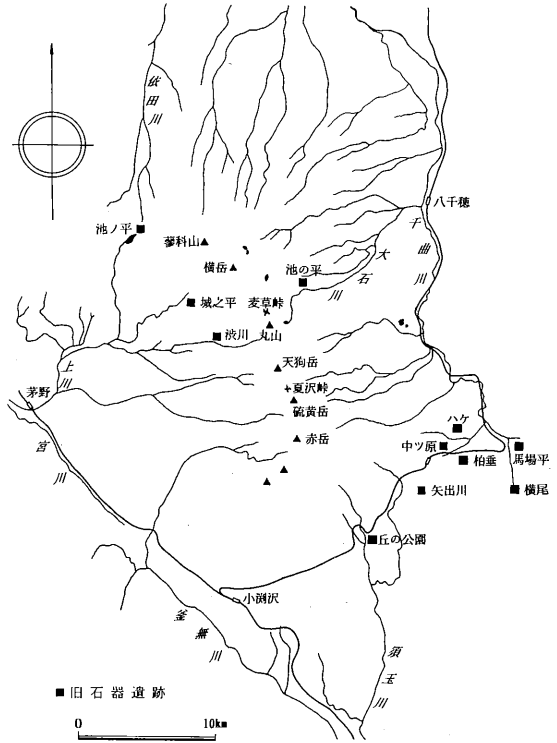
2 駒出池遺跡の立地

A. 地 形

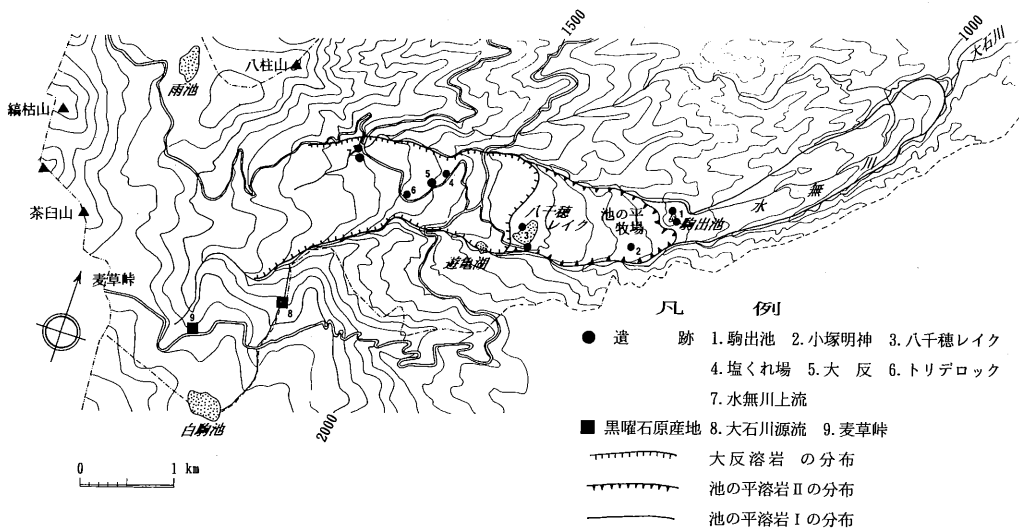
(1) 位 置

八千穂村池の平遺跡群は、長野県東部の八ヶ岳火山の北東麓に位置する(第3図)。この遺跡群は八ヶ岳火山の開析の進んだ山麓を東に向かって流下する水無川と大石川とに挟まれた標高1,800~1,100mの帯状の緩斜面上に立地している(第4図)。この緩斜面は平均傾斜6.7度で、ほぼ北東から東へ傾斜する池の平溶岩(八千穂村池の平遺跡発掘調査団, 1986)のつくる溶岩流原面である。

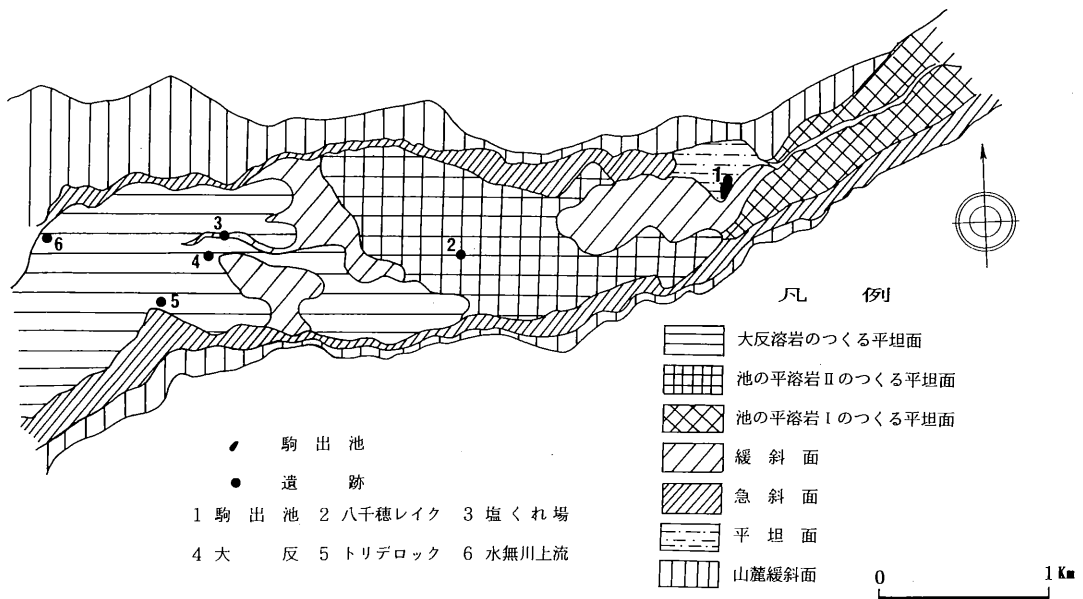
池の平溶岩面の上には、平坦な部分と比較的急な斜面が認められる。八千穂レイクの西側の斜面と駒出池の西側の比較的急な斜面をもって平坦面は三分される。この地形的特徴から池の平溶岩類は池の平溶岩Ⅰ・Ⅱ・大反溶岩の3つのflow unitsに区分される(池の平遺跡発掘調査団, 1986)。それぞれの溶岩流のつくる平坦な地形面は、それぞれ池の平Ⅰ面・池の平Ⅱ面・大反面と呼ばれる(第5図)。池の平Ⅰ面



第3図 池の平遺跡の位置



第4図 池の平周辺の地形と遺跡



第5図 池の平周辺の地形区分

は、標高1,300~1,100m北東に約5.0度で傾斜する緩斜面である。面上には水無川が流れるなど、池の平溶岩面の中では開析がもっとも進み、起伏に富んでいる。

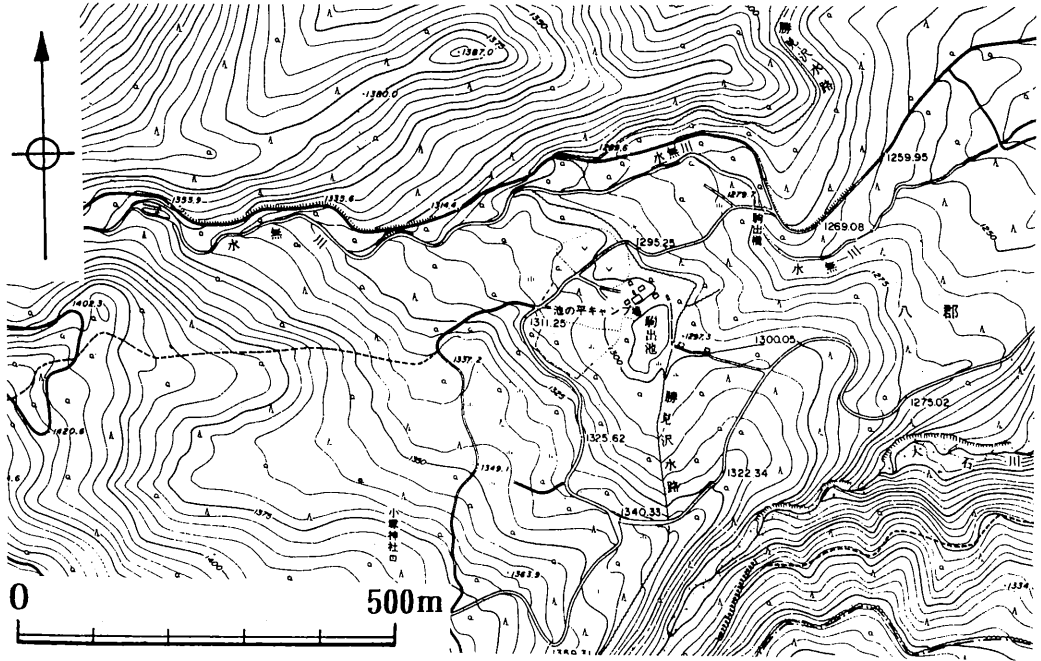
今回発掘を行った駒出池遺跡は標高1,300m、この池の平I面の西端部に位置し、行政区画上は南佐久郡八千穂村大字八ヶ岳下2049番地にあり、八千穂村営池の平キャンプ場の中に位置する。

(2) 駒出池発掘地の地形

第6図に駒出池遺跡周辺の地形図を示す。遺跡のすぐ西側は池の平溶岩IIのつくる溶岩末端崖となっている。駒出池は1958年（昭和33年）農業用水と観光を目的とし、周囲に堰堤を築いてつくられた人工の池である。池の平溶岩IIの末端から湧出している水量の豊かな湧水を利用したものである。この湧水は古くから存在していたと思われ、旧石器時代においてもこの周辺は湿地だった可能性が高い。この湧水のすぐ西側の部分は溶岩末端崖の中でも凹地になっている。周辺の地形から判断して、この凹地は溶岩トンネルの部分が陥没した跡の可能性が高いと思われる。

駒出池周辺は、緩く北西に傾く比較的広い平坦地となっており、すぐ北側を水無川が流れている。遺跡はその平坦地のほぼ中央部と駒出池の南東側に位置する。今回の発掘では、平坦地の中央に東北東にのびる低い尾根筋の南向きの緩斜面と、その尾根の東端部で池の平溶岩Iのつくる高まりの斜面から、遺物が集中して出土した。

湧水の存在や、平坦地を周囲にもつ南向きの緩斜面や溶岩のつくる高まりの存在などの地形的環境は、駒出池遺跡の性格を解明するための大きな手がかりと思われる。



第6図 駒出池遺跡周辺の地形

(3) 千曲川沿いの段丘地形

千曲川流域には後期更新世に形成された河岸段丘が発達している。とくに最上流部の川上村で模式的に段丘地形が発達しており、高位より大原面、大深山面、馬場平面、小川口面、沖積段丘面の5面に区分され、佐久ローム層との関係があきらかにされている(八ヶ岳団研, 1988・数土, 1990MS)。

八千穂村周辺にも千曲川に沿って5段の段丘面が確認できる。これらは、今回の発掘であきらかになった池の平周辺に分布する佐久ローム層の区分や年代を検討する上で大きな手がかりとな

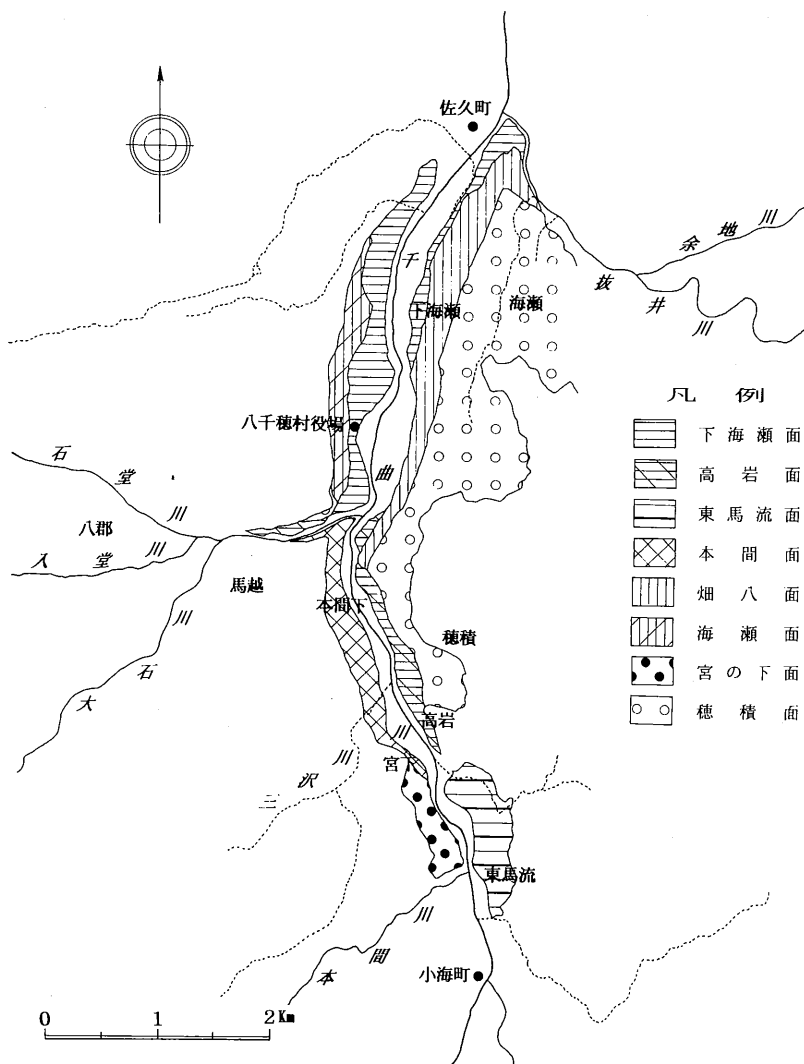
第2表 八千穂村千曲川流域の段丘面とその対比

八千穂村千曲川流域 (武智, 1989 MS; 田中, 1991 MS)			池の平周辺		川上村周辺 (数土, 1990 MS)			
比高(m)	左岸段丘面	右岸段丘面	被覆層	地形面	被覆層	段丘面	被覆層	比高(m)
50		穂積面	下部佐久ローム層 "八那池軽石流"	池の平I面	下部佐久ローム層 "オレンジバミス"	大原面	下部佐久ローム層 "オレンジバミス"	60-100
40	宮の下面		中部佐久ローム層 "Pm-1"	池の平II面	中部佐久ローム層 "Pm-1"?	大深山面	中部佐久ローム層 "Pm-1"	30-40
						馬場平面	中部佐久ローム層	20-40
15	畑八面	海瀬面	畑泥流 (上部佐久ローム層?)	大反面	上部佐久ローム層 (青スコローム)	小川口面	上部佐久ローム層	10-20
10	本間面		大月川泥流					
5		東馬流面 高岩面 下海瀬面	大月川泥流			沖積段丘面		5

る。さらに、大石川沿いの段丘を調査し、池の平遺跡群の広がりを検討していく上での基礎的な資料となると思われる。ここでは、八千穂村周辺の河岸段丘の概要を述べ、川上村地域の段丘面と池の平周辺の地形面との対比を検討する。

八千穂村周辺にみられる5段の段丘地形は、河床との比高や段丘を構成する礫層、これらを覆う地層の違いなどによりさらに8面に区分できる(第2表、第7図)。このうち、後期更新世に形成されたのは穂積面・宮の下面・畑八面・海瀬面で、本間面以下は完新世に形成された完新世段丘である。

穂積面は比高約50mの段丘面で、千曲川右岸の佐久町海瀬から八千穂村穂積にかけて発達する。海瀬付近では開析が進んでいるが、上流側では段丘面がよく保存されている。穂積面は穂積礫層(八ヶ岳団研, 1976)とこれを整合に覆う八那池軽石流(河内, 1961)により構成される。穂積

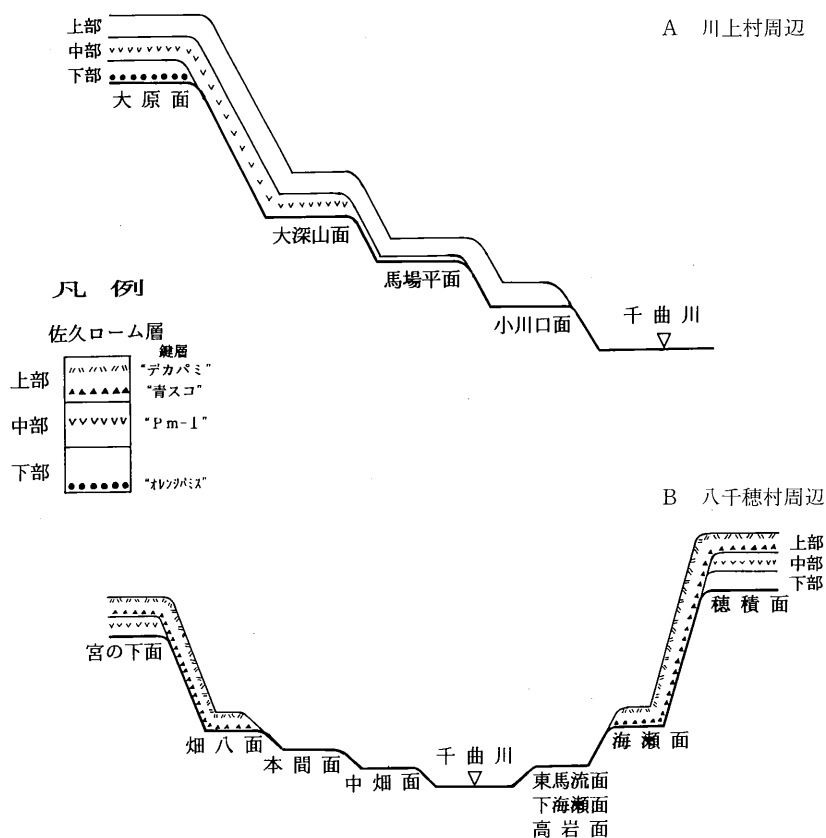


第7図 八千穂村周辺の段丘面区分

礫層は層厚30m、淘汰不良の亜円～円礫からなる。礫種の約80%は八ヶ岳起源の安山岩類、残りの約20%が関東山地起源のチャート・ホルンフェルス・花崗岩類などである。八那池軽石流は、灰白色～白色の角閃石輝石安山岩質の軽石を含む、紫灰色～青灰色の粗粒火山灰層である。模式地の八千穂村八郡では層厚70m以上、下部佐久ローム層に整合に覆われる。この八那池軽石流は、佐久町赤屋地域では水成層として認められるが、上流の八千穂村穴原では完全な水成層ではない。そのため、穂積段丘は上流側から徐々に離水したものと推定される。

宮の下面は比高40mの段丘で、千曲川左岸の小海町宮の下から同町馬流にかけて分布する。段丘面はほとんど開析されていない。宮の下面は宮の下礫層（河内，1974）により構成される。宮の下礫層は海の口泥流を非整合に覆い、層厚30m、淘汰不良の円～亜円礫からなる礫層である。礫種の約30%は八ヶ岳起源の安山岩類、約70%が関東山地起源のホルンフェルス・チャートなどである。宮の下礫層は海の口泥流を挟在し、中部佐久ローム層上半部に覆われている。

海瀬段丘は比高10～15mで、千曲川右岸の佐久町四ツ谷から八千穂村天神町にかけて、穂積面に沿って連続して発達する。海瀬面は海瀬礫層（武智，1989MS）により構成される。海瀬礫層は層厚4.5m、八ヶ岳起源の安山岩類を主体とする亜円～円礫層で、八千穂層群を不整合に覆い畑泥



第8図 千曲川流域の段丘面と被覆する佐久ローム層

流（田中，1991MS）により整合に覆われる。佐久町下新田・海瀬では、佐久ローム層上部と推定される風化火山灰層がこの面を覆っているのが確認できた。

畑八段丘は、比高15mの段丘で千曲川左岸の八千穂村下畑から清水町にかけて分布する。畑八礫層（北八ヶ岳グループ，1980）により構成される。畑八礫層は畑泥流（田中，1991MS）に整合に覆われる亜角～亜円礫層で、礫種の約30%が八ヶ岳起源の安山岩類、約70%が関東山地起源のホルンフェルス・スレート・チャートである。畑八礫層からは *Paleoloxodon naumanni* (MAKIYAMA) の臼歯*が産出している（北八ヶ岳サブグループ，1980）。

本間・中畑・東馬流・下海瀬・高岩の各段丘は、佐久ローム層に覆われないことや比高から完新世に形成された沖積段丘と判定できる。このうち、本間面と東馬流面はともに大月川泥流に覆われている。しかし、比高が異なることや大月川泥流の流下は何回もあったことから両者を区分した。高岩面と下海瀬面は比高が同じだが、分布域が離れているために区分した。しかしほぼ同じ時期に形成されたものと考えられる。

被覆する佐久ローム層の層位関係や比高から、川上地域や池の平遺跡群の立地する地形面との対比を試みる（第8図）。穂積面では“オレンジパミス”は確認されていないが、その下位の八那池軽石流を整合にのせている。池の平Ⅰ面は、今回の発掘で“オレンジパミス”に覆われていることがあきらかとなった。ともに下部佐久ローム層をのせている。よって穂積面・池の平Ⅰ面は大原面に対比される。

また、宮の下面は“Pm-1”以上の中部佐久ローム層をのせることから大深山面との対比ができる。また、池の平Ⅱ面を被覆する佐久ローム層は“Pm-1”以上の中部佐久ローム層とされ（池の平遺跡発掘調査団，1986）、池の平Ⅱ面も大深山面にはほぼ対比される。畑八・海瀬面は上部佐久ローム層をのせ、比高からも小川口面に対比される可能性が高い。大反面も上部佐久ローム層Ⅱ以上の層準に被覆されており、ほぼ小川口面に対比が可能である。しかし、鍵層による詳細な対比は今後の課題である。

B. 八千穂村の遺跡

(1) 八千穂村の遺跡の分布状況

八千穂村の遺跡は、千曲川とその支流による水系に規制された分布を示す。穂積地区を中心とした千曲川右岸地域、畑地区を中心とした千曲川左岸地域、大石川支流の石堂川流域地域、同じく入堂川流域地域、大石川流域地域、さらに大石川上流の池の平遺跡群の6地域がある。

①千曲川右岸地域：段丘面上に崎田原など4遺跡がある。崎田原遺跡は、1947年以降の開田工事で破壊されたが、1954年と1955年に一部緊急調査がおこなわれ、縄文時代中期・後期、弥生時代後期、および平安時代の遺跡であることが明らかになっている（五十嵐幹雄，1955・1958）。遺跡

*八木（1928）により *Elephas trogontherii* (POHLIG) とされたもの。

南部の下諏訪神社西側では、旧石器時代の尖頭器が採集されている。また、「信濃資料」によれば関谷遺跡で縄文時代前期・後期の土器とともに旧石器時代の尖頭器があることが、記載されている。

②千曲川左岸地域：千曲川ぞいの段丘面とその背後の平坦地に10遺跡がある。佐口遺跡、勝見沢遺跡は戦後の開田作業で主要部分が破壊された遺跡である。とりわけ勝見沢遺跡は、平安時代の八稜鏡、土師器などが出土しており、注目される。多くの遺跡は縄文時代と平安時代に属している。ムジナ沢、宮ノ入、細久保遺跡では、縄文時代前期前半の有尾式期に、上野月夜原、封地、月夜平遺跡では、中期後半の加曾利E式期に、そして竹ノ下、封地、月夜平遺跡では後期に属す。

③石堂川流域地域：4遺跡あり、どこも縄文時代前期の有尾式期をはじめりとしている。鶯の口遺跡は、縄文時代前期・中期と平安時代の遺物の多い遺跡である。

④入堂川流域地域：10遺跡あり、大規模な遺跡が多い。中松井遺跡は1952年開墾により発見され、同年10月に発掘調査がおこなわれ、縄文時代早期末の条痕文系土器、前期初頭の花積下層式土器、後期、および平安時代の土師器、須恵器などが出土し、条痕文土器の竪穴住居址1基が検出された（竹内恒・五十嵐幹雄，1952）。東松井遺跡では縄文時代早期前半の押型文土器、前期前半の花積下層式土器と有尾式土器、前期後半の上原式土器、そして中期初頭と後半の土器、さらに平安時代の土師器、須恵器などが出土している。一軒家遺跡では、縄文時代早期前半の押型文土器、早期末の条痕文土器、前期の花積下層式土器、有尾式土器、中期の加曾利E式土器、後期の堀ノ内式土器、平安時代の土師器、須恵器などが出土している。これら入堂川流域の遺跡は、佐々木広雄氏の調査によるものが多い（長野県史・考古資料編）。

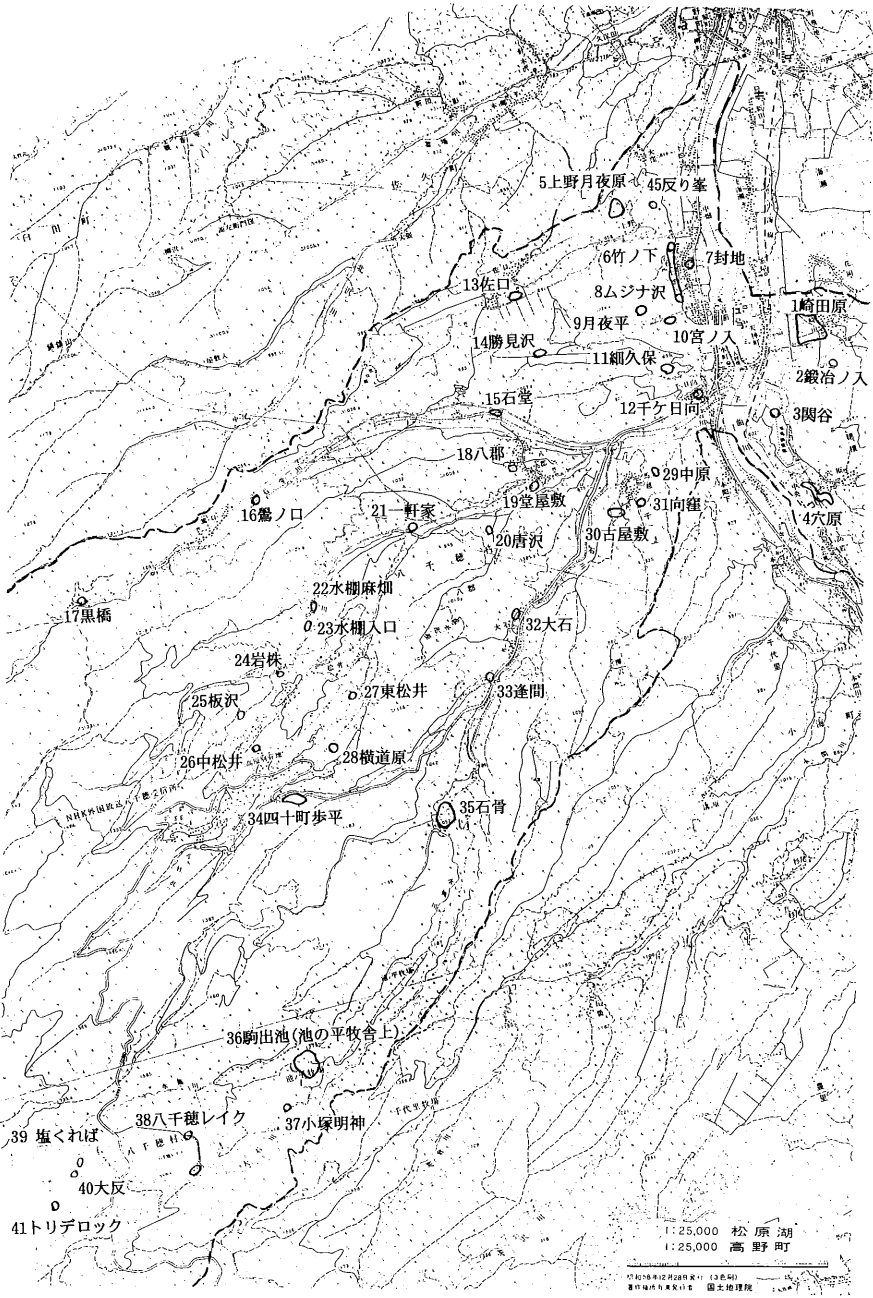
⑤大石川流域地域：6遺跡ある。大石遺跡は大石川左岸の段丘上に立地する縄文時代中期後半の加曾利E式と後期の堀ノ内式の時期の遺跡である。1987年島崎和夫氏宅の工事中に旧石器時代末の尖頭器が発見されている。四十町歩平遺跡は、今回の調査で発見された遺跡である。

⑥池の平遺跡群（大石川上流地域）：村内のほかの地域と異なり、八ヶ岳に近く標高の高い地域に位置し、まわりの山地に比べて相対的になだらかな緩斜面をつくる池の平溶岩の流下域に分布する。これまでに10遺跡が知られている。ナイフ形石器文化のトリデロック遺跡、八千穂レイク遺跡、旧石器時代末～縄文草創期の駒出池（池の平牧舎上）、塩くれば、大反遺跡などの旧石器時代を中心とした多くの遺跡が分布する。

石骨遺跡は、溶岩流の末端に位置する縄文時代早期・前期末・中期後半・後期を中心とする大規模な遺跡である。今回の調査で発見された。

(2) 八千穂村の遺跡の時代的な特徴

今回までの調査で八千穂村の遺跡は、44ヶ所確認されている。旧石器時代に属す遺跡は、池の平遺跡群に多いが、ほかに大石川流域と千曲川左岸にも分布する。今のところ最も古い遺跡は、ナイフ形石器文化に属すと思われる八千穂レイク遺跡とトリデロック遺跡である。このほかの遺跡は、ほとんどが旧石器時代末期の尖頭器文化に属すものである。尖頭器文化の一部は、縄文時



第9図 八千穂村遺跡分布図

第3表 八千穂村遺跡一覧表

No.	遺跡名	旧石器 ~草創期	早期	前期	中期	後期	晩期	時期不明	弥生	古奈 墳良	平安	中世
千曲川右岸地域												
1	崎田原	○尖頭器			○勝坂 加曾利E	○加曾利B			○箱清水		○土師 須恵	
2	鍛冶ノ入				○加曾利E						○土師 灰釉	
3	関谷	○尖頭器		○黒浜	○勝坂 加曾利E							
4	穴原				○加曾利E							
千曲川左岸地域												
5	上野月夜原				○加曾利E						○土師	
6	竹ノ下					○堀ノ内 加曾利B	○氷			○須恵	○土師	
7	封地				○加曾利E	○後期後半					○土師	
8	ムジナ沢		○神ノ木 有尾								○土師	
9	月夜平				○加曾利E						○土師	
10	宮ノ入		○有尾								○土師	
11	細久保		○有尾 下島								○土師	
12	千ヶ日向							○石鉄				
13	佐口							○石鉄				
14	勝見沢							○耳栓			○土師 八後鏡	
石堂川流域												
15	石堂			○有尾								○五輪塔
16	鶯ノ口			○有尾	○加曾利E						○土師 須恵	
17	黒橋			○有尾								
18	八郡			○有尾								
入堂川流域												
19	堂屋敷										○土師 須恵	
20	唐沢										○土師 須恵	
21	一軒家	○押型文 条痕文		○有尾	○加曾利E	○堀ノ内					○土師 須恵	
22	水柵麻畑			○花積下層 有尾	○加曾利E	○加曾利B					○土師 須恵	
23	水柵入口			○花積下層 有尾 南大原 上原 下島	○加曾利E							
24	岩株			○有尾	○加曾利E						○土師 須恵	
25	板沢							○石鉄				
26	中松井	○条痕文		○花積下層		○後期					○土師 須恵	
27	東松井	○押型文		○花積下層 有尾 上原	○中期初頭 加曾利E						○土師 須恵	
28	横道原							○石鉄	○磨製石鉄			
大石川流域												
29	中原							○垂玉				
30	古屋敷							○石皿				
31	向窪							○打石斧				
32	大石	○尖頭器			○加曾利E	○堀ノ内						
33	逢間										○土師 須恵 灰釉陶器	
34	四十町歩平	○尖頭器										
池ノ平遺跡群 (大石川上流)												
35	石骨		○条痕文		○中期	○堀ノ内					○土師	
36	駒出池 (池の平牧舎上)	○尖頭器		○諸磯B								
37	小塚明神	○(剥片)										
38	八千穂レイク	○ナイフ 尖頭器										
39	塩くれば	○尖頭器										
40	大反	○尖頭器										
41	トリデロック	○ナイフ 尖頭器	○条痕文									
42	水無川上流 (湧水地点)	○(剥片)										
43	麦草峠	○尖頭器										
44	白駒池	○?										

代草創期に入るものもあると思われる。

縄文時代の遺跡では、一軒家遺跡と東松井遺跡の早期前半の押型文土器が最も古く位置づけられる。早期末の条痕文系土器は、一軒家、中松井、石骨、トリデロックなどの遺跡で出土している。これまで茅山式とされていたものであるが、表裏に条痕文があり、胎土には繊維を多く含み、中には絡条体圧痕文が施されたものがみられ、長野県・新潟県などで早期末に特徴的な土器である。

縄文時代前期から後期の遺跡は、村内全般にみられる。しかし、縄文時代の晩期から奈良時代にかけては、遺跡があまり知られていない。平安時代になると再び村内全域に遺跡が分布する。縄文時代の後半から古墳・奈良時代の遺跡が減少する傾向は、野尻湖周辺でも認められ、長野県内の山間部に多くみられる現象と思われる。

なお、一覧表以外で、中世の城跡として馬越城跡（馬越）、通城跡（八郡）、佐口城跡（佐口）、大石川烽火台、権現山砦、下畑城跡（下畑）、下畑下の城跡、蟻城跡（穴原・崎田）などがある（長野県教育委員会，1983；井出正義，1990）。

3 地 質

A. 地質概要

駒出池遺跡は八ヶ岳の東側の中腹に位置し、その立地は八ヶ岳火山の生い立ちと深くかかわっている。八ヶ岳火山は長野県の中央部に位置し、東西35km、南北60kmほどの広さをもつ火山群から構成される。山稜部には標高2,000mを越える約30もの峰が見られ、南北21kmにおよぶ火山列をなしている。

八ヶ岳火山の活動期は河内（1961）により研究され、山麓面を形成した火山活動の休止期を境に古八ヶ岳期と新八ヶ岳期に区分されている。古八ヶ岳期の火山活動は0～2期に区分され、活動が北八ヶ岳で始まり、東列に沿って南部に活動の場が移動した。新八ヶ岳期は1～6期に区分され、南八ヶ岳の赤岳周辺で活動が始まり西列に沿って北八ヶ岳に活動の場が移動し、約2万年前に横岳の活動をもって終息したとされている。

八ヶ岳団体研究グループ(以下、八ヶ岳団研と呼ぶ)は八ヶ岳山麓や周辺山地に堆積した噴出物の層序と周辺地域の鮮新-更新統を調べ、第四系の層序区分をおこなった。八ヶ岳団研（1982, 1988）によれば、これらの第四系は前期更新世から後期更新世に堆積した風成風化火山灰層（いわゆるローム層）と同時期の水成層からなる（第4表）。

八ヶ岳山麓および周辺地域の風成火山灰層は、前期～中期更新世に堆積した八千穂ローム層・松井ローム層および広瀬ローム層と後期更新世に堆積した佐久ローム層からなる。八ヶ岳山麓の水成層は、鮮新世末から前期更新世に堆積した八千穂層群・松井くされ礫層および中期更新世に堆積した南佐久層群と後期更新世に堆積した低位段丘面構成層および完新統からなる。これらの地層に挟まれた八ヶ岳および周辺火山から噴出した火山灰層は、風成層と水成層を対比する上で有効な鍵層になっている。

第4表 八ヶ岳山麓の第四系層序表

年 代	地 層 層 序	ローム層							
		区 分	鍵 層						
第 四 紀	完新世	完新統							
		後 期	低位III段丘面構成層	佐久ローム層	ヌカバミ 青スコ S-1 Pm-3 Pm-2 B Pm-1 A・B ヒゲバミ (Pm-1') Sandy Pm. (Dpm)				
			低位II段丘面構成層						
	低位I段丘面構成層		オレンジバミス						
	中 期	南佐久層群	野辺山原 泥流	広瀬ローム層	タマスコゾン ニセタマスコ Up.Oil.Py.S. ゴマバミ フルーグラス Lw.Oil.Py.S. Up.O.P. B.B.P Lw.O.P. パンバミ Lw.st.O.P. Bio.ローム Py.炭Pm. チヌスコ クリタマ Ol.Py.CA B ₃ B ₂ Ho.白Pm. B ₁				
			最 上 部						
			上 部		III II I				
			中 部		III II I				
			下 部		IV III II I				
			最 下 部						
			前 期		松井くされ礫層	榊ローム層	八千穂ローム層	白ツブ ゴマフリ どぶろく ゴマバミ シノコシ ウチボレオン obスコ キチバミス ウツワ	
								上 部	上野タフ 松吹塔 黄タカ
								中 部	旭ヶ岳クワリ(パール) 湯原バミス だんごバミス
			後 期		八千穂層群	榊ローム層	八千穂ローム層	ボタンユキ 三彩タフ キダバミ	
								下 部	
最 下 部									
鮮新世	布 引 層								

八ヶ岳山麓の溶岩類などからなる火山噴出物は、八千穂層群および南佐久層群に挟在し、後期更新世に噴出した溶岩類は北八ヶ岳では池の平溶岩、大反溶岩などからなる。これらの溶岩類には八ヶ岳および周辺火山より供給された火山灰層が被覆し、火山噴出物を対比する上で有効な鍵層になっている。

八ヶ岳東麓の佐久ローム層は、下位より下部・中部・上部・最上部層に区分される。また池ノ平遺跡発掘調査団（1986）は、大反・塩くれば遺跡周辺に分布する上部～最上部佐久ローム層を細分し、砂粒組成や火山ガラスの屈折率、全窒素量などを併せて検討した。その結果、上部佐久ローム層をⅠからⅤに、黒色火山灰層をⅠ・Ⅱ・Ⅲに区分した。また、地形的特徴や被覆するローム層との関係から、池の平溶岩類を大反溶岩・池の平溶岩Ⅰ・Ⅱに細分した。佐久ローム層の砂粒組成は模式地の小海町八那池と発掘地に分布するローム層で検討され、上部佐久ローム層Ⅲ～Ⅴは砂粒組成の特徴に基づき a～h 帯に分帯した。池ノ平遺跡発掘調査団（1986）および近藤（1988）は上部佐久ローム層Ⅳの火山ガラス含有層準を検討し、3層準みられる火山ガラス密集帯を“池の平火山灰Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ”と呼んだ。

駒出池発掘地は、八千穂層群が侵食されて形成された谷筋を流下した池の平溶岩Ⅰの上に位置し、池の平溶岩の上を佐久ローム層が覆っている。

B. 発掘地の地質

駒出池発掘地では、試掘溝の壁面で池の平溶岩Ⅰ（池の平遺跡発掘調査団，1986）の上位に層厚2mの佐久ローム層および黒色火山灰層

を確認した。発掘地が尾根筋ということもあり、風成火山灰層の発達がグリッドごとに変化し、大反・塩くれば遺跡で確認された層序にくらべ欠如している部分も多い。今回の発掘の試掘溝壁面で確認された地質層序を第10図に示す。確認した佐久ローム層は下部佐久ローム層と上部佐久ローム層Ⅲ～Ⅴに区分され、上部佐久ローム層ⅢとⅤの下底は斜交関係を伴う不整合によって下位層と接している。上部佐久ローム層の上位には、暗褐色～黒色の風化火山灰層が見られる。これらは黒色火山灰層ⅠとⅢに区分される。

時代	層序区分	模式柱状図	鍵層名	層厚 (cm)	層相	
完 新 世	埋土			50	ローム層のブロックを含む埋土層	
	Ⅲ		黒色土	13	暗灰色細粒火山灰質土層	
	Ⅰ		モヤⅡ	14	暗褐色風化火山灰層	
			モヤⅠ	20	黒黄褐色風化火山灰層	
後 期 更 新 世	佐久ローム層		デカバミローム	12	黄灰褐色軽石まじり風化火山灰層 黄橙色軽石や黒曜岩片を含む	
			Ⅱ	B 上半部	8	黄橙色軽石を含む黄褐色風化火山灰層
				Ⅱ 下半部	9	黄橙色軽石を含む黄褐色風化火山灰層 上位に細粒ガラス質火山灰層を挟在
			B Ⅰ	25	黄橙色軽石層 黒曜岩片を含む	
			A	7	黄橙色軽石を含む黄褐色風化火山灰層	
	Ⅲ		青スコローム	50	スコリアまじりの黄褐色風化火山灰層	
	下部		オレンジバミス	30	赤褐色軽石層と紫灰色粗粒火山灰層の互層	
池の平溶岩Ⅰ			100+	かんらん石複輝石安山岩質溶岩		

第10図 発掘地の地質層序

(1) 地質各説

①池の平溶岩 I

かんらん石複輝石含有安山岩質溶岩で、発掘地周辺から水無川下流の池の平 I 面を構成している。発掘地の東側、ア-12、イ-21グリッドで確認された。

池の平溶岩は河内（1974）により命名されたが、池の平遺跡発掘調査団（1986）は地形的特徴や被覆層との関係から池の平溶岩 I、II、大反溶岩に細分した。八ヶ岳団研（1988）は、池の平溶岩を“Pm-1A”を挟在する中部佐久ローム層 II に整合に覆われる溶岩とした。しかし、今回の調査により、池の平溶岩 I は“オレンジパミス”を挟在する下部佐久ローム層に、池の平溶岩 II は“Pm-1”を挟在する中部佐久ローム層 II にそれぞれ整合に覆われることが明らかとなった。

②下部佐久ローム層

発掘地に分布する本層は両輝石安山岩質スコリアと紫灰～黄褐色粗粒火山灰層の互層である“オレンジパミス”および風化火山灰層からなる。本層は、イ-21グリッドにおいて、池の平溶岩 I のくぼんだ部分において確認された。層厚は30cm+である。

③上部佐久ローム層

上部佐久ローム層 III は暗褐色風化火山灰層からなり、青灰色火山岩片を含む粗粒な風化火山灰層の層相を呈する。上部佐久ローム層 III の下底は斜交関係を伴う不整合によって下位層と接しており、中部佐久ローム層から上部佐久ローム層 II の層準は発掘したグリッドの試掘溝では確認できなかった。層厚は50cmである。

上部佐久ローム層 IV は、“デカパミ”と呼ぶ発泡のよい両輝石安山岩質の橙色軽石を主体とする地層である。これらは A 層と B 層に区分され、B 層はさらに下位より I、II に細分される。A 層は粒径10～20mm程度の橙色軽石まじりの灰褐色ローム層からなる。層厚は7cmである。B I 層は明橙色降下軽石層からなり、軽石の粒径は30～40mmである。黒曜岩片を含み、軽石の隙間に充填物は見られない。層厚は25cmである。B II 層は層相により上・下半部に細分される。B II 層下半部は橙色軽石を含む灰褐色風化火山灰層からなる。層厚は9cmである。本層は火山ガラスを多く含み、発掘地周辺では同層準に細粒ガラス質火山灰層がレンズ状に挟在することが観察される。この火山灰層は“池の平火山灰 II”にあたり、火山ガラスの形態や屈折率は“始良 Tn 火山灰”に類似している。B II 層上半部は橙色軽石を含む灰褐色風化火山灰層からなる。層厚は8cmである。

上部佐久ローム層 V は軟質の黄褐色細粒風化火山灰層からなり、橙～黄色軽石や赤色スコリアを多く含む。層厚は12cmである。上部佐久ローム層 V の下底は斜交関係を伴う不整合によって下位層と接している。駒出池発掘地の本層は大反・塩くれば遺跡周辺に分布する上部佐久ローム層 V “デカパミローム”に対比される。

④黒色火山灰層 I

駒出池発掘地周辺では、上部佐久ローム層の上位に固結の悪い暗褐色風化火山灰からなる本層が重なっている。層厚34cmである。大反遺跡で確認された、いわゆるソフトロームの層相を呈す

る最上部佐久ローム層は認められない。本層の境界は不明瞭で上下の地層に漸移している。本層は色調により暗黄褐色を呈する“モヤⅠ”と暗褐色を呈する“モヤⅡ”に細分される。しかし両者は層準として確実なものではなく、風化火山灰層を母材に土壤化作用により形成された堆積物の可能性もある。

⑤黒色火山灰層Ⅲ

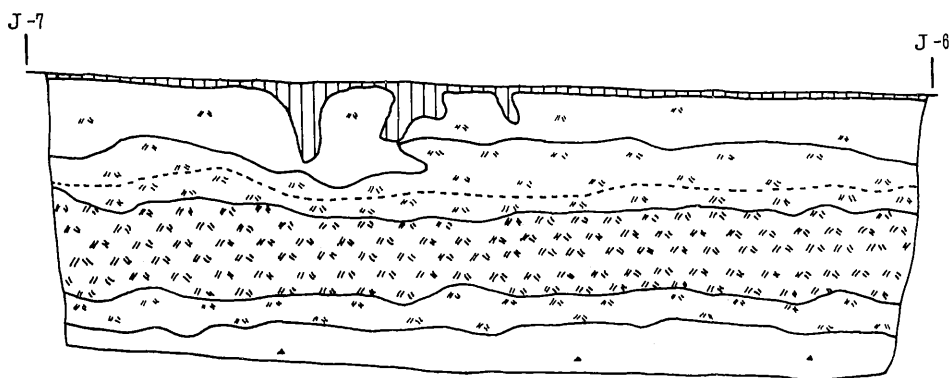
駒出池発掘地周辺では、黒色火山灰層Ⅰの上に軽石粒を含み、空隙の多い軽い黒褐色火山灰層が直接のってきている。層相および現在の表土層を構成していることなどから黒色火山灰層Ⅲに對比されるものと考えられる。大反・塩くれば発掘地で確認された“こしあんアッシュ”と呼ぶ鍵層を挟む、黒色火山灰層Ⅱは今回確認することはできなかった。

(2) 各グリッドの地質の特徴

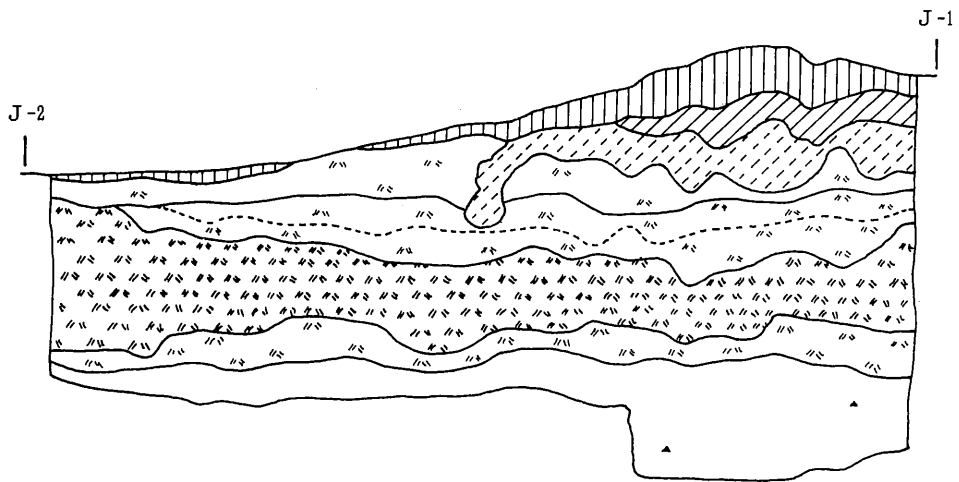
発掘地西側のJ-6グリッドでは、下位より上部佐久ローム層Ⅲ・Ⅳ・Ⅴがほぼ水平に堆積しており、駒出池発掘地の模式的な地質断面となっている(第11図)。上部佐久ローム層ⅣBⅡは下半部と上半部に区分され、上半部下底付近は火山ガラスを多く含む。

発掘地中央部のJ-1、K-48、K-49グリッドでは下位より上部佐久ローム層Ⅲ・Ⅳ・Ⅴが堆積しており、J-1グリッドでは黒色火山灰層Ⅰがみられる。上部佐久ローム層Ⅴは下位の上部佐久ローム層と斜交しながら堆積しており、上部佐久ローム層Ⅴと下位層の関係を示す模式的な地質断面となっている(第12・13図)。

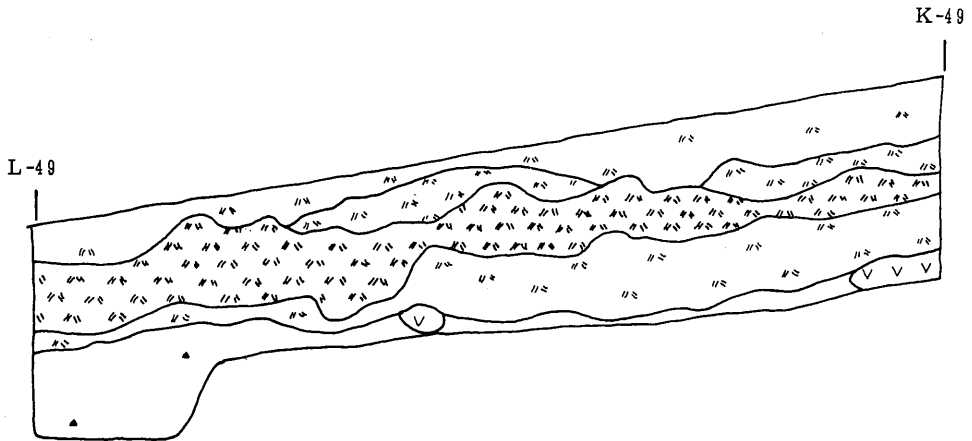
第14・15図に示すように、発掘地東側のア-12、イ-21グリッドでは下位より池の平溶岩Ⅰ、下部佐久ローム層、上部佐久ローム層Ⅴが堆積しており、イ-21では黒色火山灰層Ⅰが見られる。上部佐久ローム層Ⅴおよび黒色火山灰層Ⅰは、下位の下部佐久ローム層や上部佐久ローム層Ⅲを覆って堆積している。発掘地東側のグリッドは池の平溶岩Ⅰが露出する尾根の斜面にあたり、堆



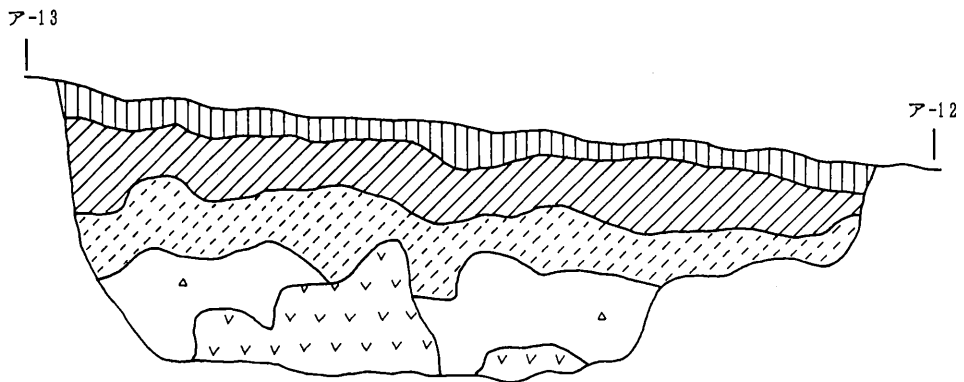
第11図 J-6グリッド北側の壁面のスケッチ



第12図 J-1グリッド北側の壁面のスケッチ

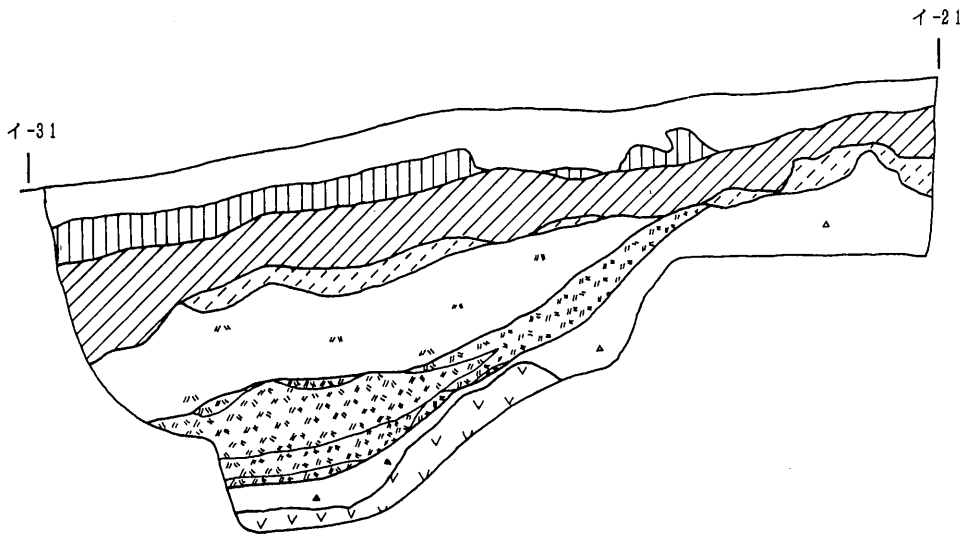


第13図 K-48グリッド南側の壁面のスケッチ



第14図 A-12グリッド北東側の壁面のスケッチ

積物は溶岩上の凹凸を埋めるように堆積し、傾斜もしている。またかなりの削剝を受けており、発掘地中央部の模式層序とは異なっている。



第15図 イ-21グリッド北西側の壁面のスケッチ

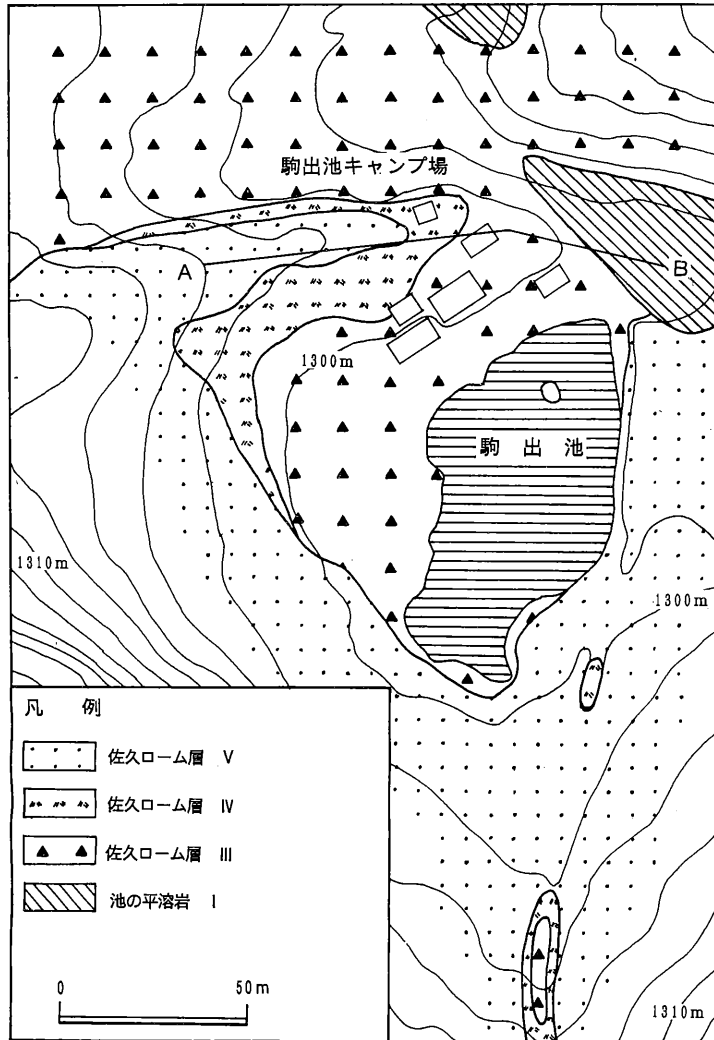
(3) 発掘地周辺の地質

駒出池発掘地周辺の地質図および断面図を第16図、第17図に示す。

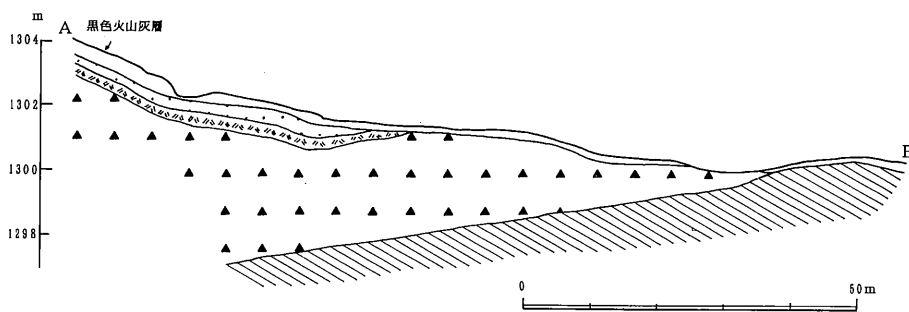
池の平溶岩 I は、発掘地の東側の尾根付近で地表に露出しているが、発掘地周辺では佐久ローム層に被覆されている。発掘地の南西方向の斜面は池の平溶岩 II の溶岩末端崖にあたり、その比高は約40mほどである。

発掘地は池の平溶岩 II の溶岩末端崖と池の平溶岩 I が露出する尾根に挟まれた、池の平キャンプ場の施設が点在する駒出池北側の尾根上に立地している。発掘地の尾根にみられる池の平溶岩 I は、地表の地質調査とハンドオーガーによる調査により、尾根東側の地表から西に向かって深さ 5 m まで傾斜しながら分布している。駒出池周辺の平坦地形は池の平溶岩 I、池の平溶岩 II のつくる原地形をうめた下部佐久ローム層以上の風成火山灰層により形成され、その分布は溶岩の侵食谷地形に大きく影響されていると考えられる。

上部佐久ローム層 IV 以上の地層は、発掘地周辺の尾根および駒出池南方の斜面に沿って分布しており、その分布は原地形にほぼそったものである。



第16図 駒出池発掘地周辺の地質図



第17図 駒出池発掘地周辺の地質断面図

C. 佐久ローム層および黒色火山灰層の標準層序

ここでは、遺物包含層の年代を検討する上で必要となる八千穂村周辺の佐久ローム層の層序について述べる(第18図)。以下、各部層ごとに記載するが模式地は小海町八那池および五箇付近である。佐久ローム層は八ヶ岳団研(1976)によって命名され、八ヶ岳団研(1988)は八ヶ岳山麓に広く分布する本層の詳細な層序を記載した。

(1) 下部佐久ローム層

中部更新統を不整合に覆い、八那池軽石流を整合に覆う風化火山灰層である。

分布：南佐久郡八千穂村千曲川右岸の穂積段丘面上、八ヶ岳山麓部と関東山地内の平坦面および斜面に分布する。

層厚：模式地で3m

層相：佐久ローム層の中で最も粘土化が進んだ暗褐色～紫灰色の細粒風化火山灰層からなり、東麓地域では発達が良い。本層最上部は粘土化の著しく顕著な風化帯がみられる。

鍵層：本層には八ヶ岳起源の黒灰色粗粒火山灰層と発泡のよい両輝石安山岩質スコリア層の互層である“オレンジパミス”と呼ばれる降下火砕物を挟在する。“オレンジパミス”は硫黄岳付近から噴出したとされている(八ヶ岳団研, 1988)。

(2) 中部佐久ローム層

下部佐久ローム層を非整合に覆う風化火山灰層である。層相により下位からIとIIに細分される。

分布：穂積段丘面上、南佐久郡八千穂村千曲川左岸の宮の下段丘面、大石川沿いの八郡段丘面、八ヶ岳山麓地域と関東山地内の平坦面および斜面に分布する。

層厚：模式地で3.5m

層相：暗褐色から褐色の細粒風化火山灰層からなる中部佐久ローム層Iは赤褐色スコリア、青灰色から灰色の火山岩片が点在する。下位より軽石質粗粒火山灰層の“Sandy Pm”や軽石質細粒火山灰層“ヒゲパミ(Pm-1)”(松本盆地団体研究グループ・木曾谷サブグループ, 1985)を挟在する。

灰褐色から褐色の細粒風化火山灰層からなる中部佐久ローム層IIは赤褐色スコリア

時代	層序区分	模式柱状図	鍵層名	層厚 (cm)	層相
完 新 世	III			20	黒褐色細粒火山灰層
	II		こしあんアッシュ	48	植物片を含む黒色火山灰層 火山ガラスを含む灰褐色火山灰層を挟在する
	I			40	黒灰色火山灰層
後 久 期 更 新 世	最上部				固結の悪い黄褐色風化火山灰層 黄灰褐色風化火山灰層 黄褐色軽石や黒曜岩片を含む 上位はやや土壌化した暗黄褐色風化火山灰層からなる
	V				黄褐色軽石や黒曜岩片を含む黄褐色風化火山灰層や黄褐色軽石層からなる ガラス質火山灰層を挟在する
	IV		池の平火山灰II デカパミ	150	
	III				スコリアまじりの黄褐色風化火山灰層
	II		青スコ		青灰色火山礫まじり粗粒火山灰層
	I		S-1 Pm-3 Pm-2B Pm-1	200	黄褐色風化火山灰層からなる スコリアや軽石を含む 火山ガラスを含む層帯がみられる
	II		ヒゲパミ Dpm	150	暗灰褐色粘土質細粒風化火山灰層からなる 上位には風化帯がみられる
	I		オレンジパミス	300	黄灰色細粒風化火山灰層 上位には風化帯がみられ、粘土化が著しく埋没土壌層と考えられる
	下部				

第18図 佐久ローム層の標準層序

や青灰色岩片が点在し、下位より繊維状の発泡を呈した黒雲母角閃石含有黄白色軽石層“Pm-1”軽石質粗粒火山灰層の“Pm-2B”や軽石質火山灰層“Pm-3”を挟在する。

鍵層：中部佐久ローム層Ⅰの“Sandy Pm”は立山火山を噴出源とする“Dpm”（中谷，1972）に対比される（八ヶ岳団研，1988）。中部佐久ローム層Ⅰの“ヒゲパミ”や中部佐久ローム層Ⅱの3層準の軽石層および軽石質火山灰層は木曾御岳火山起源の降下火砕堆積物であるとされている（信州研究グループ，1969．八ヶ岳団研，1988）。

池の平遺跡発掘調査団（1986）は八那池周辺の佐久ローム層の砂粒組成の検討により、“Pm-2B”の直下と“Pm-3”の下位にバブルウォール型火山ガラスの含有層準を認めている。木村（1987）はこれらの火山ガラスの含有層準をK-Tf、O-Tfに対比した。

（3） 上部佐久ローム層

中部佐久ローム層を非整合に覆う風化火山灰層であり、層相によって上部佐久ローム層Ⅰ～Ⅴに区分される。

分布：南佐久郡八千穂村千曲川左岸の畑八段丘面、八ヶ岳山麓と関東山地内の平坦面および斜面に分布する。

層厚：模式地で1.5m

層相：上部佐久ローム層Ⅴは、褐色細粒風化火山灰層からなり下位の中部佐久ローム層最上位の風化帯を覆っている。本層の下底には赤褐色スコリア層の“S-1”が見られる。上半部は安山岩質岩片や青灰色火山岩片が目立つ風化火山灰層からなり、最上位に紫灰色細粒火山灰層および黄色細粒軽石層が見られる。層厚は模式地で80cmである。

上部佐久ローム層Ⅱは、黄白色軽石粒を含有する輝石含有青灰色火山礫まじりスコリア層の“青スコ”（塩川団研グループ，1976）からなる。層厚は模式地で40cmである。

上部佐久ローム層Ⅲは暗褐色細粒風化火山灰層からなり、下半部に青灰色火山岩片が散在する。本層中位は、鉱物の含有量が多い風化火山灰層であり、やや粗い層相を呈する。層厚は模式地で80cmである。

上部佐久ローム層Ⅳは、発泡のよい橙色軽石層である“デカパミ”（飯島ほか，1968）からなる。軽石粒の間には黒色火山砂や風化火山灰層が充填されており、黒曜岩片が含まれる。本層の層厚は模式地では40cmである。本層は軽石まじりの風化火山灰層からなるA層、降下軽石層のBⅠ層、細粒ガラス質火山灰層および火山ガラス・軽石まじりの風化火山灰層からなるBⅡ層に細分されている。また、上部佐久ローム層Ⅳの火山ガラス含有層準は大反・塩くれば発掘地ではA層とBⅡ下半部の2層準が確認されている。

上部佐久ローム層Ⅴは軟質の黄褐色細粒風化火山灰層からなり、黄色軽石や赤色スコリア、青灰色岩片が点在する。層厚は模式地で20cmである。池の平遺跡発掘調査団（1986）は、池の平遺跡周辺に分布する上部佐久ローム層Ⅴを層相により、軽石まじりの風化火山灰層からなる“デカパミローム”、土壌化した暗褐色風化火山灰層からなる“黄モヤ”に細分した。大反・塩くれば発

掘地の上部佐久ローム層Ⅴ中には尖頭器を主体とする旧石器遺物包含層が確認されている。

鍵層：上部佐久ローム層Ⅰの“S-1”は木曾御岳火山起源の降下火砕堆積物であるとされている（信州研究グループ，1969）。“青スコ”と“デカパミ”は八ヶ岳火山を噴出源とする降下火砕物で、分布は八那池から抜井川にかけての地域に限られる。稲垣（1972MS）は“デカパミ”の噴出源を八柱山西方の雨池付近であると推定している。池の平遺跡発掘調査団（1986）は八那池周辺の佐久ローム層の砂粒組成の検討により、上部佐久ローム層Ⅲの中部に斜方輝石、角閃石、斜長石を多く含有する分帯bを記載している。この分帯bに含まれる斜方輝石は（100）面の発達した扁平な晶癖を持ち八ヶ岳起源のものとは区別が可能である。こうした特徴をもつ斜方輝石は大山倉吉軽石層（DKP：町田・新井，1992）に含まれる。この分帯bの層準は、広域火山灰の“DKP”に対比される可能性が高い。また、池の平遺跡発掘調査団（1986）は上部佐久ローム層Ⅳ中に扁平型の火山ガラスの密集層を確認し、池の平火山灰層Ⅰ～Ⅲと命名した。

（4）最上部佐久ローム層

最上部佐久ローム層は、上部佐久ローム層を斜交関係で覆う軟質の風化火山灰層で黒色火山灰層に斜交関係で覆われる。

分布：ソフトローム段丘（八ヶ岳団研，1978）以上の段丘面上に極めて局所的に分布する。

層相：固結の悪い風化黄褐色火山灰層からなり、上半部には風化した部分がみられる。

層厚：模式地の池の平大反で5～20cmである。

鍵層：明瞭な鍵層は確認されていない。

（5）黒色火山灰層

八ヶ岳山麓に分布する完新世に堆積した火山灰層は黒色火山灰層と呼ばれている（八ヶ岳団研，1976・1988）。本層は周辺の火山の活動によってもたらされた降下火砕物からなる。佐久ローム層を整合に覆い、層相によってⅠ～Ⅲに区分される。

分布：八ヶ岳山麓と関東山地内の平坦面および斜面に分布する。

層厚：模式地で約1m

層相：黒色火山灰層Ⅰは、礫を含む黒灰色火山灰層からなり下位の佐久ローム層をブロック状に取り込んでいるところがみられ、かく乱された堆積状態を呈している。黒色火山灰層Ⅱは、植物片を含む黒色細粒火山灰層からなり、灰褐色ガラス質火山灰層“こしあんアッシュ”を挟在する。黒色火山灰層Ⅲは黒褐色火山灰層からなり、軽石粒を含み現在の表土層を構成している。

鍵層：池の平遺跡発掘調査団（1986）は、黒色火山灰層Ⅱ中に灰褐色ガラス質火山灰層“こしあんアッシュ”を確認した。しかし、池の平遺跡発掘調査団（1986）は塩くれば発掘地の黒色火山灰層の砂粒組成を検討しているが、黒色火山灰層の全層準に火山ガラスが含まれていることを報告している。火山ガラスの保存状態があまりよくないこともあって、明瞭な火山ガラスの含有量のピークは確認されていない。しかし、この“こしあんアッシュ”は完新世の広域火山灰の鬼界アカホヤ火山灰層“K-Ah”に対比される可能性が高い。

D. 遺物包含層の年代について

発掘地およびその周辺地域に分布する佐久ローム層には、前述した後期更新世の広域火山灰が挟在している。中部佐久ローム層中には“Sandy Pm”、“ヒゲパミ”、“Pm-1”、“Pm-2”、“Pm-3”などが確認され、これらの鍵層に基づき、中部佐久ローム層は、野尻湖周辺に分布する下部神山ローム層（野尻湖地質グループ，1994）に対比される。上部佐久ローム層については、野尻湖周辺の上部神山ローム層および野尻ローム層にほぼ対応するものと考えられる。上部神山ローム層および野尻ローム層は、後期更新世後半の最終氷期の堆積物とされ、約70,000年以降の堆積物と考えられている（野尻湖地質グループ，1994）。そのため、上部佐久ローム層についても約70,000年以降の堆積物と考えられる。

上部佐久ローム層Ⅲの中部の分帯b（池の平発掘調査団，1986）も、含有鉱物の特徴から“DKP”に対比される可能性が高い。また、黒色火山灰層Ⅱに挟まれる“こしあんアッシュ”は完新世の広域火山灰の鬼界アカホヤ火山灰層“K-Ah”に対比される可能性が高い。この対比に基づけば、上部佐久ローム層Ⅲから最上部佐久ローム層にかけての層準は、野尻ローム層（野尻湖地質グループ，1988）にほぼ対比できる。

そこで問題となってくるのが、遺物包含層の直下にある“池の平火山灰”の層準である。池の平遺跡発掘調査団（1986）は、池の平遺跡周辺に分布する上部佐久ローム層Ⅳ中に偏平型の火山ガラスの密集層を3層準確認し、“池の平火山灰層Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ”と命名した。このうち、BⅡ層に挟在する細粒ガラス質火山灰層は露頭で確認され、“池の平火山灰Ⅱ”とされている。近藤（1988）は、この火山灰層中の火山ガラスの形態や屈折率は“AT”火山灰層と一致することを上げながら、後期更新世末の考古遺物編年学的意味をもつ尖頭器の出土やSuzuki（1973）による“デカパミ”中の黒曜岩片の放射年代値に基づき、別の火山灰と考え、その年代を約13,000年前としてきた。これに対し“デカパミ”の上位に位置し、“池の平火山灰Ⅱ”と同じものと考えられるガラス質火山灰を“AT”とする見解もあった（町田ほか，1980；早津，1988）。

今回、関東山地周辺まで“デカパミ”の追跡調査を行ない、“デカパミ”が上州ローム層の中部ローム層上部の層準に対比される観察結果を得た。また、1990年に行われた野尻湖底ボーリングで“DKP”と“K-Ah”の間に高純度のガラス質火山灰は“ヌカⅠ”と“ヌカⅡ”しか確認されず、“ヌカⅠ”は“AT”に対比された（野尻湖火山灰グループ，1993）。

これらのことから、“デカパミ”の上位のガラス質火山灰を“AT”に対比した町田ほか（1980）の見解を追認し、“池の平火山灰Ⅱ”は“AT”に対比されると考える。

このことから、池の平遺跡の主な遺物包含層である上部佐久ローム層Ⅳ、Ⅴは上部野尻ローム層Ⅰの黒色帯から上部野尻ローム層Ⅱの層準にほぼ対比され、その年代は後期更新世末期（約25,000年前から10,000年前）と考えられる。それより詳しい年代については、肉眼では識別できない鍵層を砂粒分析などで確認し、より詳細な対比を検討する必要があると考える。

4 遺物と遺構

A. 遺物の出土層準と分布

駒出池遺跡では、通称「駐車場側」のI-1、J-1、J-6の3グリッド、K-49グリッドを中心としたH-50、I-50、J-48・50、K-48・49・50、L-49の8グリッドと、「バンガロー側」ア-12、イ-20・21の3グリッドを発掘した。

「駐車場側」では、“モヤ”層準が一部残っただけで大部分は“デカパミ”B II上半部、“デカパミローム”層を発掘した。「バンガロー側」は表土から“デカパミローム”層までを発掘した。

遺物は下位より“デカパミ”B II上半部、“デカパミローム”、“モヤ”I・II、黒色土の5層準より出土した。

“デカパミ”は発掘地点での分布は少なく、遺物もほとんど出土していない。“デカパミローム”ではスクレイパー6点、尖頭器6点、その他剥片、碎片が多く出土している。“モヤ”Iでは尖頭器4点のほか石核や使用された剥片、剥片、碎片が多く出土した。“モヤ”II上部より縄文土器が数点出土している。黒色土では碎片が数点あるのみである。

I-1、J-1、J-6グリッドは全体に遺物が少ないが、“モヤ”でスクレイパーが1点出土している。

K-49周辺では、“デカパミローム”から639点の碎片の集中区が確認された。集中している範囲は、K-49グリッドの中央よりやや南東側を中心とし、南北約3m、東西約2mの楕円状である。石器は尖頭器が7点と一番多く、その他スクレイパーなどが数点、剥片が29点出土している。この中には黒曜石以外に、外部から搬入されたとおもわれる珪質頁岩、珪質凝灰岩製のものが出土した。

「バンガロー側」ア-12グリッドでは遺物が全体的に少なく、最多層準の“モヤ”IIで26点である。

イ-20・21グリッドでは、“モヤ”、“デカパミローム”で遺物が多く出土しており碎片は700点にもおよぶ。石器類は40数点と多く、スクレイパーが16点、尖頭器7点、ノッチ1点、その他微細剝離痕のある剥片や石核などが出土している。

遺構はイ-21グリッド南側で“デカパミローム”上面で配石が確認された。30×25×15cmの巨大礫1個と7個の小礫で構成され、範囲は狭く直径1m以内である。石材はすべて粗粒な安山岩である。付近からは、石器が数点出土している。

同じイ-21グリッド東側約2/3の範囲で礫群状の多数の礫が確認された。この地点は駒出池溶岩の末端に位置し、溶岩が崩れたと思われるこぶし大から直径20cm位の不定形の礫で構成されている。角礫も30%位含まれている。これらの状況から考えてこの多数の礫は、遺構ではなく、自然

状態の礫層と判断した。

B. 遺物

(1) 尖頭器文化の石器

① K-49付近 (J-48、K-48・49、L-49、H・I・J・K-50) の石器群

K-49付近の出土遺物の総点数は750点である。石器は尖頭器が7点、スクレイパーが4点、微細剥離痕のある剥片が2点、剥片が33点、碎片が685点出土した。出土層準は“デカパミ”から表土であるが、大部分は“デカパミローム”層である。尖頭器はほぼ完形品と思われるものが2点で、他は破損品である。大きさはいろいろあるが、小形のものとは比較的薄く、それ以外のは部厚いものが多い。すべて両面調整のものであるが、89-K-49-162のように全体に剥離を施した後に周縁に微細剥離を施したものもある。スクレイパーは4点とも石材が珪質頁岩で搬入石材を用いていることから、器種によって石材を使い分けていると思われる。その他、土器片が覆土、黒土、黄モヤから5点出土しているがいずれも縄文土器片と思われる。また、K-49では、碎片が圧倒的に多く(94%)出土しており、尖頭器も多いことから、尖頭器の製作址の中心と考えられる。

尖頭器

尖頭器は7点出土した。石材はすべて黒曜石である。いずれも両面調整のもので破損品が多い。大きさは比較的小形のものが多い。

1は流理、気泡のめだつ石材を素材とした両面調整尖頭器である。平坦剥離による粗い加工が施されている。左右非対称で裏面は剥離の大きさが一定でなく、湾曲している。断面は部厚いD形である。基部が一部欠損しているが、ほぼ完形である。2は流理、気泡の目立つ石材を素材とした両面調整尖頭器の未成品である。平坦剥離による粗い加工が施されている。3は流理、気泡の目立つ灰白色の石材を素材とした両面調整尖頭器である。平坦剥離による粗い加工が施され、左右非対称形である。裏面を加工中に破損したが、さらに調整を行なって使用したと思われる。断面は厚いD形である。4は木葉形の小型の薄い両面調整尖頭器である。大きい剥離と細かい剥離を全面に施して整形し、さらに周縁に細かい剥離を施している。基部がわずかに欠損しているが、ほぼ完形品である。5は縦長剥片を素材とした両面調整尖頭器の先端部である。薄手で裏面に主剥離面が残り、左右ほぼ対称である。周縁の調整により、やや内側に湾曲している。6は透明度の高い石材を素材とした両面調整尖頭器の基部で、上部の大部分は切断し欠損している。背面は下方からの剥離で基部調整を行ない、裏面は左右の横からの平坦剥離で形を調整している。7はやや透明度の低い石材の両面調整尖頭器の未成品である。平坦剥離による粗い加工が施されている。背面に自然面が残る。基部は欠損していて断面は部厚いD形である。

スクレイパー

8は珪質凝灰岩製の石刃を素材として、背面両側縁下位及び上端左に微細剥離による刃部を形

第5表 駒出池遺跡の出土遺物点数表(1)

第3回

イ-21

	P	Sc	UF	T	F1	Co	Ch	計
埋土		3	2	1	10	1	92	125
表土	1	1	1		1		23	27
モヤI・II		1	1		9		62	74
デカバミローム		2	2		4		9	17
計	1	8	6	1	24	1	186	228

P : ポイント
 Sc : スクレイパー
 UF : 微細剥離痕のある剥片
 Co : 石核
 F1 : 剥片
 Sp : スポール
 Ch : チップ
 N : ノッチ
 T : 石器の破損品

I-1

	Sc	UF	F1	Sp	Co	Ch	礫	石片	計
表土									
漸移帯									
モヤ上									
モヤ下						2			2
デカバミローム上			1			1			2
デカバミローム下									
デカバミII上半部									
計			1			3			4

J-1

	Sc	UF	F1	Sp	Co	Ch	礫	石片	計
モヤ上			1						1
モヤ下						2			2
デカバミローム			1						1
デカバミII上半部								1	1
計			2			2		1	5

J-6

	Sc	UF	F1	Sp	Co	Ch	礫	石片	計
デカバミローム下		1	1			4	1		7
計		1	1			4	1		7

A-12

	Sc	UF	F1	Sp	Co	Ch	礫	石片	計
表土						10	1		11
漸移帯			1			2			3
モヤII			3	1	1	20	1		26
モヤI						8			8
デカバミローム		1				1		1	3
計		1	4	1	1	41	2	1	51

第4回

イ-21

	P	Sc	UF	Co	F1	Ch	土器	計
埋土			1	1		25		27
黒色火山灰層						5		5
モヤII		2	6	3	8	57	1	77
モヤI	1		2	1	6	50		60
デカバミローム					1			1
計	1	2	9	5	15	137	1	170

J-48

	Sc	UF	F1	Ch	礫	石片	土器片	炭	計
表採			1			1			2
埋土			1	3					4
覆土							2		2
黒土				1	1		2		4
黄モヤII			2	1			1		4
モヤI			1	3					4
デカバミ最上部				3					3
上部	1	1	2	17					21
中部				7					7
下部				1					1
最下部								1	1
計	1	1	7	36	1	1	5	1	53

K-48

	Ch	石片	計
表採	6		6
デカバミローム	12	3	15
デカバミ不明	3	2	5
計	21	6	27

K-49

	P	UF	F1	Ch	自然石	計
デカバミローム	4	1	3	178	1	187
攪乱層	1		25		26	
計	5	1	3	203	1	213

第6表 駒出池遺跡の出土遺物点数表(2)

第5回
イ-21

		P	Sc	N	UF	Fl	Ch	Co	礫	石片	計
表	土										
モヤII	上部						4				
	中部					2	33			1	
	下部		1		1	8	28	8			
	最下部					2	25				114
モヤI	上部					2	13				
	中部				1	1	4	34			
	下部	1			1	5	76	2			
	最下部						10				149
デカバミローム	最上部				1	9	46		8		64
	上部					3	13				16
	中部					1	15				16
	下部										
計	1	1		4	38	305	3	8	1	360	

L-49

		Fl	Ch	計
デカバミローム	中部		7	7
	下部	1	44	45
計		1	51	52

K-49

		P	Sc	UF	Fl	Ch	計
デカバミローム		2	3		18	326	349
攪乱層					1	1	1
計		2	3		18	327	350

第6回

イ-20

		P	UF	Sc	T	Fl	Ch	土器片	計
攪乱土				1	1				2
表土			1				7	1	9
モヤII	上部	1		2			13	2	
	中部						16		35
	下部				1				
モヤI	上部			1		5	18		
	中部					1	11		38
	下部						2		
計	1	1	4	2	8	65	3	84	

イ-21

		Sc	Fl	Ch	計
表土				1	1
モヤII			2	16	18
モヤI				4	4
デカバミローム	1	11	61	73	
計	1	13	82	96	

	H-50			I-50		J-50			K-50			計
	Fl	Ch	石片	Fl	Ch	Fl	Ch	原石	Fl	Ch	石片	
攪乱土								1				1
表土		1				2		3		1		7
モヤII												
モヤI		8	1	2	2							13
デカバミローム		7		5	2	12			5	1		32
計	0	16	1	2	9	2	15	1	0	6	1	53

イ-21 3,4,5,6回合計

		P	Sc	N	UF	T	Co	Fl	Ch	礫	石片	土器	計
埋土		2	2		1	1	2	10	117				135
表土		1	1		1			1	24				28
黒色火山灰層									5				5
モヤ	4	4	1	10			7	50	419		1	1	497
デカバミローム		4		2				30	144	8			188
計	7	11	1	14	1	9	91	709	8	1	1	853	

K-49

		P	Sc	UF	Fl	Ch	自然石	計
デカバミローム		6	2	1	21	505	1	536
攪乱層		1				26		27
計		7	2	1	21	531	1	563

第3回

I-1	石器	石核	フレイク	チップ	礫	石片	その他
モヤ下				1,2			
デカバミローム			4	3			
J-1	石器	石核	フレイク	チップ	礫	石片	その他
モヤI上	1-微細剝離痕のある剥片						
モヤI下				2,3			
デカバミローム			4				
デカバミローム						5	
J-6	石器	石核	フレイク	チップ	礫	石片	その他
デカバミローム下	4-微細剝離痕のある剥片		2	3,5,6,7	1		
A-12	石器	石核	フレイク	チップ	礫	石片	その他
表土				3,4,5,6,8,10,15,17,18,19	9		
漸移帯			2	1,7			
モヤII		35-残核	27,38,44	14,16,20,21,21,23,24,25,26,28,31,32,33,34,36,37,39,40,48	41		30-スポール
モヤI				11,12,13,42,43,45~47			
デカバミローム	52-微細剝離痕のある剥片			50		51	
I-21	石器	石核	フレイク	チップ	礫	石片	その他
埋土	35-影器136 37,156-スクレイパー 93-石器の破損品 206,225 -微細剝離痕のある剥片	159	27,28,90, 135,151, 210,211, 217,227, 228	1,2,3,4,5,6,7,8,9,10,11,12,13,14,15,16,17,18,19,20,21,22,23,24,25, 26,29,30,31,32,33,34,36,38,39,40,46,47,48,49,50,59,62,63,64,65,66, 67,68,75,76,84,85,88,89,91,92,94,95,99,103,109,110,111,112,121,122, 134,137,141,145,175,178,179,180,190,195,196,197,198,199,200,201, 212,213,214,219,221,222,223,224,226			
表土	45-ポイント(先端) 53-スクレイパー 72-微細剝離痕のある剥片		58	41,42,43,44,54,55,56,57,60,61,69,70,71,73,74,77,78,79,80, 81,82,83,98			
モヤ	138,150-スクレイパー 204-微細剝離痕のある剥片		51,107, 108,115, 133,144, 160,176, 220	52,86,87,96,97,100,101,102,104,105,106,113,114,116,117,118, 119,120,123,124,125,126,127,128,129,130,131,132,139,140, 142,146,147,148,149,152,153,154,155,157,158,161,162,163, 164,165,166,167,168,169,177,181,185,188,189,194,205,207, 208,215,216			
デカバミローム	183,218-スクレイパー 171,173 -微細剝離痕のある剥片		182,186, 187,191	170,172,174,184,192,193,202,203,209			

第4回

I-21	石器	石核	フレイク	チップ	礫	石片	その他
埋土	3-微細剝離痕のある剥片	2		60,61,62,63,64,65,66,67,68,69,70, 71,72,73,74,75,76,77,78,163,164, 165,166,167,170			
黒色火山灰層				10,11,12,13,14			
モヤII	15,25,37,38,58,131 -微細剝離痕のある剥片 29,123-スクレイパー	28,129, 132	22,24,12, 21,28,44, 45,46,47, 59,133, 169	4,5,6,7,8,9,16,17,18,19,20,21,23, 26,27,30,31,32,33,34,35,36,39,40, 41,48,49,50,51,52,53,54,55,56,57, 79,80,81,82,83,84,85,86,118,119, 120,121,124,125,126,127,134,135, 136			
モヤI	43-ポイント 42,105 -微細剝離痕のある剥片	1	89,93,99, 101,145, 152	87,88,90,91,92,94,95,96,97,98, 100,102,103,104,106,107,108,109, 110,111,112,113,114,115,116,117, 137,138,139,140,141,142,143,144, 146,147,148,149,150,151,153,154, 155,156,157,158,159,160,161,162			
デカバミローム			168				
J-48	石器	石核	フレイク	チップ	礫	石片	その他
表採			9			2	
埋土			53	11,48,54			
覆土							13,15-土器片
黒土			6		7		1,4-土器片
黄モヤII			10,12	14			8-土器片
モヤI			20	16,17,19			
デカバミローム				22,23,24			
最上部							
上部	42-スクレイパー 18-微細剝離痕のある剥片		27,33	25,26,28,29,30,31,32,34,45,46,37, 38,39,40,41,46,50			
中部				43,44,45,47,49,51,52			
下部				55			
最下部							21-炭

第8表 駒出池遺跡の遺物出土層準(2)

K-48	石 器	石 核	フレイク	チ ッ プ	礫	石 片	そ の 他
表 採				1,5,6,7,8,16			
デカバミローム				9,10,11,12,13,15,17,18,19,21,22,24		14,26(重要),20	
デカバミ				23,25,29		28(重要),30	
不 明						27(重要)	

K-49	石 器	石 核	フレイク	チ ッ プ	礫	石 片	そ の 他
デカバミローム	8,162,184,200-ポイント 139-微細剝離痕のある剝片		9,182,183	1,2,3,4,5,6,7,10,11,12,13,14,15,16,17,18,19,20,21,22,23,24,25,26,27,28,29,30,31,32,33,34,35,36,37,38,39,40,41,42,43,44,45,46,47,48,49,101,102,103,104,105,106,107,108,109,110,111,112,113,114,115,116,118,119,120,121,122,123,124,125,126,127,128,129,130,131,132,133,134,135,136,137,138,140,141,142,143,144,145,146,147,148,149,150,151,152,153,154,155,156,157,158,159,160,161,163,164,165,166,167,168,169,170,172,173,174,175,176,177,178,179,180,181,185,186,187,188,189,190,191,192,193,194,195,196,197,198,199,202,203,204,205,206,207,208,209,210,211,212,213,214,215,216,217,218,219,220,221,222,223,224,225,226,227,228,229,230,231,232,233,234,235,236,237,238,239,240			117-自然石
攪乱層	201-ポイント			50,51,52,53,54,55,56,57,58,59,60,61,62,63,64,65,66,67,68,69,70,71,72,73,74			

第5回

イ-21	石 器	石 核	フレイク	チ ッ プ	礫	石 片	そ の 他
表 土				26,27,28,29			
モ	上部						
	中部		156,157	22,23,24,25,46,47,48,50,51,52,53,54,55,158,159,160,161,162,164,165,166,167,168,169,170,171,172,173,223,224,225,226,300	77 78 78	163	
ヤ	下部	15-スクレイパー 21-微細剝離痕のある剝片	31	2,14,20,59,114,175,214,244	81 83 89 90 91		
II	最下部			1,213	198		
モ	上部		115,116	49,56,57,58,201,202,203,204,205,207,208,256,258			
	中部	194-ポイント 176-微細剝離痕のある剝片	131	72 73 74 75			
	下部	93-ポイント 174-微細剝離痕のある剝片	71,92	68,69,70,105,117			
I	最下部			35,36,37,38,210,211,259,302,305,306			
デカバミローム	最上部	228-微細剝離痕のある剝片	94,130,229,264,265,276,284,285,307	16,17,18,19,230,231,232,233,234,235,236,237,238,239,240,241,242,243,260,261,262,263,266,267,268,269,270,277,288,291,292,293,294,308,310,311,312,313,314,315,316,317,318,319,320,329	321,322,323,324,325,326,327,328		
	上部		3,280,330	331,332,333,341,347,348,349,354,355,356,357,358			
	中部		30	334,335,336,337,338,339,340,342,343,345,346,350,351,352,353			
	下部						
	最下部		359				

第9表 駒出池遺跡の遺物出土層準(3)

K-49	石器	石核	フリイク	チ ッ プ	礫	石片	その他	
デカバリーム	59,200-ポイント未製品 52,225-スクレイパー 199		1,2,3,4, 10,20,24, 50,72,78, 82,83, 101,133, 134,260, 300,323	5,6,7,8,9,11,12,13,15,16,17,18,19,21,22,23,25,26,27,28, 29,30,31,32,33,34,35,36,37,38,39,40,41,42,43,44,45,46,47, 48,49,51,53,54,55,56,57,58,60,61,62,63,64,65,66,67,68,69, 70,71,73,74,75,76,77,79,80,81,84,85,86,87,88,89,90,91,92, 93,94,95,96,97,98,99,100,102,103,104,105,106,107,108,109, 110,111,112,113,114,115,116,117,118,119,120,121,122,123, 124,125,126,127,128,129,130,131,132,135,136,137,138,139, 140,141,142,143,144,145,146,147,148,149,150,151,152,153, 177,178,180,181,182,183,184,185,186,187,188,189,190,191,192,193,194,195,196,197,198,201,202, 203,204,205,206,207,208,209,210,211,212,213,214,215,216,217,218,219,220,221,222,223,224,226, 227,228,229,230,231,232,233,234,235,236,237,238,239,240,241,242,243,244,245,246,247,248,249, 250,251,252,253,254,255,256,257,258,259,262,263,264,265,266,267,268,269,270,271,272,273,274, 275,276,277,278,279,280,281,282,283,284,285,286,287,288,289,290,291,292,293,294,295,296,297, 298,299,301,302,303,304,305,306,307,308,309,310,311,312,313,314,315,316,317,318,319,320,321, 322,324,325,326,327,328,329,330,331,332,333,334,335,336,337,338,339,340,341,342,343,344,345, 346,347,348,349,350,351,352				
攪乱層			261					

L-49	石器	石核	フリイク	チ ッ プ	礫	石片	その他
デカバリーム	中部			8,9,10,18,19,20,51			
	下部		34	1,2,3,4,5,6,7,11,12,13,14,15,16, 17,21,22,23,24,25,26,27,28,29,30, 31,32,33,34,35,36,37,38,39,40,41, 42,43,44,45,46,47,48,49,50,52			

第6回

H-50	石器	石核	フリイク	チ ッ プ	礫	石片	その他
攪乱土							
表土				1			
モヤI・II				2,3,4,5,6,8,9,10		7	
デカバリーム				11,12,13,14,15,16,17			

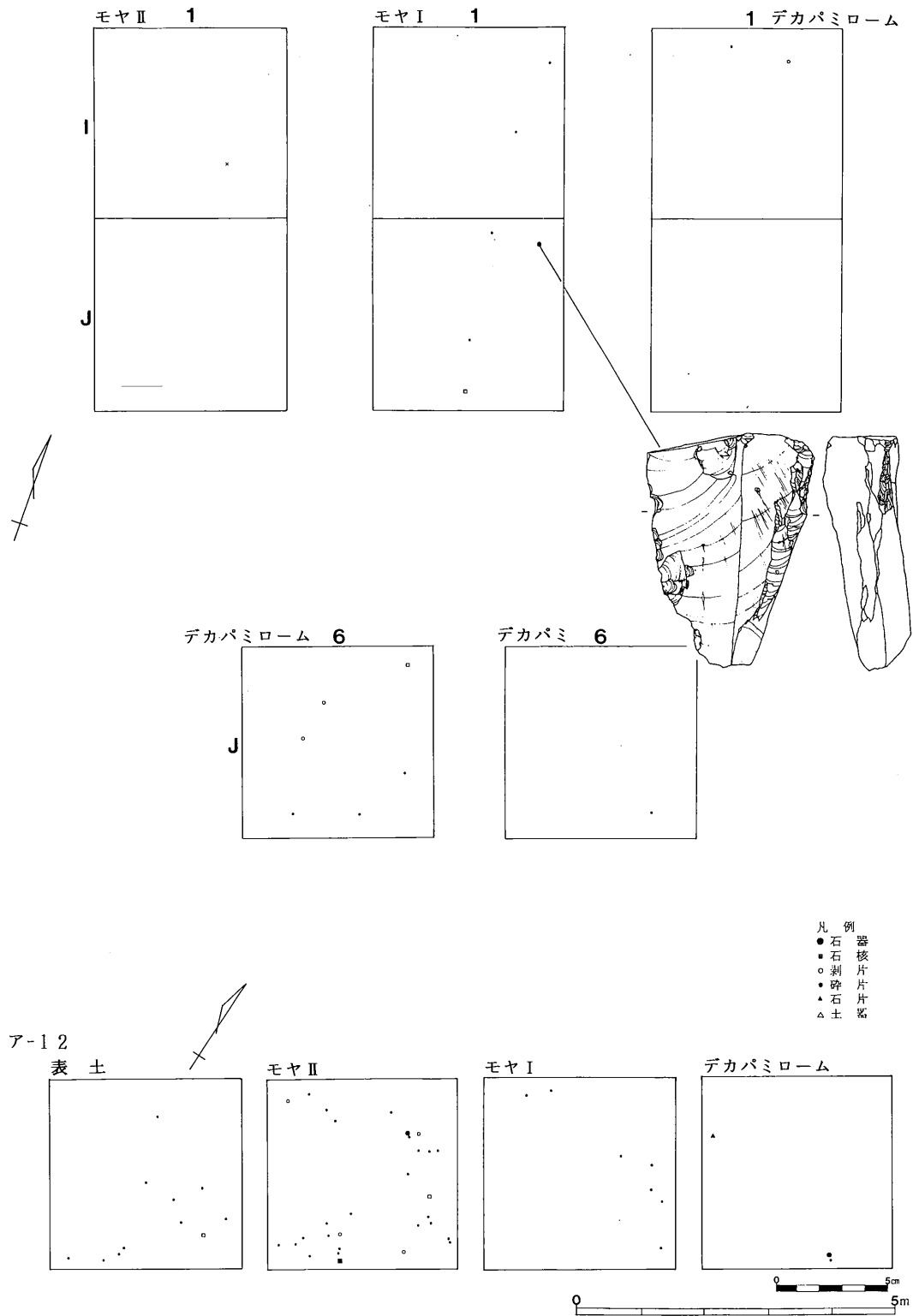
I-50	石器	石核	フリイク	チ ッ プ	礫	石片	その他
攪乱土							
表土				1,2			
モヤI・II			4,5	3,6			
デカバリーム				7,8,9,10,11			

J-50	石器	石核	フリイク	チ ッ プ	礫	石片	その他
攪乱土							8-原石
表土				1,2,3			
モヤI・II							
デカバリーム			9,10	4,5,6,7,12,13,14,15,16,17,18			

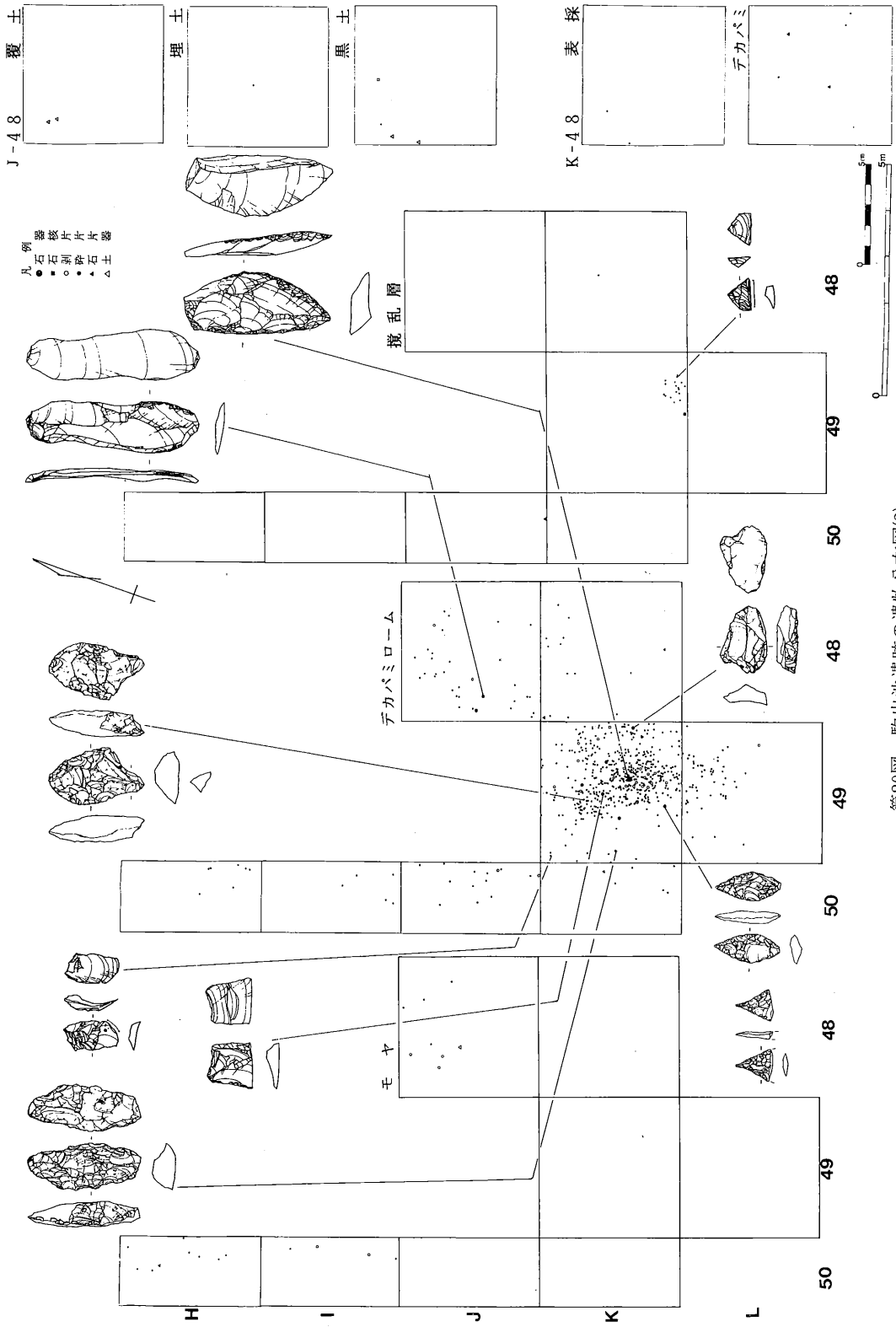
K-50	石器	石核	フリイク	チ ッ プ	礫	石片	その他
攪乱土							
表土				1			
モヤI・II							
デカバリーム				2,4,5,6,7		3	

イ-20	石器	石核	フリイク	チ ッ プ	礫	石片	その他
攪乱土	1-破損品 2-スクレイパー						
表土	10-微細剝離痕のある剥片			3,4,5,6,7,8,9			11-土器
モヤII	46,29-スクレイパー 26-ポイント		22	12,13,14,15,16,17,18,19,20,21,23, 24,25,30,31,32,33,34,35,36,37,38, 39,40,41,42,43,44,45			27,28-土器
モヤI	48-石器基部		49,51,57, 64,65,71, 83,84	47,50,52,53,54,55,56,58,59,60,61, 62,63,66,67,68,69,70,72,73,74,75, 76,77,78,79,80,81,82			

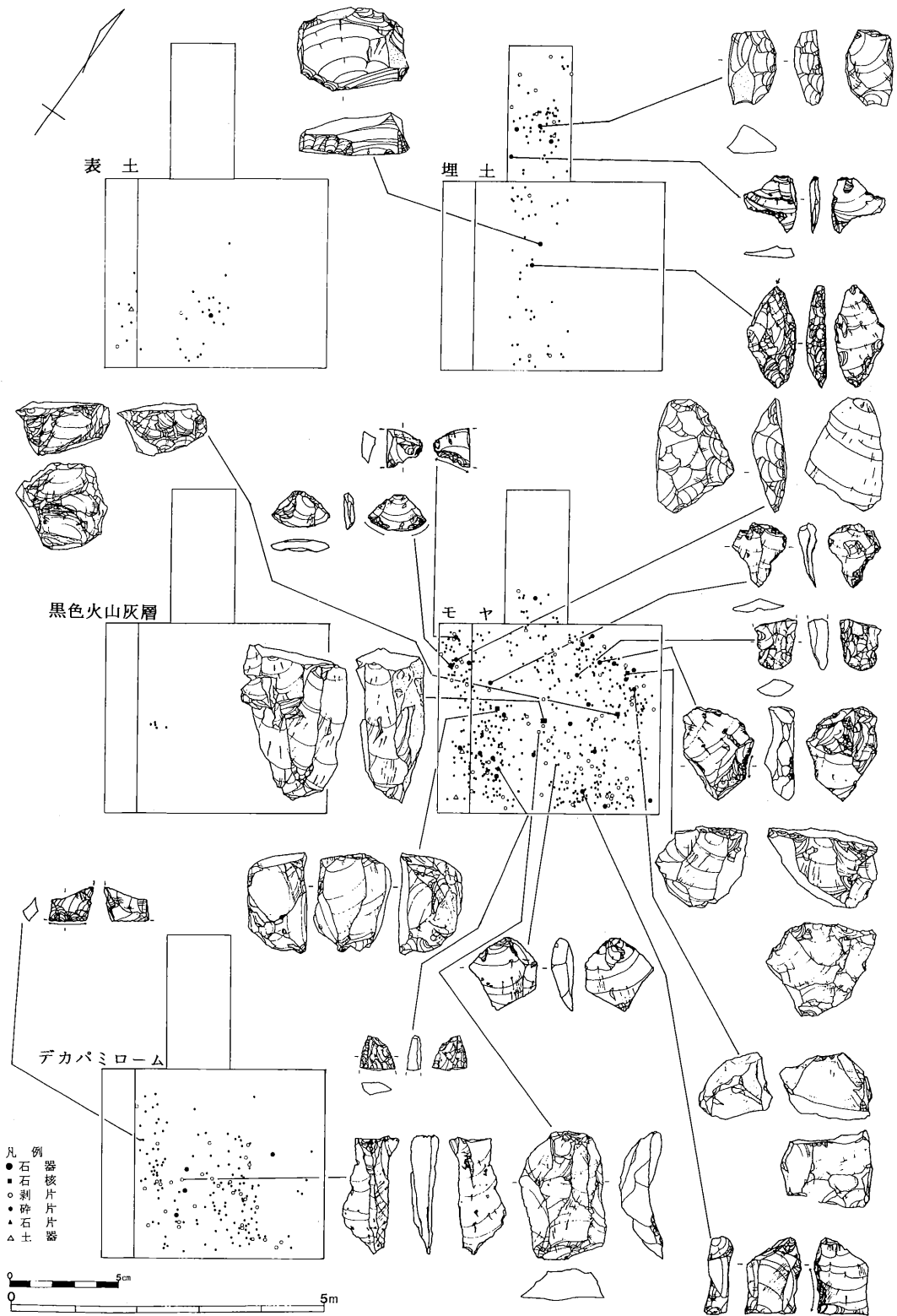
イ-21	石器	石核	フリイク	チ ッ プ	礫	石片	その他
攪乱土							
表土				31			
モヤII			83,85	32,33,34,35,36,37,48,49,50,51,52, 84,86,87,88,89			
モヤI				90,91,92,93			
デカバリーム	95-スクレイパー		5,8,12, 20,27,40, 62,70,75, 76,94	1,2,3,4,6,7,9,10,11,13,14,15,16, 17,18,19,21,22,23,24,25,26,28,29, 30,38,39,41,42,43,44,45,46,47,53, 54,55,56,57,58,59,60,61,63,64,65, 66,67,68,69,71,72,73,74,77,78,79, 80,81,82,96			



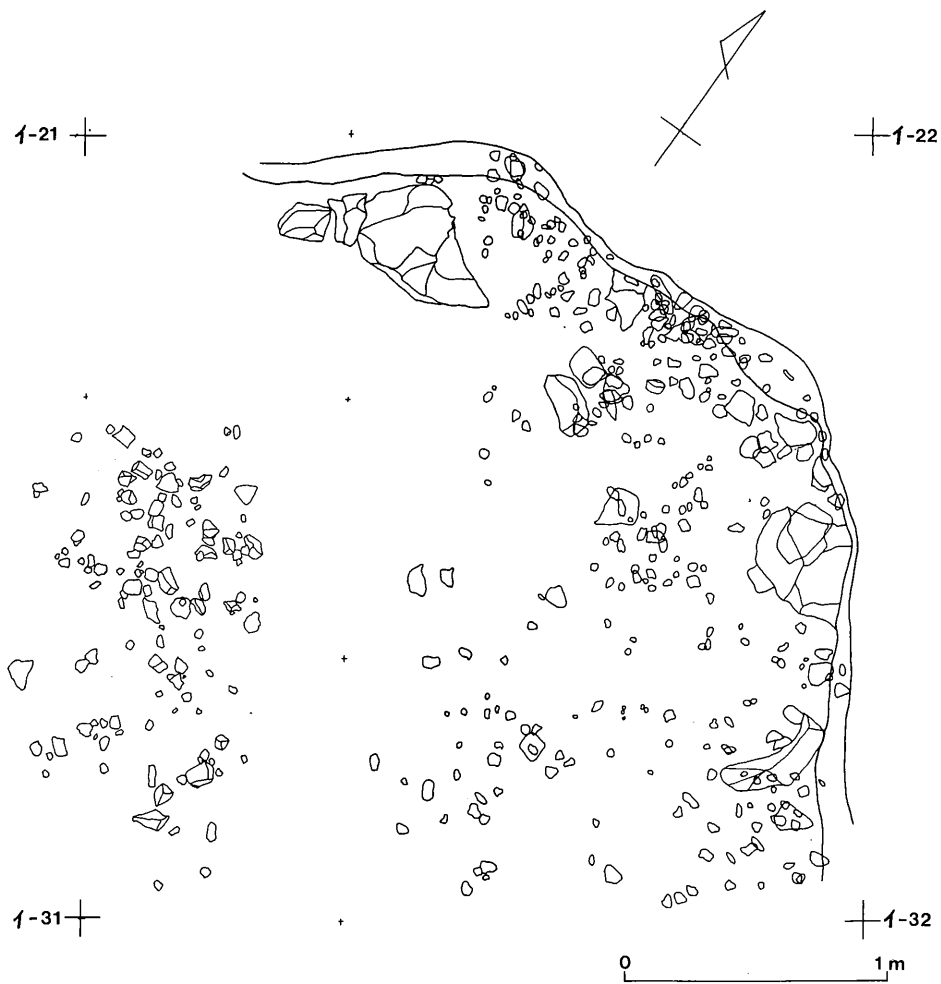
第19図 駒出池遺跡の遺物分布図(1)



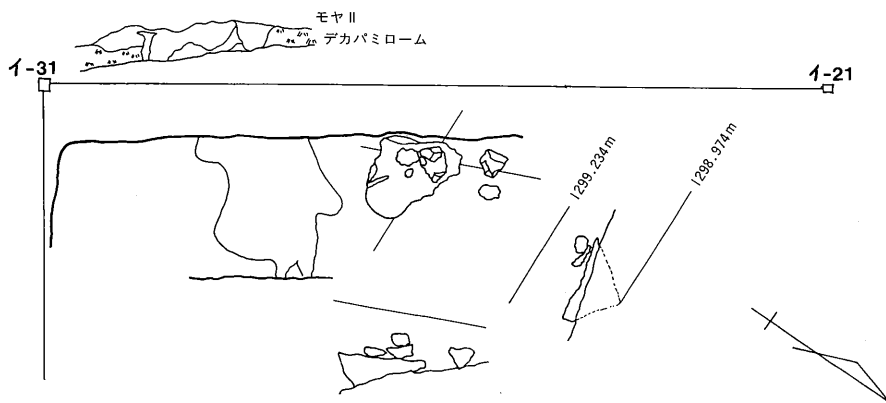
第20図 駒出池遺跡の遺物分布図(2)



第21図 駒出池遺跡の遺物分布図(3)



第22図 イー21グリッドにおける礫群状の多数の礫



第23図 イー21グリッドにおける配石

成している。かなり磨耗している。9は珪質凝灰岩の大形の剥片を素材とし、背面に入念な平坦剥離による加工が施されている。刃部は両側縁の自然面が残存している部分以外の大部分に微細剥離で形成されている。10は珪質頁岩製のほぼ四角形の薄い剥片を素材としている。背面左側縁に微細剥離による刃部が施されている。11は珪質頁岩の大形の縦長剥片を素材とし、背面には細かい入念な平坦剥離による2次加工が施されている。

微細剥離痕のある剥片

12は背面の先端に微細剥離痕が認められる小形の剥片である。13は縦長の小形の剥片を素材とし、右側縁の背面側先端部と腹面側中程に約7mmの微細剥離痕がある。89KD炊事場は一部に自然面を残す楕円形様の剥片で上部の両面に二次加工が施されている。15は横長の一部に自然面を残した小形剥片を素材とし、背面先端部に急角度の粗い剥離面と微細剥離面で刃部を形成している。17は珪質頁岩の縦長の剥片を素材とし、背面左側縁下部に微細剥離痕が認められる。18は透明度の低い大形の剥片を素材とした縦長剥片である。背面右側縁上部と左側縁の一部に微細な剥離痕が認められ、裏面下部には2つの大きな剥離痕が認められる。打面、打留痕は欠如していることから、かなり大形の剥片と思われる。断面は分厚い三角形を呈している。

剥片

14は薄い珪質凝灰岩製の縦長剥片である。打点、打面ともに残っている。16は小形の珪質頁岩製の縦長剥片である。先端はわずかに欠損している。

②イー21グリッド付近(イー20、イー21グリッド)の石器群

イー21グリッド付近の出土遺物の総点数は853点である。出土品中最も多かったのは碎片で、8割を超える。石器の器種の内訳は尖頭器が7点、スクレイパーが16点、彫器が1点で、スクレイパーが比較的多い。尖頭器は小形の両面調整のもので、いずれも欠損品である。スクレイパーは分厚い素材を用い、急角度の刃部をもつものと、薄い剥片にノッチ状の刃部をもつものがある。彫器は駒出池遺跡で唯一のものであり、このことから駒出池遺跡の石器群に占める割合はかなり小さいと予想される。出土層位はモヤが最も多く、全体の6割を占めている。石器の石材はすべて黒曜石である。土器など一部を除けばほとんどが同一の文化期のものと考えられる。

尖頭器

尖頭器は7点出土した。石材はすべて黒曜石である。いずれも破損品である。

19はやや透明度の低い両面調整尖頭器である。先端部は欠損している。一部に自然面を残し、背面はやや粗い加工で背面には細かい加工が施されている。背面左側縁にはさらに微細な調整がなされている。断面は平行四辺形に近いレンズ形である。20は気泡が多いやや透明度の低い石材を素材とした両面調整尖頭器の先端部である。入念な加工が施され、完成後に欠損したと思われる。断面は平行四辺形に近いレンズ形である。21はやや透明度の低い左右非対称の尖頭器である。背面は粗い剥離で形を調整し、左側縁は切断している。22は気泡の多い透明度の低い分厚い石材を素材とした尖頭器の未成品である。背面に粗い調整が施され、製作途中で破損したものと思わ

れる。腹面に調整はなされていない。23はやや透明度の高い両面調整尖頭器の基部である。背面にはほぼ右半分に調整がなされ、腹面には基部に4面の調整が施されているだけで、未成品ではないかと思われる。

彫器

彫器は1点だけの出土である。24は黒曜石製の縦長剥片を素材としている。右側縁は入念な急角度の調整が施されているが、左側縁は大きな剥離面によって緩やかな調整がなされている。彫刻刃面は背面側に先端から左側縁中央への1回の剥離によって作り出されている。腹面にも下端から左側縁への槓状剥離があるが、この剥離の打点付近を切る細かい剥離が背面にみられる。

スクレイパー

スクレイパーは16点出土した。石材はすべて黒曜石である。比較的厚い素材から小形で薄い物まで色々ある。

25は長さ約4.5cm、幅約3.5cmの断面が台形様の横長の剥片を素材としている。背面上部から右側縁上半部にかけてと左肩、先端左に急角度の刃部を施している。26は断面が台形様の縦長剥片を素材としている。打面部、先端部ともに切断している。腹面右側縁全体に細かい剥離による刃部が形成されている。27は縦長の断面三角形の剥片を素材としている。背面右側縁に数面の粗い剥離とさらに細かい剥離を施し刃部を形成している。28は菱形状のやや厚い剥片を素材とし、背面先端部右側に急角度の粗い剥離と微細剥離で刃部を形成している。打面、打点は明瞭に残っている。29は小形の扇形の剥片を素材とし、裏面末端の両側に細かい剥離を施し、約5°の調整角で刃部を形成している。打面、打留痕が残っている。30はやや円形状の部厚い剥片を素材とし、背面左側縁に粗い剥離と腹面に微細剥離を施して刃部を形成している。側縁と先端部が一部欠損している。31は断面が平行四辺形の厚い剥片を素材とし、剥片の上端に粗い剥離と細かい剥離で刃部を形成している。32は透明度の高い小形の剥片を素材とし、背面末端に約75°の角度で細かい剥離による刃部が形成されている。

石器基部

33は黒曜石製の石器基部で大半は欠損している。背面に一部自然面を残し、右側縁下部に微細な剥離痕が認められる。腹面右側縁には基部調整が見られる。

微細剥離痕のある剥片

微細剥離痕のある剥片は14点出土した。石材はいずれも黒曜石である。

34は断面が三角形の厚い縦長の剥片を素材とし、腹面側の両側縁に微細剥離痕が認められる。43の石核と接合する。35は長さ約6cm、幅約3.5cmのやや部厚の縦長剥片で、打点は明瞭に残っている。背面右側縁にわずかに微細剥離痕が認められる。36は三角形の縦長の剥片で、腹面側右側縁に約2cmの二次加工が施され、背面側右側縁に約1cmの微細剥離痕が認められる。37は背面に自然面を残すやや縦長のもので、側縁は一部欠損している。打面、打留痕は明瞭で、腹面側の打面から左側縁上部にかけて背面側の右側縁なかほどに数面の粗い剥離、さらに微細剥離の加工

痕が認められる。38は透明度の高い三角形の剥片を素材としている。背面末端の湾曲している部分に微細剥離痕が認められる。39は五角形の剥片で先端は欠損している。3辺に微細剥離痕が認められる。40は縞状の様が見られる透明度の高い石材を素材とし、打面および背面の一部に自然面が残されている。末端は折れている。背面左側縁から末端に掛けて微細剥離痕が認められる。断面は分厚い三角形である。41は気泡の多い石材を素材とし、打面、打点は残っているが先端は斜めに欠如している。腹面左側縁に全面にわたって微細な剥離痕が認められる。断面はやや厚い三角形である。

石核

石核は6点が出土した。6点のすべてに自然面が残っている。これらは剥片の剥離方法から2種類に大別できる。ひとつの打面を設定するもの(単設打面)と、上下面とともに打面とするもの(両設打面)である。

単設打面では剥離面を打面としたもの(42、44)と、自然面を打面としたもの(45、46、47)とに分けられる。前者は、剥離作業面と反対の面に自然面を残している。42は今回出土した石核で最も大きいもので、縦長剥片を連続的に剥離している。縦長剥片(34)と接合する。44は2枚の縦長剥片の剥離面がみられるが、これ以外の面はすべて磨耗している。剥片の剥離はあまり進行しておらず、原石の大きさはこの石核とおおきく変わらない大きさであったと考えられる。45、46は平坦な自然面を打面として縦長剥片を剥離している。47は自然面を打面として、縦長剥片を剥離した後、打点を90°移動して幅広の剥片を剥離した石核である。48は両設打面の石核で、上下面ともに平坦な剥離面を打面として、横長で幅広の剥片を剥離している。剥離面の大きさから42以外は尖頭器の素材を剥離した石核とは考えられない。48は埋め土中であるが、それ以外はモヤからの出土である。

(2) 表採遺物

石鏃1点、ナイフ形石器2点、両面調整尖頭器9点、周縁調整尖頭器4点、スクレイパー6点、微細剥離痕のある剥片2点、剥片2点などがある。石材は全て黒曜石であり、不純物を含むものが多い。

石鏃(49)

凹基無茎式鏃である。横長剥片を素材とし、片基部端を欠損する。全体的に調整は粗く、階段状剥離も観察される。

ナイフ形石器

50は、上半部を欠損している。バルブ(打瘤)の発達した縦長剥片を素材とし、腹面には右側縁の基部に調整が施され、バルブが除去されている。背面には、基部に面的な調整が施されている。51は、先端部である。横長剥片を素材とし、背面の左側縁に礫面を残す。背面右側縁の先端部に、腹面から調整が施されている。

両面調整尖頭器

52は、上半部と基部端を欠損する。両面とも入念な平坦剥離に覆われ、縁辺部に平坦剥離による細調整が施されている。53は、先端部を欠損している。基部が尖らずに丸まる。表裏両面とも入念な平坦剥離に覆われており、縁辺部には平坦剥離による細調整が施されている。54も先端部を欠損するが、基部は尖る。53と同様に、入念な平坦剥離に覆われている。縁辺部の細調整は平坦剥離を基本とするが、階段状剥離も観察される。器体中央部では横断面形が凸レンズ状であるが、基部付近では三角形を呈する。55は、下半部を欠損する。53・54に比して調整剥離が粗く、表裏両面の調整に精粗の差が見られる。56は背面、腹面ともやや粗い平坦剥離で調整が施されている尖頭器の基部部分である。基部先端および上半部は欠損している。57は、上半部を欠損する。55と同様に、表裏両面の調整に精粗の差が観察される。縁辺の細調整は階段状剥離である。59は、上下両端を欠損する。表裏両面とも平坦剥離に覆われているが、両面の調整に精粗の差がみられる。60は、寸詰まりの木葉形を呈する。基部端を欠損する。両面ともやや粗い平坦剥離に覆われ、縁辺部には細調整が施されている。

61・62は、未成品である。61は縦長剥片、62は横長剥片を素材としている。61の素材である縦長剥片はバルブが発達し、礫面打面をもつ。背面は粗い平坦剥離に覆われ、縁辺部の細調整は階段状剥離になっている。67は黒色の透明度の低い素材の両面加工尖頭器である。縦長剥片を素材とし、平坦剥離による粗い加工が施され、背面に自然面が残っている。背面左側縁に細かい調整が施されている。右下側縁には加工の痕がみられないことから、製作途中の未成品と思われる。断面は厚いD形である。

周縁調整尖頭器

63は、小型の縦長剥片を素材としている。背面には左側縁の先端部と基部、腹面には両側縁のほぼ全縁に調整が施されている。調整は66に比して粗い。64は、上半部を欠損している。分割面打面をもつ縦長剥片を素材としており、表裏両面の両側縁に粗い調整が施されている。65は、大半を欠損しているため、全体の形状は不明である。横長剥片を素材とし、背面の左側縁に調整が施されており、これによって素材の打面部が除去されている。調整角は60～64°である。66は、湾曲の強い縦長剥片を素材とし、両側縁のほぼ全縁に調整が施されている。右側縁は腹面から、左側縁は背面から調整が行われている。調整角は右側縁が71～84°、左側縁が70～87°である。68は透明度の高い小形の細身の剥片を素材としている。背面には両側縁のほぼ全縁に細かい平坦剥離で入念な調整を行っている。先端のほうやや厚みを帯びている。腹面には調整は行われていない。

スクレイパー

69は、素材末端部を欠損している。礫面打面をもつ縦長剥片を素材とし、背面と腹面の右側縁に調整が施されている。70は、素材の側縁部と末端部を欠損している。礫面打面の縦長剥片を素材とし、背面の右側縁、腹面の左側縁に調整が行われている。71は、素材の末端部を欠損している。小型の石刃を素材とし、背面の右側縁に礫面を残す。背面の左側縁上半部に平坦剥離による調整が施されている。末端部の粗い剥離痕は石核調整によるものである。72は、調整打面をもつ

小型の縦長剥片を素材としている。背面の左側縁は礫面である。背面の右側縁に調整が施され、ノッチ状の刃部が形成されている。73は透明度の高い石材の縦長剥片を素材とし、一部に自然面を残している。背面左側縁全体に入念な刃部調整が施されている。74はやや薄手の縦長剥片を素材とし、一部に自然面を残している。腹面左側縁全体に細かい調整で刃部を形成している。75は、素材の打面部と末端部を欠損している。縦長剥片を素材とし、腹面の左側縁に調整が施されている。76は大形の剥片を素材とし、上半部は欠損している。背面左側縁下半部と腹面右上半部に細かい調整で刃部を形成し、背面右側縁に粗い調整で刃部を形成している。背面の大きな剥離面は他の面より古い。77は透明度の高い楕円の剥片を素材とし一部に自然面を残す。背面、腹面の先端に大きい剥離と細かい剥離で刃部調整を施している。側縁は一部欠損している。78は、素材の打面部と末端部を欠損している。背面の右側縁に細かな調整が観察される。79は小形の四角い剥片を素材とし、背面の一辺に細かい剥離で刃部を形成している。

両面調整石器

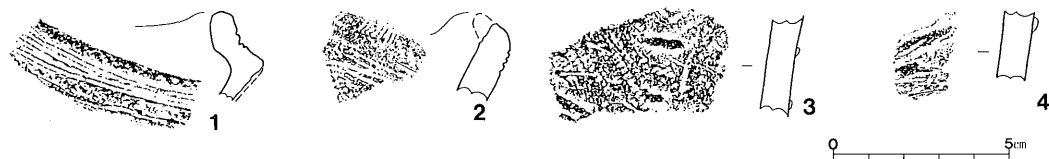
80は一部に自然面を残す透明度の高い小形の楕円形の剥片を素材とし、上部の両面に大きな剥離と細かい剥離で調整が施されている。

微細剥離痕のある剥片

81は、礫面打面をもつ小型の横長剥片を素材としている。腹面の左側縁に剥離痕が観察される。82は、小型の縦長剥片を素材としている。末端部を欠損している。腹面の右側縁上部に剥離痕が観察される。83はやや透明度の高い縦長剥片を素材とし、背面左側縁の一部と腹面右側縁の一部に微細な剥離痕が観察される。

剥片

84は、縦長剥片である。石理面で下半部を欠損し、平坦打面をもつ。剥離角は120°である。85



第24図 駒出池遺跡出土の石器

第10表 駒出池遺跡出土の石器

遺物リスト

図番号	遺物番号	名称	出土層準	発見者
1	89KDイ21-130	縄文土器口縁部	モヤII	鶴浦武久
2	91KDイ20-11	縄文土器片	表土	間室幸仁
3	89KD J 48-1	縄文土器片	黒土	小池幸夫
4	89KD J 48-15	縄文土器片	覆土	小池幸夫

は、礫面打面をもつ石刃である。末端部を欠損し、背面中央部に礫面を残す。背面の左側縁上半部と右側縁にみられる粗い剝離痕は、石核調整によるものである。

(3) 縄文時代の土器

今回の発掘調査では、8点の土器が出土した。出土層準は、J-48では覆土、黒土および黄モヤ、I-20、21では表土およびモヤIIである。そのいずれもが小破片であり、また表面が磨耗していることから、周辺からの流れ込みと考えられる。図示できた4点以外は、磨滅が激しく文様も判然としない。

1は、「く」の字状に内湾する口縁部破片で波状口縁となる。縄文施文後、沈線を数条施している。2も内湾する口縁部の破片であるが、内湾部を欠失している。小破片のため明確でないが、波状口縁になる可能性が高い。沈線が施されている。3は、LRの縄文のうえに細い粘土紐を貼付するものであるが、その大部分が剥落している。4は、細い粘土紐を貼付後、矢羽状の刻み目をつけたもので、地文に縄文をもつと思われるがはっきりしない。

これら4点の土器は、いずれも胎土に繊維を含まない。その文様から、縄文時代前期後半の諸磯b式に比定されよう。

第11表 駒出池遺跡の出土遺物(1)

遺物リスト

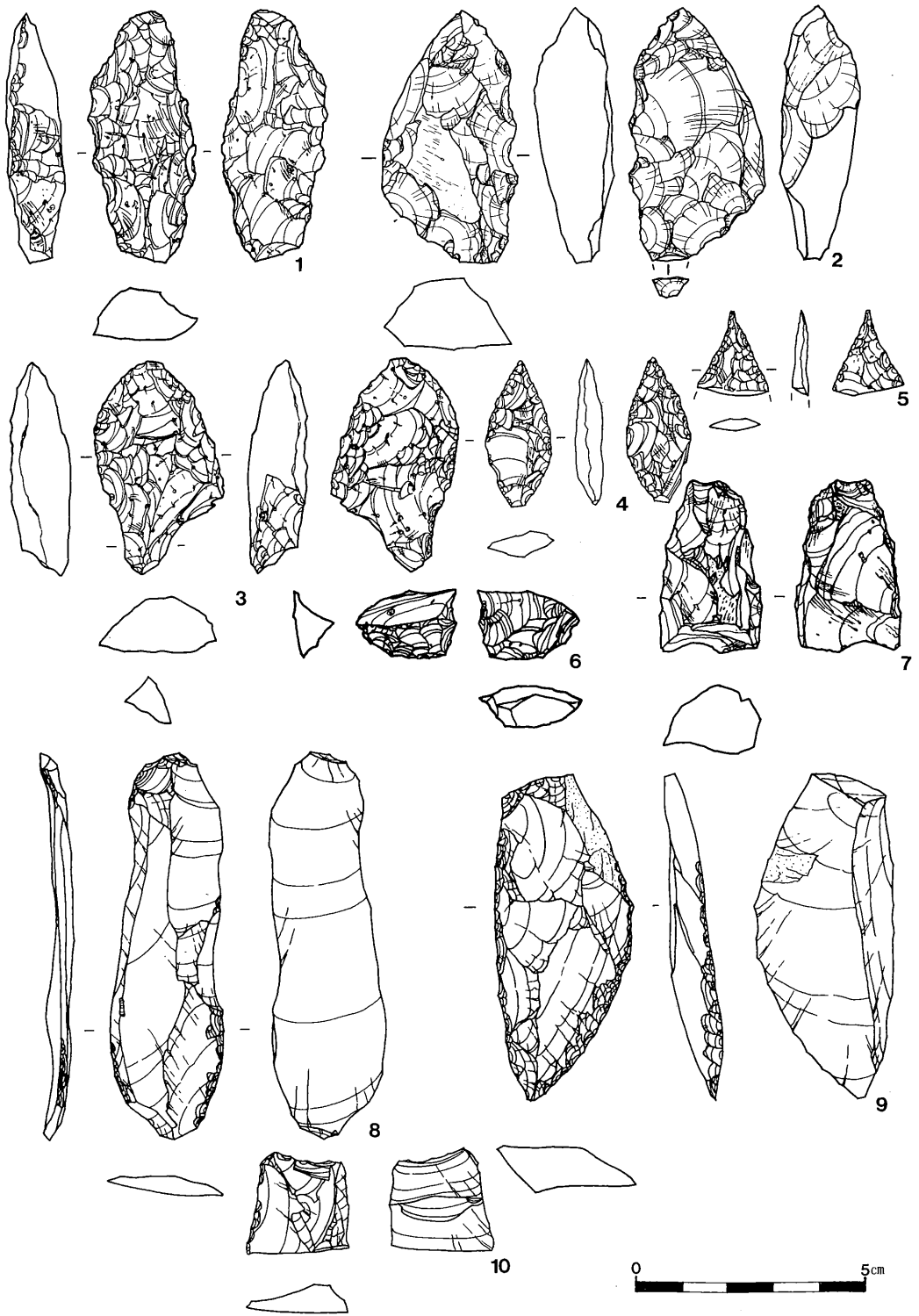
実測図番号	遺物番号	名称	出土層準	材質	大きさ (mm)	重さ (g)	発見者
1	89KDK49-201	尖頭器	デカバミローム	O b	53.7*22.7*11.4	12.2	茂木
2	89KDK49-184	尖頭器未成品	デカバミローム	O b	54.6*29.5*16.4	23.0	平林
3	90KDK49-200	尖頭器	デカバミローム	O b	46.7*25.7*13.3	12.4	塚本千明
4	89KDK49-162	尖頭器	デカバミローム	O b	30.9*13.9* 5.1	1.8	茂木
5	89KDK49- 8	尖頭器	デカバミローム	O b	18.7*15.3* 3.6	0.6	宮川
6	89KDK49- 4	尖頭器	デカバミローム	O b	14.2*20.7* 8.5	1.8	蒲地
7	90KDK49-59	尖頭器未成品		O b	37.7*23.0*13.5	11.7	
8	89KDJ 48-42	スクレイパー	デカバミローム	ST	83.2*24.8* 4.3	10.1	竹村健一
9	90KDK49-52	スクレイパー	デカバミローム	ST	71.3*30.0* 9.7	19.2	吉田磨美
10	90KDK49-199	スクレイパー	デカバミローム	SS	22.5*22.4* 5.7	3.1	大野淳之
11	89KDK48-表採	スクレイパー		SS	101.8*48.9*17.6	83.1	新海正博
12	89IK49-67	微細剥離痕のある剥片	攪乱層	O b	11.1*13.8* 4.5	0.5	関本真一
13	89KDK49-139	微細剥離痕のある剥片	デカバミローム	O b	26.0*14.0* 5.3	1.4	桂田
14	89KDJ 48- 9	縦長剥片		O b	36.2*23.3* 3.8	4.1	
15	90KDK49-225	微細剥離痕のある剥片	デカバミローム	O b	22.5*32.3* 8.7	5.0	塚本千明
16	89KDJ 48-53	微細剥離痕のある剥片	埋土	S	21.6*10.0* 3.2	0.7	竹村健一
17	89KDJ 48-18	微細剥離痕のある剥片	デカバミローム	S	41.3*25.4* 9.3	10.1	小池幸夫
18	86KDJ 1- 1-1	微細剥離痕のある剥片	モヤI	O b	104.1*73.3*32.9	212	林秀子
19	89KDI 21-43	尖頭器	モヤI	O b	21.5*18.4* 8.2	3.1	麻生
20	90KDI 21-194	尖頭器	モヤI	O b	15.6*16.1* 6.6	1.5	斎藤和博
21	91KDI 20-26	尖頭器未成品	モヤII	O b	50.6*34.6*13.2	18.7	
22	90KDI 21-93	尖頭器	モヤI	O b	34.5*36.6*18.2	24.8	石塚二侍子
23	90KDI 21-埋土	尖頭器	埋土	O b	14.1*32.9*12.4	5.5	
24	86KDI 21-35	彫器	埋土	O b	45.5*21.3* 7.8	7.5	新堀
25	86KDI 21-37	スクレイパー	埋土	O b	37.4*49.4*17.0	33.7	大森
26	89KDI 21-29	スクレイパー	モヤII	O b	34.5*25.0* 9.5	9.2	麻生
27	86KDI 21-136	スクレイパー	埋土	O b	33.4*20.5*11.4	8.2	反町
28	90KDI 21-埋土	スクレイパー	埋土	O b	31.4*39.2*10.5	11.4	
29	91KDI 20-46	スクレイパー	モヤII	O b	16.0*25.7* 5.2	2.0	野村祐一
30	86KDI 21-138	スクレイパー	モヤ	O b	25.8*26.2*12.6	7.7	木村
31	91KDI 20- 2	スクレイパー	攪乱土	O b	39.7*35.8*16.0	26.2	秋葉善克
32	91KDI 21-95	スクレイパー	デカバミローム	O b	15.4*19.3* 6.0	1.3	
33	91KDI 20-48	石器基部	モヤII	O b	16.8*14.6* 7.7	1.5	野村祐一
34	86KDI 21-173	微細剥離痕のある剥片	デカバミローム	O b	51.4*20.6*10.7	9.7	斎藤
35	90KDI 21-176	微細剥離痕のある剥片	モヤI	O b	58.3*37.6*13.5	32.8	藤井哲哉
36	90KDI 21-174	微細剥離痕のある剥片	モヤI	O b	28.1*23.1* 7.7	2.6	熊井久雄
37	89KDI 21-38	微細剥離痕のある剥片	モヤII	O b	42.0*28.8* 8.5	12.9	塚本千明
38	86KDI 21-206	微細剥離痕のある剥片	埋土	O b	25.3*24.1* 5.1	1.7	石塚二侍子
39	91KDI 20-10	微細剥離痕のある剥片	表土	O b	32.5*30.6* 9.1	5.9	田村知栄子
40	90KDI 21-228	微細剥離痕のある剥片		O b	35.0*36.0*13.4	15.8	
41	90KDI 21-埋土	微細剥離痕のある剥片	埋土	O b	30.1*25.3* 8.4	5.0	
42	89KDI 21- 1	石核	モヤI	O b	71.3*49.0*27.9	94.4	新井雅之
43	42と34の接合図						

第12表 駒出池遺跡の出土遺物(2)

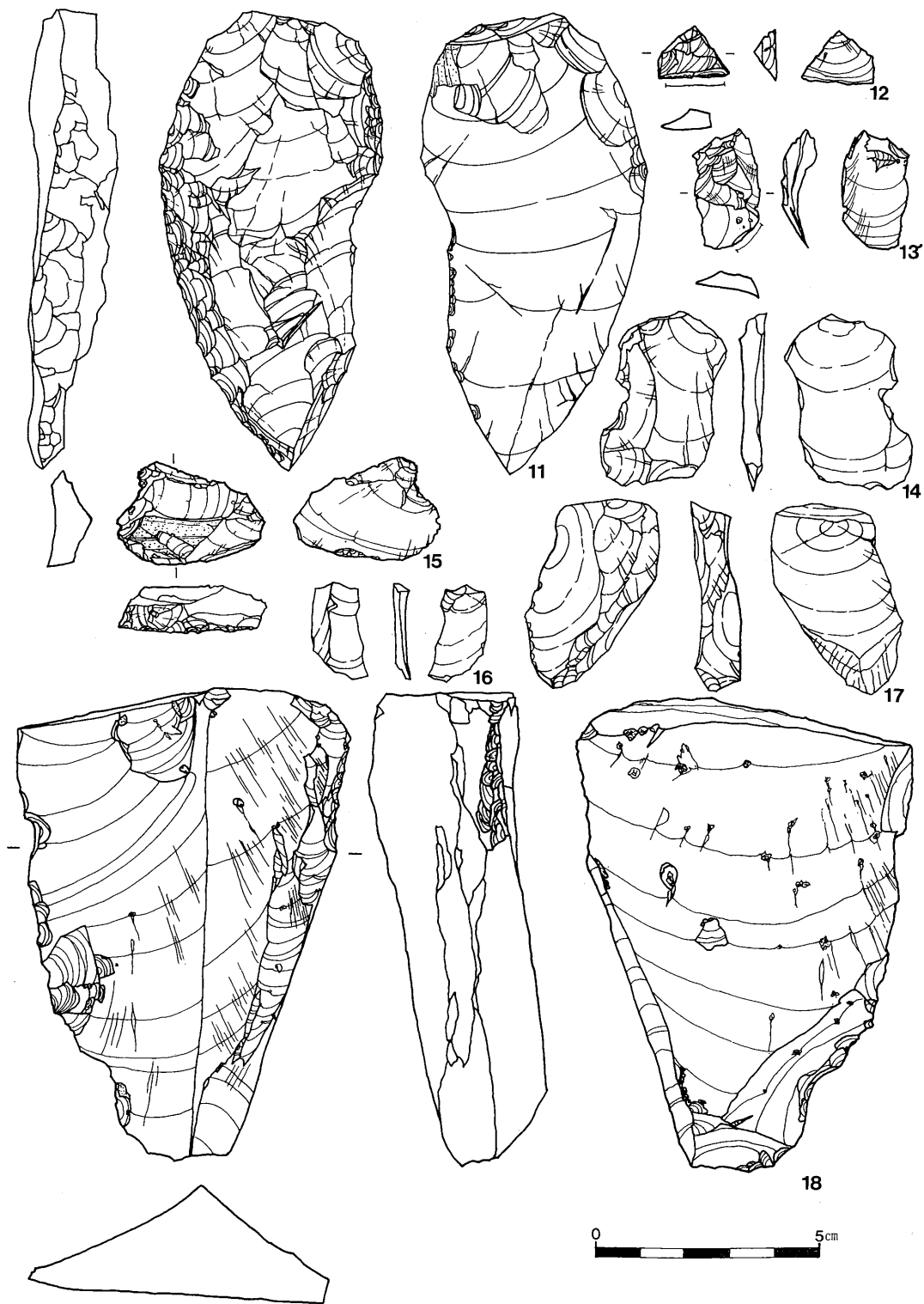
遺物リスト

実測図番号	遺物番号	名称	出土層準	材質	大きさ (mm)	重さ (g)	発見者
44	89KDイ21-129	石核	モヤII	O b	42.6*34.6*27.0	51.1	小林
45	89KDイ21-132	石核	モヤII	O b	34.5*52.6*29.7	59.9	金川和人
46	89KDイ21-28	石核	モヤII	O b	23.1*36.4*40.6	37.6	安藤
47	90KDイ21-92	石核	モヤI	O b	27.5*44.6*36.6	41.8	石塚二侍子
48	89KDイ21-2	石核	埋土	O b	43.1*33.0*17.3	21.4	小林
49	86KMS 1	石鏃		O b	20.3*14.4* 3.5	0.5	
50	84KM25	ナイフ形石器		O b	21.3*19.2* 4.5	1.0	
51	86KM131	ナイフ形石器		O b	18.8*14.3* 3.2	0.6	
52	KM 2	尖頭器		O b	15.7*21.5* 5.5	1.1	
53	84KM23	尖頭器		O b	43.8*22.8* 7.3	6.9	
54	84KM24	尖頭器		O b	31.3*19.1* 7.9	4.0	
55	83KM19	尖頭器		O b	27.8*22.0* 9.0	4.0	
56	池の平炊事場前池側	尖頭器	表採	O b	27.8*30.9*10.5	8.3	
57	84KM21	尖頭器		O b	24.1*29.9*10.2	4.1	
58	欠番						
59	860629KD表1	尖頭器		O b	43.4*40.7*15.3	24.4	
60	KM 1	尖頭器		O b	34.5*26.4* 9.7	8.4	
61	83KM16	尖頭器未成品		O b	60.7*31.1*11.3	16.9	
62	86KM102	尖頭器未成品		O b	58.5*28.9*17.0	25.6	
63	KM 6	尖頭器		O b	32.4*15.5* 7.2	3.5	
64	KM11	尖頭器		O b	20.7*15.0* 7.1	2.1	
65	86KM135	尖頭器		O b	25.5*12.7* 5.5	1.7	
66	KM 3	尖頭器		O b	37.7*15.7* 4.8	2.7	
67	91KDカマド	尖頭器		O b	51.3*24.5*14.6	16.3	
68	83KM18	尖頭器		O b	26.4*10.7* 2.6	0.8	
69	83KM17	スクレイパー		O b	36.5*23.9* 6.8	4.8	
70	KM 7	スクレイパー		O b	40.8*16.5* 7.2	5.2	
71	86KM112	スクレイパー		O b	40.2*14.3* 6.2	3.3	
72	86KM119	スクレイパー		O b	30.1*15.9* 6.8	3.3	
73	KM 5	スクレイパー		O b	45.6*26.4*12.5	12.1	
74	KM 9	スクレイパー		O b	38.1*26.4* 7.3	9.1	
75	86KM108	スクレイパー		O b	37.1*23.4* 4.7	4.7	
76	KM 8	スクレイパー		O b	53.7*46.2*13.1	33.7	
77	911013カマボコSE表採	スクレイパー		O b	36.1*41.3* 8.5	13.3	
78	86KM154	スクレイパー		O b	15.3*19.4* 5.2	1.3	
79	860628表採	スクレイパー		O b	14.3*15.2* 3.7	0.8	
80	89KDスィジバ	微細剥離痕のある剥片		O b	17.3*20.8* 5.8	1.7	
81	86KM147	微細剥離痕のある剥片		O b	18.2*19.6* 5.7	1.7	
82	87083004	微細剥離痕のある剥片		O b	29.1*12.2* 4.3	1.2	
83	83KM13	微細剥離痕のある剥片		O b	68.3*28.8*12.4	21.1	
84	870828-08	剥片		O b	19.2*24.8* 8.5	2.9	
85	83KM14	剥片		O b	77.9*31.4*13.3	26.8	

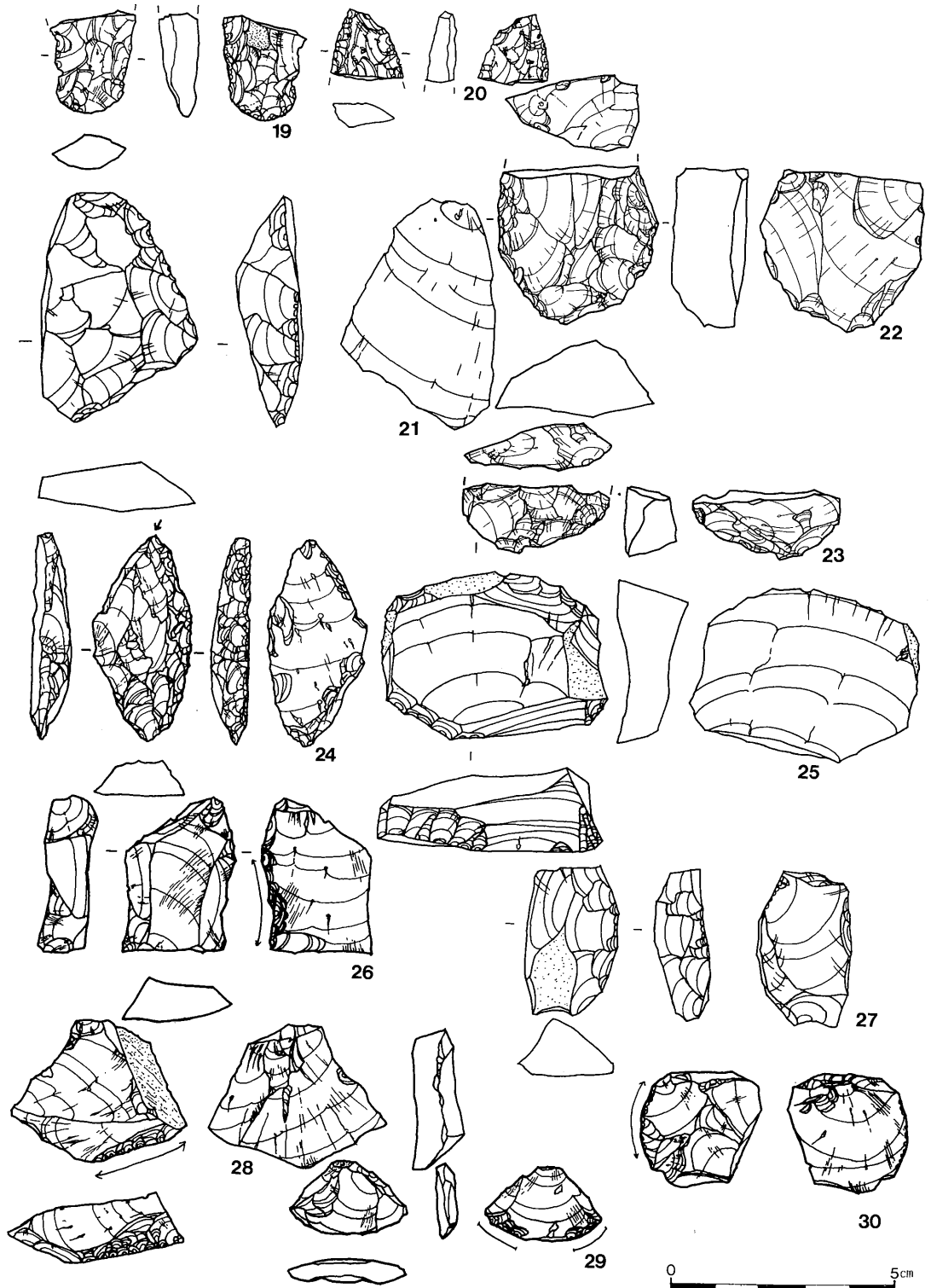
材質凡例 O b ; 黒曜石, ST ; 珪質凝灰岩, SS ; 珪質頁岩, S ; 砂岩



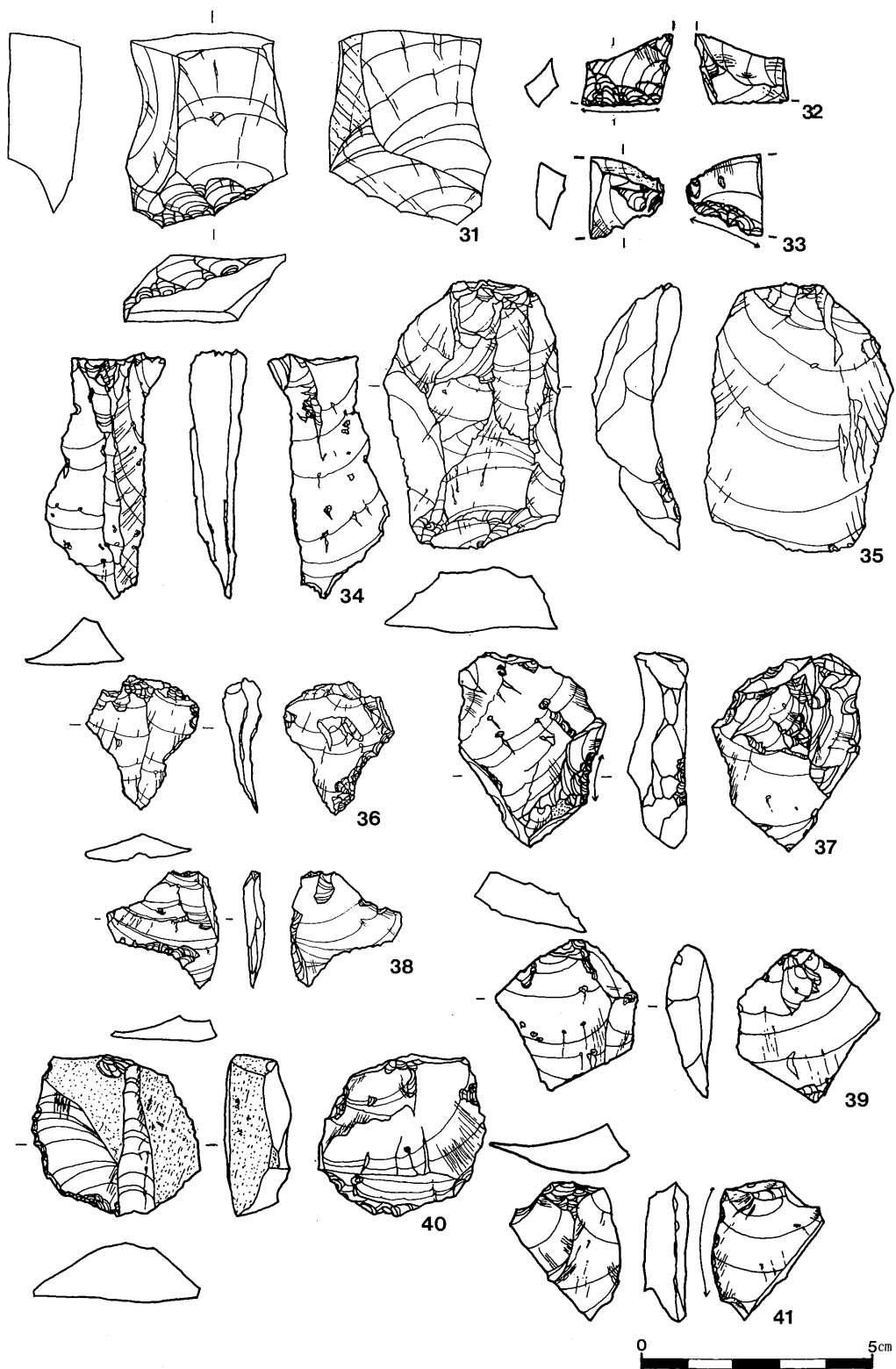
第25図 駒出池遺跡出土の遺物(1)



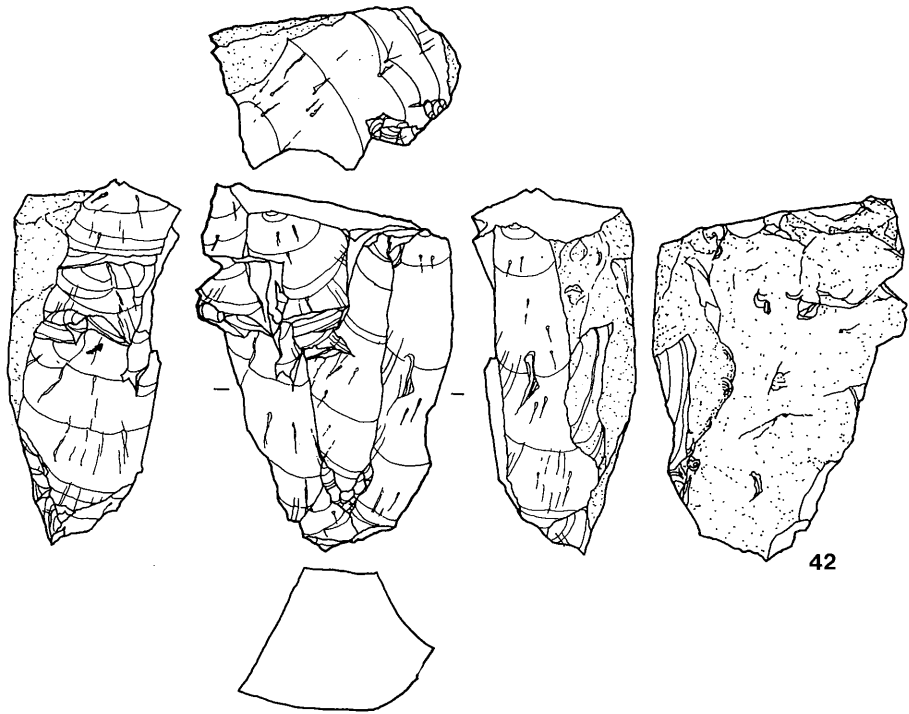
第26図 駒出池遺跡出土の遺物(2)



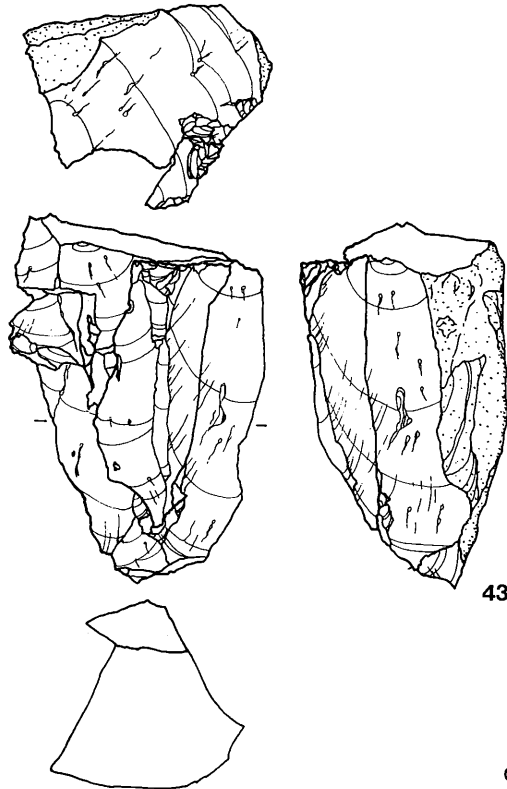
第27図 駒出池遺跡出土の遺物(3)



第28図 駒出池遺跡出土の遺物(4)



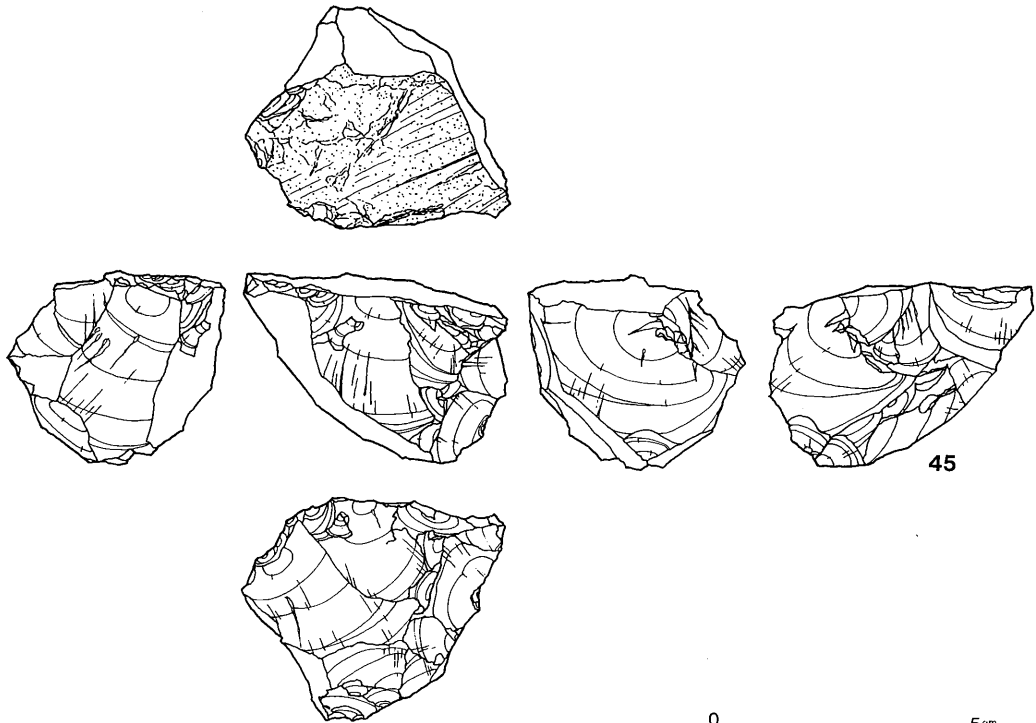
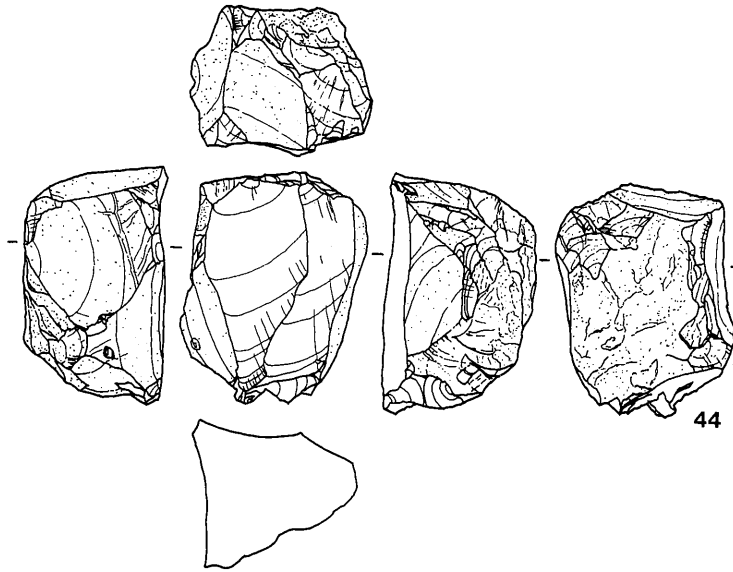
42



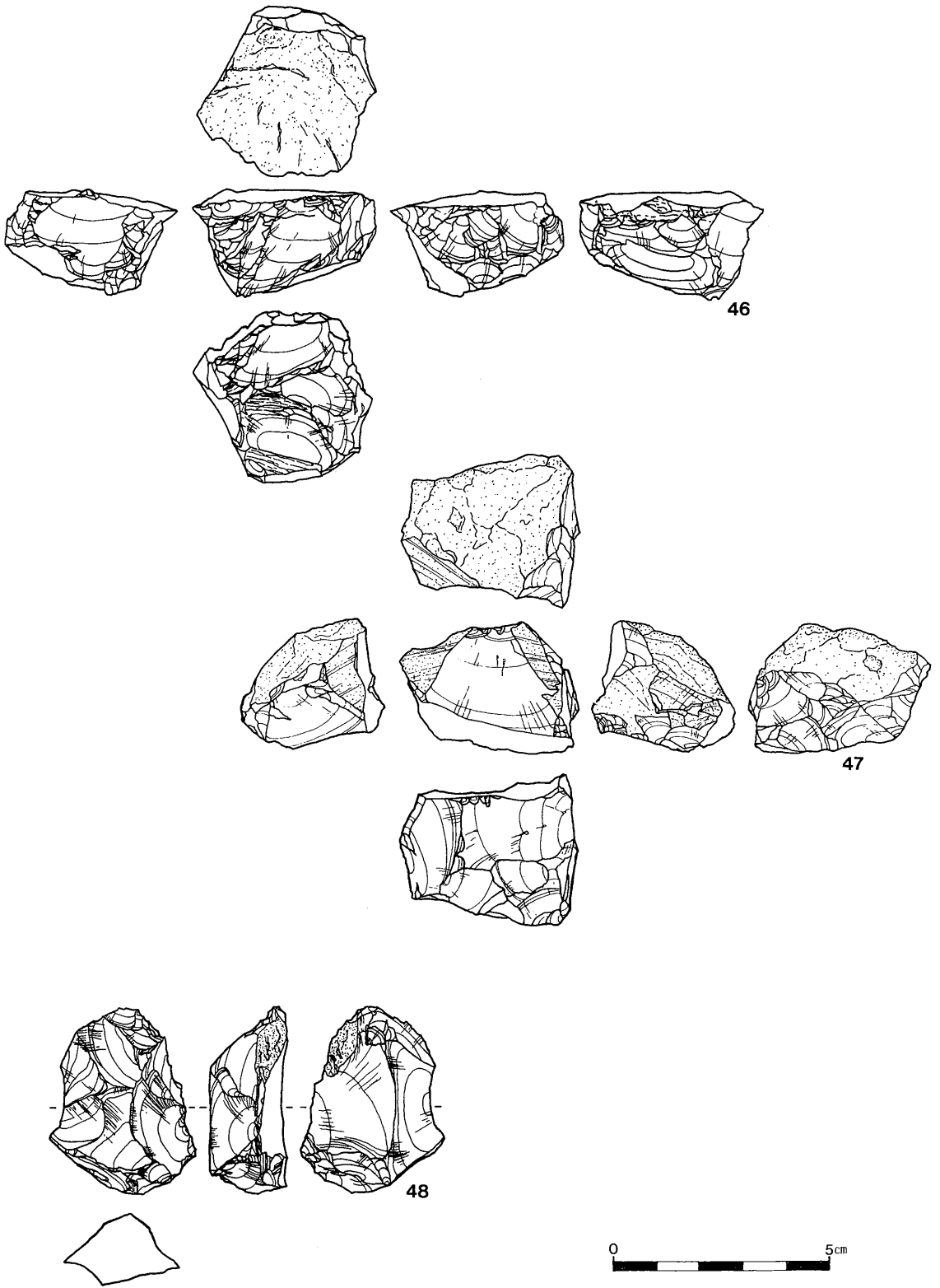
43



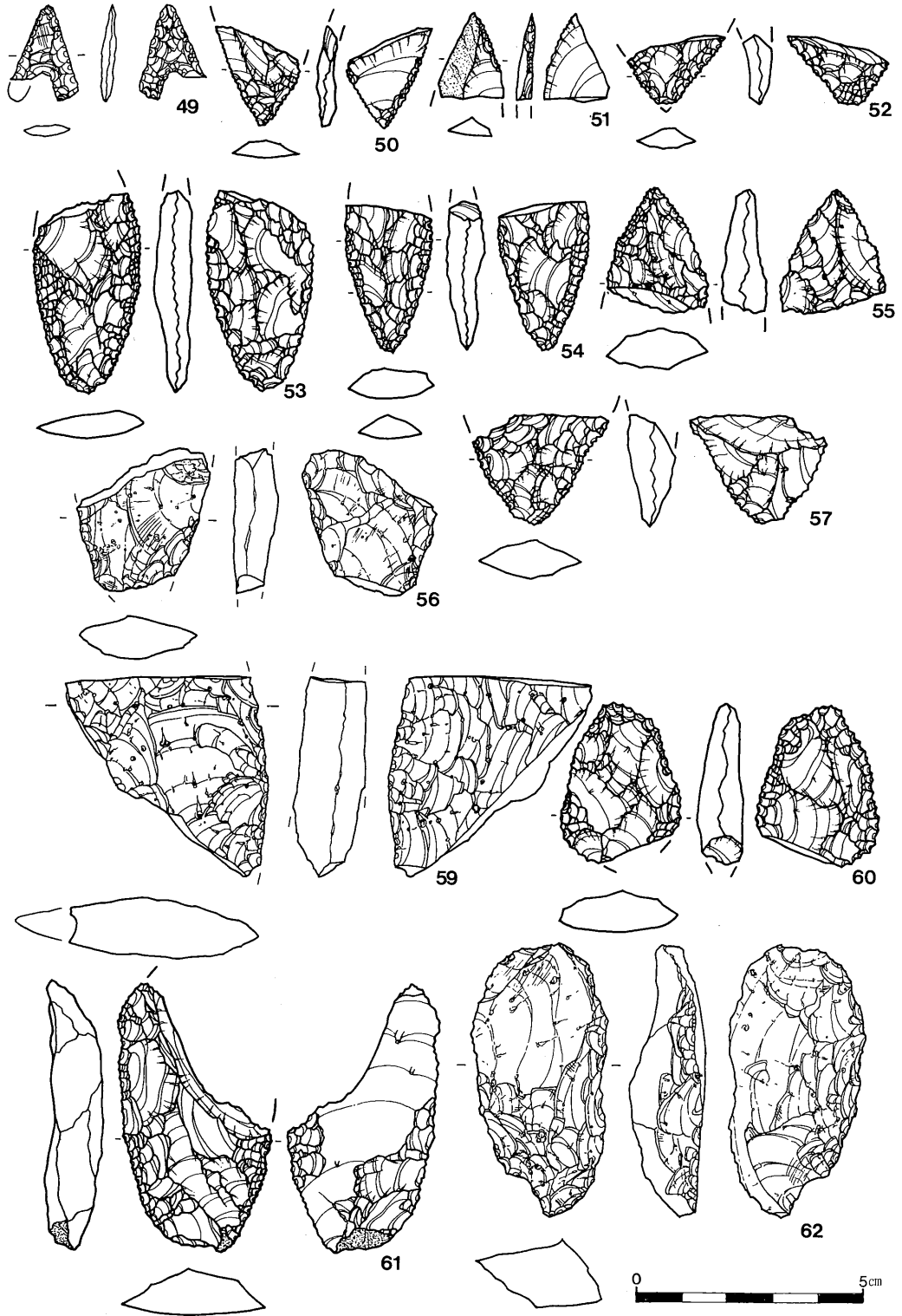
第29図 駒出池遺跡出土の遺物(5)



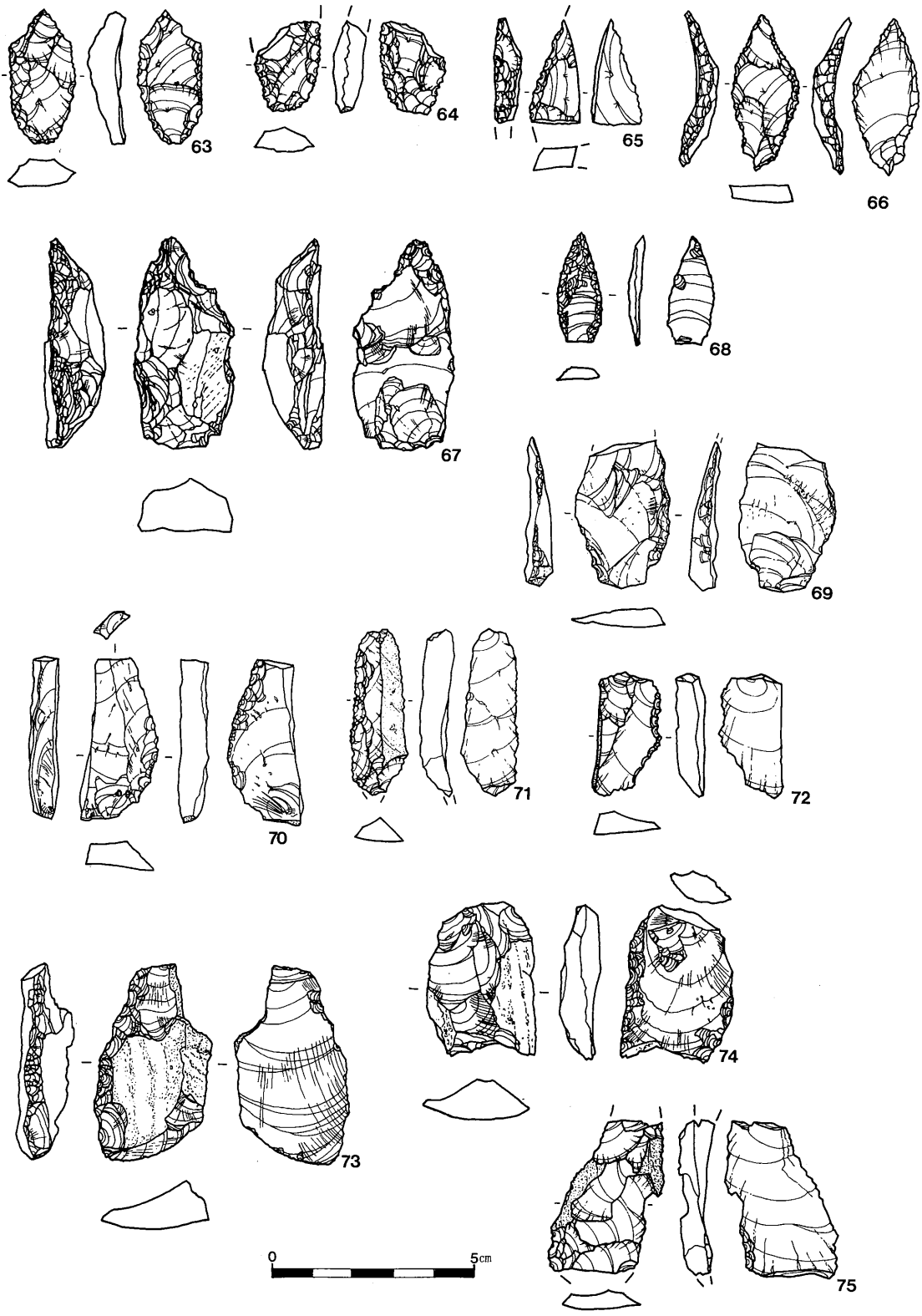
第30図 駒出池遺跡出土の遺物(6)



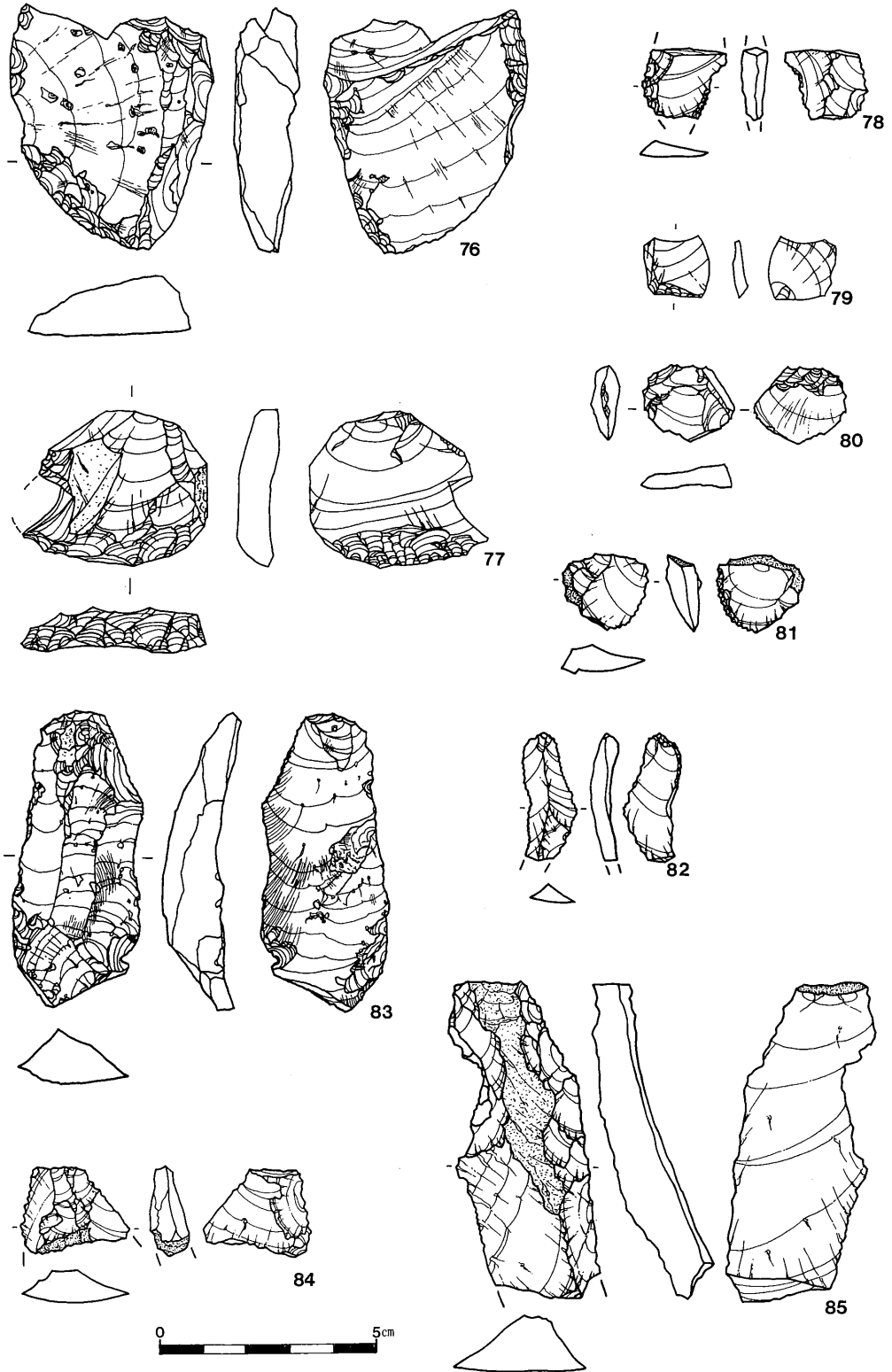
第31図 駒出池遺跡出土の遺物(7)



第32図 駒出池遺跡出土の遺物(8)



第33図 駒出池遺跡出土の遺物(9)



第34図 駒出池遺跡出土の遺物(10)

5 駒出池周辺の遺跡

A. 池の平遺跡群の研究史

池の平遺跡群は、千曲川水系の大石川と水無川にはさまれた池の平溶岩の緩斜面上に分布する遺跡群で、主として尖頭器文化の遺跡が多いという特徴がある（八千穂村池の平遺跡発掘調査団、1986）。この付近は八ヶ岳山体の深い森林におおわれていて、地表調査はほとんどできない状態であり、道路や溜め池など人工的に開削されたところのみ遺物が発見され、遺跡が確認されている。したがって、現在知られている以外に多くの遺跡が分布しているものと推定される。

池の平遺跡群は興水利雄氏らにより発見され、1954年には芹沢長介氏らが池の平牧場（駒出池付近）を訪れ、尖頭器等を採取したという（井出正義、1982）。「信濃史料」によれば、畑八村の中に「No.1899、池平牧場、山麓、無土器文化、blade・Point、（所蔵）佐々木隆蔵・佐藤達夫・興水利雄」との記載がある（信濃史料刊行会、1956）。さらに、1958年には駒出池が造築され、翌年には佐々木広雄氏により尖頭器等が採取されたことにより、佐藤達夫氏が確認に訪れている。

1971年には、林道八ヶ岳線の建設により、塩くれ場、トリデロック、湧水の3地点が発見され、同年6月1日から6日まで発掘調査がおこなわれた。この時に「池の平遺跡」の名称がはじめて用いられた。

1979年、佐々木徳治氏により大反地点が^{おおそり}発見され、さらに佐々木徳治・小宮山一美氏らによって駒出池、八千穂レイク付近からも遺物が多数表採された。これを受けて、1983年、1984年に大反、塩くれ場の発掘調査がおこなわれた。この時に周辺地域の遺跡分布調査をおこない、小塚明神、水無川上流の2地点が発見された。これら7地点はかなり広い地域に分散していることから、全体を池の平遺跡群とし、各地点は遺跡として再定義した（八千穂村池の平遺跡発掘調査団、1984・1986）。この遺跡名称の整理にともない、従来の池の平牧舎上（池ノ平牧場）遺跡は駒出池遺跡と改めた。

駒出池遺跡では、1986年から1991年までに4回の発掘調査をおこなった。この間、調査団では広域的な遺跡分布調査を実施し、あらたに4遺跡を確認し、また2遺跡で尖頭器文化の遺物をもなうことを確認した。次章では、八千穂村池の平遺跡発掘調査団（1986）以降に明らかとなった、この周辺の遺跡・遺物について記載する。

B. 新しく発見された遺跡と遺物

(1) 八千穂レイク遺跡（第35図）

遺跡：八千穂レイクは大反溶岩がつくる崖線のすぐ下に位置し、緩斜面となっているところで1973年に農業用温水溜池として開削された。標高はおよそ1,505mであり、遺跡は池の北側（北地

点)と南側(南地点)に確認されている。両地点ともに段丘礫層に含まれる黒曜石の原石(円礫)がわずかに散布している。前回の報告では、南地点で剥片4点、原石(円礫)7点、北地点でチップ1点、原石3点がえられていた。その後、南地点に道路、テニスコートなどが建設され、その工事現場跡地からナイフ形石器、石核等が採集された。

遺物：ナイフ形石器(1)は、黒曜石製の縦長剥片の2側縁を刃つぶし加工してあり、基部(打面側)は欠損している。テニスコートのトイレ工事現場で採集されたものである。

石核(2)は、良質の黒曜石を素材とし、幅広い剥片を剥離しているものである。

(2) 四十町歩平遺跡(第35図)

遺跡：国道299号線の標高1,140m付近の大石川支流ぞいの平坦地で、下流側からは最後の畑地となっている地点に遺跡がある。

遺物：尖頭器未製品、石核、剥片などすべて黒曜石製である。尖頭器の未製品(3)は、自然面を残す剥片の一部に平坦な剥離が施されている。

(3) 大石遺跡(第36図)

遺跡：大石集落の下流よりの島崎和夫氏宅(八郡1367-2)で国道より高い敷地内に車庫を建設するために掘削中に、良質な黒曜石製の尖頭器1点が島崎氏によって採集された。

遺物：1面が平坦で、断面が三角形に近い両面調整の尖頭器(4)である。先端部が一部欠損するもののほぼ完形に近いものである。保存長は、長さ6.6cm、幅3.2cm、厚さ約1.5cmである。

(4) 崎田原遺跡(第36図)

遺跡：千曲川右岸の崎田地区にひろがる段丘面上に遺跡が分布する。開田工事にともない、一部発掘調査がおこなわれ、縄文時代～平安時代の遺跡であることが確認されている(五十嵐幹男, 1955・1958)。この遺跡南部の下諏訪神社西側で、1982年に小宮山一美が尖頭器1点を採集した。

遺物：無斑晶質安山岩製の両面調整の尖頭器(5)である。長さ8.8cm、幅3.9cm、厚さ1.15cmで、全体として扁平な形で、基部が比較的幅広で、最大幅は基部よりにある。やや小形である点と、調整がやや粗い点が問題となるが、全体的な形状は旧石器時代末の種子柴型尖頭器に共通するものである。

(5) 石骨遺跡(第37図)

遺跡：水無川と柳河原から流れてくる沢の合流点の東側にひろがる段丘面上に、遺跡が分布する。標高約1,050m付近である。道をはさんで上側と下側の2段の段丘に遺跡は分かれる。上段の方が遺物が多い傾向がある。

遺物：縄文土器と平安時代の土器が出土している。記載したものはすべて、上段のものである。第37図は、石骨遺跡で表面採集された土器・石器である。

1は、縄文時代早期後半の条痕文土器である。条痕は表面にのみみられ、裏面は条痕文を施した後、なで消されているようである。2も条痕文土器である。表面は風化のため文様は不鮮明であり、裏面への施文はみられない。1、2ともに胎土に多量の繊維を含む。

3はLRの単節縄文を施すもので、胎土に繊維を多く含む。縄文時代前期前半に属するものと考えられる。

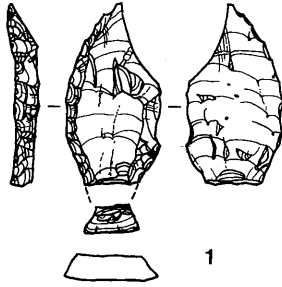
4は列点状の刺突文が施されたもので、縄文時代前期中葉の有尾式に比定できよう。胎土に繊維を含む。

5は、曲線状の沈線を施す胴部下部の破片であり、縄文時代後期初頭～前葉のものと考え方が明確でない。

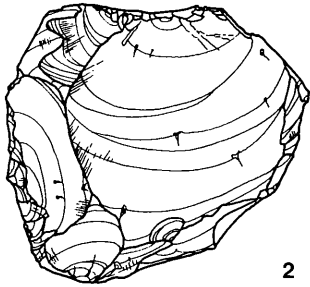
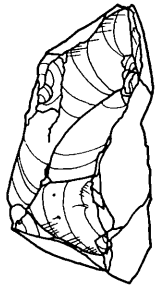
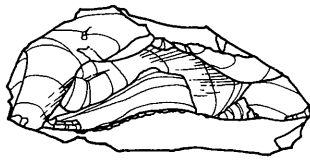
6は、口縁部に刻み目をもつ太目の隆帯をめぐらした土器で、他に施文はみられない。堀之内式に比定できる。7は、いわゆる網代底の底部破片である。6・7はいずれも縄文時代後期のものである。

8は、砂岩製の磨石で、両端および側面部に敲打痕がみられ部分的に剝離が生じている。また両面中央部付近には敲打によって生じたとみられる複数の浅い凹がある。両面ともによく磨かれている。

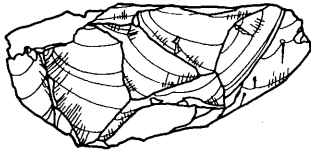
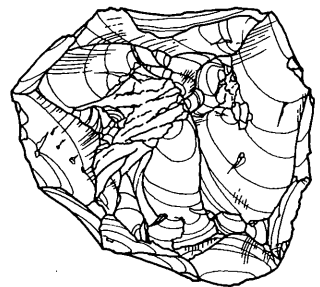
八千穂レイク遺跡



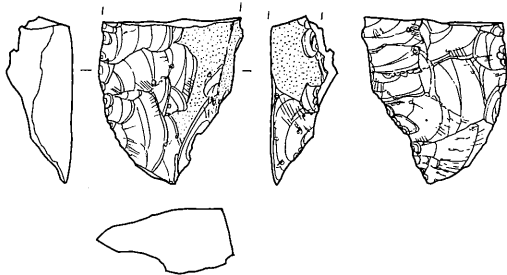
1



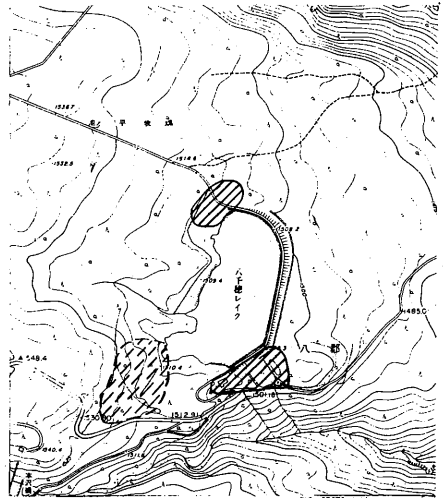
2



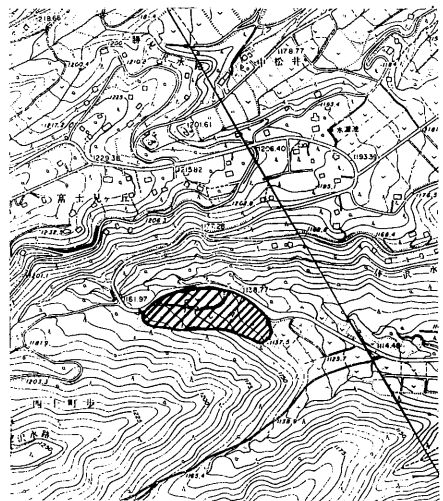
四十町歩平遺跡



3

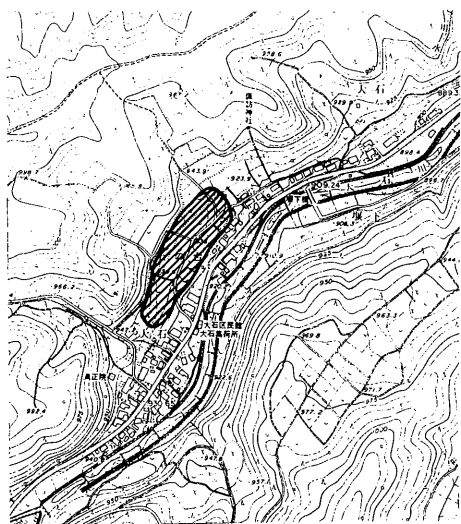
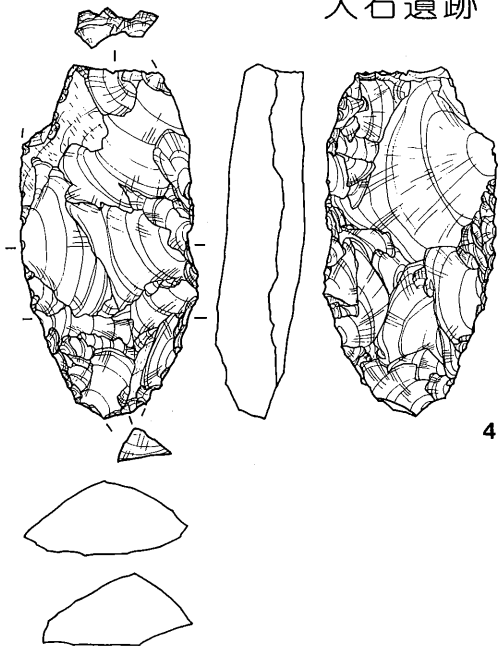


実線—遺跡 破線—原石産地

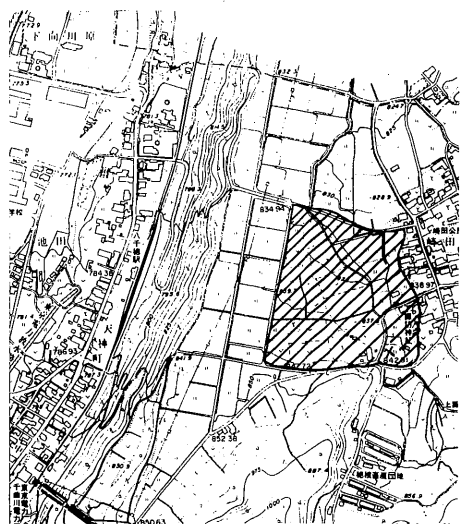
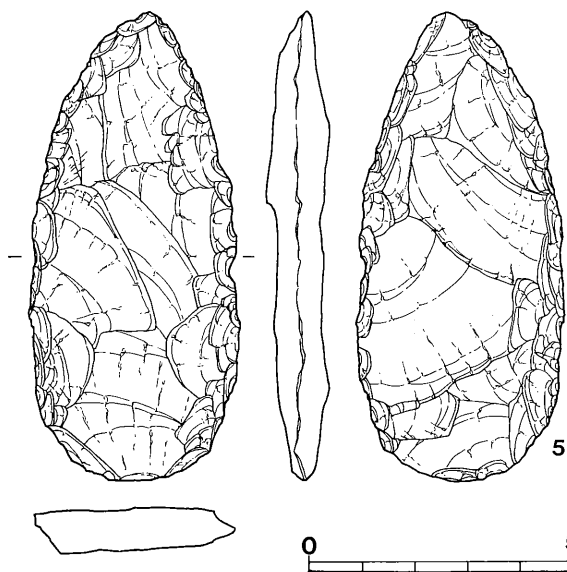


第35図 新しく発見された遺跡と遺物(1)

大石遺跡

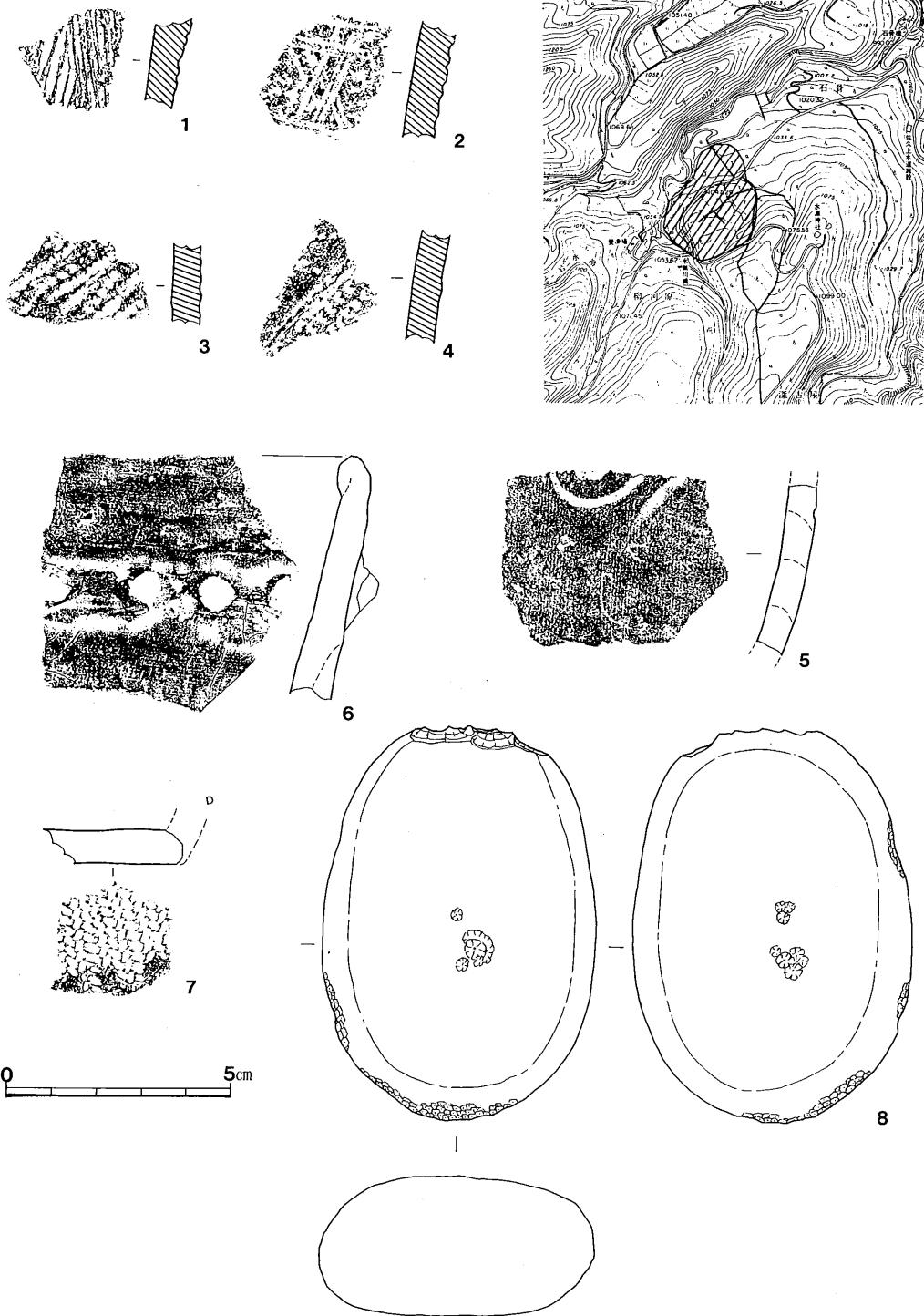


崎田原遺跡



第36図 新しく発見された遺跡と遺物(2)

石骨遺跡



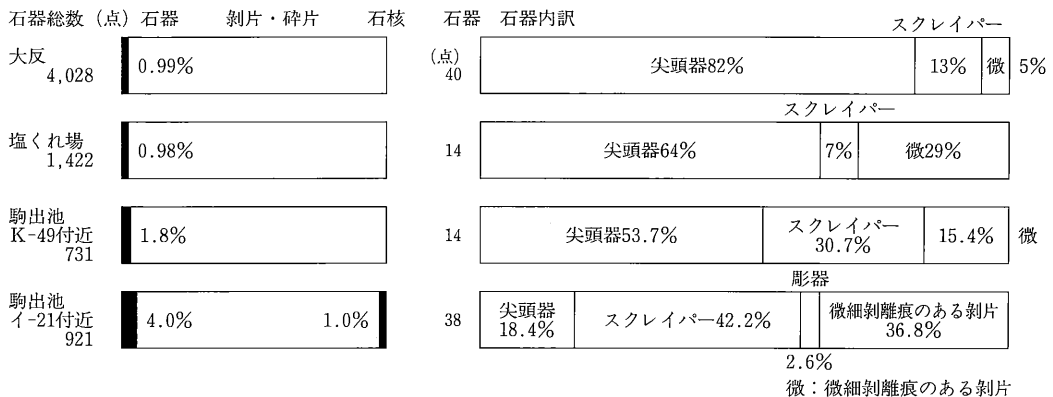
第37図 新しく発見された遺跡と遺物(3)

6 池の平遺跡群における駒出池遺跡の性格

駒出池遺跡は標高1,530mの地点にあり、池の平遺跡群のなかでは低い方に位置する。西側にある溶岩流の末端から出る豊富な湧水と、別の溶岩流によって作り出された日当たり良好な平坦面は居住拠点として絶好の条件である。麦草峠やその近くの大石川源流には黒曜石の原石産地があり、遺跡の南側を流れる大石川では現在でも黒曜石の転石が採取できる。

池の平遺跡群の中でも第1回、第2回と調査した大反、塩くれ場遺跡はその立地、遺物の組成からみて、尖頭器製作址であったと思われるのに対し、駒出池遺跡は異なった性格を持っているものと思われる。

イ-21グリッド付近の石器組成をみると、尖頭器7点、スクレイパー16点、彫器1点、ノッチ1点、微細剥離痕のある剥片14点、石核9点と器種が多様である。なかでも、石核が多いのは特徴的である。また、尖頭器製作址のように破片が遺物全体を占める割合が特に多いということはない(83%)。グリッド内では炭が多く検出され、南側では配石遺構が確認されている。K-49グリッド付近の石器組成は尖頭器7点、スクレイパー3点、微細剥離痕のある剥片3点、その他剥片、破片であるが、中でも石器に対する破片の割合が多く(92%)、尖頭器も他の器種に比べると多く出土している。7点の尖頭器のうち、5点が製作途中の破損品である。また、スクレイ



第38図 池の平遺跡群の石器組成

第13表 池の平駒出池遺跡遺物出土状況

	イ-21付近	K-49付近
尖頭器	7	7
スクレイパー	16	4
微細剥離痕のある剥片	14	2
石核	9	0
剥片	101	33
破片	774	685
その他	16	18
合計	937	749

パーが3点出土しているが、いずれも黒曜石ではなく搬入石材の珪質頁岩が用いられていることから、器種による石材の使い分けが行われていたと思われる。

これらのことをあわせてみると、駒出池遺跡は池の平遺跡群のなかでは居住拠点的要素の強い地点であると考えられる。さらに加えてK-49グリッド付近は尖頭器製作址でもあったと思われる。

7 駒出池遺跡の編年的位置

池の平遺跡群の第1回・第2回発掘による大反遺跡・塩くれば遺跡の調査の結果、尖頭器を中心とする石器群は、層位・石器の形態から大きく見ると2群に分けられることが明らかとなった（八千穂村池の平遺跡発掘調査団，1986）。すなわち、漸移層のすぐ下にあたるソフトローム付近に包含される薄手の入念な加工による両面調整尖頭器を中心とする上層の石器群は、この大反遺跡を代表するものであり、神子柴文化から縄文時代草創期の初期のものと推定される。さらにその下のソフトロームからは、やや粗い調整を特徴とする周縁調整、半両面調整、両面調整の尖頭器からなる下層の石器群がえられている。これはナイフ形石器文化後半期に並行する尖頭器文化に属すものと推定される。

第3回から第6回発掘がおこなわれた駒出池遺跡では、K-49周辺ブロックとイ-21周辺ブロックが主に調査された。K-49周辺ブロックでは、デカパミロームを中心に両面調整尖頭器7点、スクレイパー4点など約750点の石器が出土した。このブロックの石器群は、男女倉技法あるいは典型的なナイフ形石器を含まないことから、ナイフ形石器終末期の尖頭器文化の石器製作址であると推定される。

イ-21周辺ブロックでは、デカパミローム最上部からモヤIを中心とする層位から、尖頭器7点、スクレイパー16点、彫器1点など853点の石器が出土した。前者より後出で、細石器文化から縄文章創期の所産であると思われるが、詳細な位置は特定できない。この近くでは池の造成時に大形の尖頭器がまとめて出土したといわれている。この大形尖頭器はおそらく神子柴文化から縄文章創期のものと推定される。

駒出池遺跡では、その後、縄文時代前期後半（約5,500年前ごろ）の諸磯b式期の遺物がえられている。

池ノ平遺跡群全体をみると、その大半の遺跡が後期旧石器時代のナイフ形石器文化終末期と神子柴文化～縄文章創期の2段階の尖頭器石器群に属すものである。この中であって、八千穂レイク遺跡からはナイフ形石器と縦長剥片剥離石核が出土している。これらは、ナイフ形石器を主体とする石器群に属すものと思われ、尖頭器石器群に先行するものと推定される。

8 まとめと今後の課題

1986年から1991年まで足掛け6年、延べ4回にわたった駒出池遺跡の発掘調査によって、本遺跡のほぼ全容が把握できた。以下にその成果と問題点を述べる。

A. 地質学的成果と問題点

発掘地の地質層序を確立し(第3章 第10図)、挟在する鍵層の対比検討の結果、次の諸点が明らかになった。

- ①池の平溶岩Ⅰの流下時期は後期更新世の下部佐久ローム層の“オレンジパミス”降下期以前までさかのぼること
- ②上部佐久ローム層Ⅳの“デカパミBⅡ上半部”と上部佐久ローム層Ⅴの“デカパミローム”は不整合による累重関係にあり、遺物包含層は“デカパミローム”およびその上位であること
- ③“モヤⅠ”“モヤⅡ”は完新世の黒色火山灰層に対比され、大反・塩くれ場遺跡発掘地の上部佐久ローム層の“黄モヤ”の上位に位置すること
- ④“デカパミBⅡ下半部”に挟在する“池の平火山灰Ⅱ”は始良Tn火山灰層(AT)に比定されること

この結果、八ヶ岳の東麓における後期更新世(上部佐久ローム層)の層序はより詳細に区別されることになった。また“池の平火山灰Ⅱ”にまつわる年代の問題は一応の決着を見たわけであるが、池の平遺跡群のより下位層準への追求および尖頭器文化の変遷史の確立とあいまって、上部佐久ローム層Ⅱの各単層毎のより詳細な分布の追求が必要となってくるであろう。

B. 考古学的成果と問題点

第3回～第6回発掘による駒出池遺跡の調査では、主に2ヶ所のブロックの分布と遺物組成が明らかとなった。

- ①駒出池遺跡では、K-49周辺とイー21周辺の2ヶ所のブロックが確認された。両者はともに尖頭器を中心とする石器群がえられた。
- ②K-49周辺ブロックは、駒出池の北西の丘陵緩斜面に位置し、3×2mほどの範囲に約750点の遺物が集中していた。主な石器は、両面調整尖頭器7点、スクレイパー4点、微細剥離痕のある剥片2点などである。このブロックは、尖頭器の製作址であると推定される。
- ③イー21周辺ブロックは、駒出池の北岸の微高地に位置し、3×4mが調査された。853点の遺物がえられており、主な石器は両面調整尖頭器7点、スクレイパー16点、彫器1点、微細剥離痕のある剥片14点、石核6点などである。K-49に比べてスクレイパーや微細剥離痕のある剥片が多い豊富な石器組成を示しており、石器製作の場というよりは生活の場であった可能性がある。

- ④K-49周辺ブロックは後期旧石器時代の尖頭器文化に属するものである。I-21周辺ブロックは、前者より後出で、細石器文化直後の神子柴文化から縄文草創期のものと推定される。
- ⑤駒出池遺跡から、わずかではあるが縄文時代前期後半の諸磯b式土器が確認された。
- ⑥池ノ平遺跡群では、新たに大石遺跡、四十町歩平遺跡の2ヶ所の旧石器時代～縄文草創期の遺跡が確認された。八千穂レイク遺跡では、この遺跡群でははじめて典型的なナイフ形石器文化の石器が確認された。さらに、石骨遺跡が発見され、縄文時代早期・前期・後期の遺物が出土した。
- ⑦池ノ平遺跡群について多くの知見がえられたが、調査が及んだのはごくわずかな部分である。これまで明らかになったのは、遺跡群の中でも開発・開析のすすんだごくわずかな面積であり、まだ未知の遺跡が多く埋もれていることと思われる。黒曜石原産地の遺跡群として重要な地域であるが、その研究・保護に関しては途についたばかりであり、多くの課題が山積している。

付編 1 八千穂高原の歴史

井出 正義

八千穂高原は八郡山と呼ばれ、茶白山（標高2,384m）など北八ヶ岳の東斜面に位置していて、大石峠（標高2,185m）を介して、西方山麓の諏訪郡芹ヶ沢（現茅野市）と古くから交流が行われていた。江戸時代には、大石村を枝郷とする八郡村に所属し、八ヶ岳山、八郡山などの名でよばれ、取出、宿岩、高野町、大窪、下畑、中畑、上畑、八郡の八ヶ村の入会山で、山元の八郡村が山年貢を取りまとめて納入し、八郡と大石から一名ずつ山守が命ぜられてその管理にあっていた。

現国道299号線の麦草峠や大石川源流付近は黒曜石の埋蔵地で、原始時代には茅野市側の冷山やさらに遠く和田峠付近に産する黒曜石も、この八千穂高原を通して佐久地方や関東方面に運ばれていたことは、池の平遺跡をはじめ、各地の先土器・縄文時代遺跡の発掘調査によって明らかにされている。

八千穂高原の入り口に位置する大石の蓬間遺跡では1981（昭和56）年に、灰釉陶器高台付皿2、土師高台付内面黒色椀2 その他破片と共に、管状紡錘形土錘70個を出土した。管状土錘は漁網用の錘りであるが、従来千曲川流域にはその出土数が比較的少なかった。しかもこの灰釉陶器は10世紀後半に東濃地方で焼かれたものと考えられるから、平安時代後期にこの大石川で網を用いた漁法が行われていたことを示す。大石川は北八ヶ岳の白駒池や雨池に源を発し、良質で豊富な水量をもち、現在佐久平上水道の最も有力な水源であり、マスなどの養殖漁業も行われている。蓬間遺跡は白駒の池を水源とする大石川と、雨池を水源とする八柱川の合流点にある。ここをさかのぼれば大石峠を越えて、諏訪郡山浦地方に通ずる古来の交通路であって、土錘を多く出土する諏訪湖周辺の古代遺跡との関係の深さが考えられ、千曲川上流域の漁業と古代集落のあり方を考える上に極めて重要である。

八千穂高原の所在する八千穂村の千曲川西岸地区が記録の上に初めて見られるのは、建武2年（1335年）10月21日、山城国大徳寺領・信濃国佐久郡伴野庄の雑掌、水沼実真が、同庄各郷村の年貢員数を大徳寺に報告した注進状（「伴野庄年貢注文案」大徳寺文書）で、「畑物村百貫文（中略）大石・八郡ハ案内を知らず」とある。畑物村は近世には、下畑、中畑、上畑、大窪の四ヶ村に分かれ、現在八千穂村の大字畑となっている地域である。大石、八郡の両村の村高はその時点ではまだ、大徳寺が寺領支配のため派遣した雑掌（役人）には、正確に把握されていなかったであろう。

上畑の勝見沢は、八郡部落の北方約1 km、石堂川北岸の台地上にあるが、昭和15年ごろ、開田中に石囲い炉址から、土師器の破片と共に瑞花鳳凰紋八稜鏡が出土している。直径約10cmで、紋様は摩滅がすすんでいるが、先年茅野市阿弥陀堂構井遺跡から出土した3面の八稜鏡に類似性が

見られ、平安末期に諏訪地方との交流を示す一資料と考えられる。上畑の熊野宮は樹齢1,000年以上と推定される神代杉があるが、ここに鎌倉時代の板碑が3面保存されている。徳治2年(1307)の刻銘があり、南佐久郡下最古の板碑である。板碑は青石塔婆とよばれ、秩父産の緑泥片岩を素材としているから、十石峠や榑峠を越えて秩父から運ばれてきたもので、中世における関東と佐久地方との交流を示す貴重な資料である。

中世の城館跡は馬越の馬越城跡、八郡の通城跡、佐口の佐口城跡など、土豪(地侍)の居館跡が、八千穂高原の裾野の台地上にある。また、千曲川畔の低地に接する段丘崖上には、大石川烽火台、権現山砦、下畑城、下畑下の城などの山城跡が、佐久甲州往還(国道141号線)ぞいにならんでいて、戦国時代甲斐武田氏の佐久地方侵攻に関連した伝承を残している。

江戸時代になると、街道の整備が行われ、小諸城主仙石秀久は慶長10年(1605)、佐久郡諸村に人夫を割り当てて、佐久甲州道の道普請を行った。中山道岩村田宿から、甲州街道韭崎宿を結ぶ佐久甲州道は、脇往還として宿場が置かれ、問屋と伝馬が常備され荷物の継立を行った。上畑宿もその一つで、大石川畔には一里塚も設けられ、現在も一里塚の地名と榎の大木がその名残をとどめている。八郡村大石と諏訪郡芹ヶ沢の間では、両村住民が大石峠を越えて互いに産物を交易していたが、宝暦6年(1756)、大雪で八ヶ岳山の木が倒れて、馬の通行ができなくなってしまった。30年後の天明6年(1786)11月に下畑村の医師小宮山桃原がこれを復旧した。佐久郡大石名主与惣兵衛と諏訪郡芹ヶ沢村名主市五郎は連名で、小宮山桃原に感謝の意味をこめて、次のような取替書を差し出している。その大要は「今後は、幕府の公定貨銭の二割増(許容範囲)として、本馬一匹460文、軽尻一匹274文、人足一人208文と定めて、両村相互に仲むつましく荷物の継送りをして、決してこの規定に反することのないようにいたします」とある。このように幕府裁定の伝馬人足賃金を定めて、大石、芹ヶ沢両村が継立をしいていたことは、両村が宿場と同様の機能を持っていたと理解することができる。

しかし中山道の宿場にとっては、大石峠道のような間道がこのような継送りの機能を持つことは許すことのできない行為であった。幕府・大名の公用荷物を無賃或いは安い公定貨銭で運ばなければならない宿場にとって、商人荷物だけが宿場の経営や生活を維持するための収入源である。それが間道を通ってしまえば、宿場の経営が破滅し、幕府の交通の大動脈も止まってしまうことになる。こうした矛盾が現実となって争われたのが、紀州藩の御用途米や水戸藩御囲米の大石峠通過問題であった。幕末、外国船の来航、尊王攘夷論などが起き、海防、軍備拡大等で財政の窮乏した各藩は、用途米、御囲米などの名目で、大量の米の買い付けをして、貸付米、払米などによって利益を上げようとした。

弘化元年(1844)、紀州藩は、伊那高遠藩領で大量に買い付けた米を「紀伊殿用途金貸付引当米」として、芹ヶ沢村から大石へ継立、高野町問屋を経て、余地峠越え、上州吉井貸付所に引き取り、倉賀野宿から船積みして江戸屋敷に廻米するという計画であった。この計画は中山道下諏訪から高崎まで17宿問屋の訴えによって、幕府勘定奉行の意をうけた中之条代官所によって、八郡村で

差留められ、訴訟の結果、芹ヶ沢へ継ぎ戻された。

安政2年(1855)、水戸藩が諏訪藩領で買い付けた米を、水戸藩御困米として、芹ヶ沢村の紋右衛門らが運送を請け負って、大石峠越え、上州吉井經由、倉賀野河岸から江戸に廻米することになった。これに対しては、中山道各宿問屋の外、米を西上州に移出している佐久平の171ヶ村の農民が、死活の問題として幕府勘定奉行にその阻止を嘆願している。

このような歴史を秘めた八郡山(八千穂高原)は、前述のように、八郡村を山元とする八ヶ村の会合山で、山役永7貫300文余を上納して、各村の村高に応じた馬札をもって入山し、家材木、薪、馬草、刈敷を採取して、農業経営を支えてきたのであるが、明治8年(1875)、地租改正にあたり全山を国有地に編入されてしまった。その結果、入山を禁止された八郡区住民は事の重大さに驚いて、農商務省に対して明治33年(1900)、国有林野下戻の行政訴訟を提起し、同37年(1904)にはこれを畑八村に引きつぎ、13年後の大正2年(1913)に八郡山4,000町歩の下戻しに勝訴した。下戻し山林野のうち1,000町歩が成功報酬(1/3の約束)として弁護士に支払われ、それは現在個人企業の所有林となっている。残る3,000町歩の広大な山林野が、畑八村有に帰し、現在は八千穂高原として、大きな将来展望をもって開発されてきているのである。

八千穂高原を通過して大石峠を越える道は、明治以後、鉄道の開通によってすっかり忘れ去られていたが、大正時代に製糸業を中心とする経済の発展に対応して、南佐久郡中南部と諏訪郡山浦地方を結び、諏訪湖畔に達する道の必要性が注目され、昭和7年(1932)11月、町村道茅野佐久線の建設が着工され、同10年県道に編入され、同16年まで工事が進められたが一時休止となった。戦後昭和27年(1952)から工事が再開され、同36年(1961)には主要地方道茅野佐久線となり、同41年(1966)に開通した。現在は埼玉県飯能市と茅野市を結ぶ国道299号線となり、麦草峠(標高2,120m)は日本国道の最高地点として知られ、付近の亜高山帯原始林の中に白駒池、雨池、双子池などが点在する高原山岳観光道路となっている。

現在八千穂高原は広大なカラマツの人工造林と、亜高山性針葉樹林帯を主とし、シラカバ、ミズナラ等落葉樹の美林の中に、レンゲツツジの群落がいろいろある。しかし、かつての池の平牧場には馬や牛の姿はない。カラマツの美林は育ったが、用材としての販路は閉ざされている。八千穂高原は新しい観光開発を模索している。高原に点在する施設には、NHK外国電波受信所、佐久上水道水源と水源神社、八千穂高原別荘地、八千穂高原スキー場などがある。旧池の平牧場には自然園、駒出池付近のバンガロー、キャンプ場、フィールドアスレチック、八千穂レイク、自然休養林、八千穂日中青年の家、姉妹都市府中市民保養所「やちほ」などがある。

付編 2 昭和34年(1959年)駒出池で尖頭器発見 —発見の二つの要因—

佐々木廣雄

1 戦後初の中松井遺跡発掘調査 (昭和26～29年)

林道工事現場から出た奇怪な石に端を発して、竹内恒、野沢南高小林正巳両先生の指導をうけた私(当時、畑八開発企業専務理事)は、幻の名著「南佐久郡の考古学的調査(昭和3年、八幡一郎著)」などを読み、「目から鱗が落ちる」思いで、旧畑八村の土器の表面採集を行いほぼ完了させた。そしてその拓本、写真などを竹内先生を通じて東大に報じた。

その結果、昭和26年秋から東大八幡一郎先生の指導で発掘調査が始まった。責任者は五十嵐幹雄先生、測量は佐々木廣雄、発掘は畑八青年団(団長水上一他三百数十名)、土地所有者笹崎正雄氏、最初の入植者高見沢芳治翁他地元開拓者の協力や、筑波大学岩崎拓也教授(当時教育大学生)の飛び入り参加などがあり、発掘調査は好調に進んだ。昭和28年には出土品の展示と八幡先生の講演会を開催し、戦後初の当地方の発掘は多くの人々の関心を集めた。遺跡は縄文早期末の厚手の表裏縄文土器、繊維の入った条痕文土器(尖底部も出土)などが主体で、住居跡2～3が発掘された。当時は岩宿遺跡や北海道などで深いローム層の中から石器が発見され、縄文以前の文化の存在が問題視されていた頃で、当然私も関心をもった。戦後の考古学はこうしたアマチュアの好奇心から出発した例が多かったように思う。

2 駒出池の造築 (昭和33年)

当時の八千穂村長井出幸吉氏は「八千穂高原に湖がない、人造湖でも池が欲しい。」と強い意向を持っていた。私が牧場の番小屋の前に湧水を利用して池ができる地形があることを提唱したところ、「次の日曜日に下見をする」ことになった。村長、岩崎陸三係長が酒を呑みながら見ている前で、ハンドレベルで池の水面周と築堤の位置を杭を打って示したところ、「明日から工事に掛かれ」と豪傑村長の天の声。こちらも工事待ちで人手が余って困っており、「実費でやりましょう」と言うことで5月初めに着工した。昭和33年6月16日に完成満水(当時の館報による)。工費はわずか三十数万円。工事は築堤の両サイドの尾根から一輪車で土を運び出して土堤を造った。西側の採土地(今のキャンプ用のかまど付近)に大きな石が出てしまった。その石の下から翌年春、ポイント(尖頭器)が発見されたのである。

…話が横道にそれるが…翌年村長は「池が小さいので倍にしろ」と言う。私は「それは地形的に無理だ。大きい池を造るならもっと良いところがある」と提案。今の八千穂レイクがそれである。…

3 尖頭器の発見 (昭和34年5月)

昭和33年の秋は大水害があり34年雪解けを待って、私は駒出池の築堤の様子を見に行った。その時西側の土取り跡一面に黒曜石の破片が露出散在していて、例の石の下から、完全な尖頭器二個と折れたもの三個を発見。その日のうちに八幡先生に電話をかけ、推定1.5mのローム層から出土、木葉の形をした両端が尖った尖頭器であること、を報告した。先生は不在で、助手の佐藤達夫氏が応答し、「今夜の夜行で行く。翌朝5時に駅に着くのでたのむ。」との打ち合わせで翌日は工事場行きのトラックに便乗して現地に着いた。昼頃には完全な尖頭器を数個(長さ5~10cm程)、折れたものや未成品など数個(石の下の棚状の所に加工したものをまとめて置いたという感じであった)、その他剥片等を持って午後三時頃の汽車で彼は勇躍帰京した。

八幡、芹沢長介、杉原荘介各教授の見解も「アジア大陸東北部の旧石器に類似しており完全な尖頭器で日本で3~4番目の有力な発見」とのことであった。佐藤氏は熱中のあまり、八幡先生を飛び越して旧石器を求め方々を飛び回り、中松井他の発掘の報告書をまとめるという仕事着手に着かなくなった。当時は芹沢先生の無土器時代説、杉原先生の先土器時代説があり、昭和37年に芹沢先生は放射性炭素量の測定値によって、更新世にまたがるアジア大陸の旧石器に対比する、日本の旧石器時代文化説を発表した。しかし佐藤氏は山内清男氏と共に、新石器時代の七千年~一万年以内で縄文時代の前に無土器時代があり、大陸の旧石器時代ほど古いものではないとの説を唱えた。その理由は石器の刃などの一部が研磨されており、丸のみ形など、大陸のものに比べて精巧なものがあり、植刃(しょくじん)等の技術から、そう古くはないと見たのである。しかしその後の旧石器時代の多くの発掘調査によって、14C年代測定の確かさが認められ、山内、佐藤説は影をひそめた。その上、佐藤達夫氏が間もなく若死にされてしまった。

氏の死去によって、我々青年達が努力した「中松井遺跡発掘調査報告書」もできず、出土品もごく一部が東大の地下室から一昨年、三十数年ぶりに帰ってきた(五十嵐幹雄先生の尽力による)のみである。

思えば、昭和34年、「日本の旧石器文化の存在を確定づける一助となった、駒出池の尖頭器の発見」もついに陽の目を見ることなく終わってしまい、残念でならなかったわけであるが、今回、本報告書に付編として、当時のいきさつや思い出を語らせていただく機会が与えられ、この事が世に出ることができたことを感謝する次第である。

あとがき

私事になって恐縮だが、八千穂村池の平駒出池は、1961年に当時小学校5年生だった編集子が学校のキャンプで延々12km隣町から歩いて来て以来、山菜やきのこを採集に何度か訪れた土地である。八千穂村池の平遺跡発掘調査団の事務局をひきついでほしいとの依頼を受けたとき、いささか荷が重いなと感じつつもなつかしく思ったものである。

さて、八千穂村池の平遺跡発掘調査団は野尻湖発掘調査団に学んだ独特の体制、いわゆる野尻湖方式で行われてきた。野尻湖方式とは一つの目的に向かって自発的、自主的に集まった参加者が対等平等に知恵や技術をだしあい、研究テーマを解明する調査法であり、また、研究成果や出土遺物は中央の特定研究機関にしまい込むことなく、研究終了後、地域の遺産として地元で保管し、参加者のみならず地元で成果を普及するという地元主義をつらぬく姿勢である。

駒出池の発掘は足掛け8年、のべ209名の参加者によって行われたが、野尻湖方式の精神は守られたのではないかと自負している。ただ諸般の事情で秋に発掘を行うなど、やむを得なかったとはいえ、地元住民の参加しやすい日程の設定という点では悔いを残してしまった。

編集作業は、のべ8回の編集委員会と人類考古、地質各専門グループの数度の集会を持って行った。編集委員会は各地にちらばる委員の集まりやすさを考えて信濃町の野尻湖博物館を会場に開かれたことが多かったのだが、それぞれ本来の仕事を持ち、また別の研究テーマをかかえての編集作業であった。したがってスケジュールの調整だけでも困難であり、通常、野尻湖発掘調査団の各種集会にあわせて開かれることが多かった。編集委員会には大阪から電車を乗り継いで参加の委員や新潟、群馬、埼玉、静岡はじめ県内各地から自家用車でかけつける委員等、多大なエネルギーを費やしていただいたが、そんな負担にもかかわらず編集作業が継続され、報告書としてまとめられた背景には、池の平遺跡発掘そのものの持つ魅力が大きかったからではないかとひそかに思っている。

報告書には、八千穂村文化財調査委員の佐々木廣雄さんから駒出池遺跡発見の経過を、佐久考古学会事務局長の井出正義さんからは八千穂高原の歴史について寄稿していただいた。多忙にもかかわらず快くひきうけていただいた両氏にはあらためて感謝を表するしだいである。

さてこの間の発掘によって、現在も春から秋にかけてキャンプを楽しむ観光客でにぎわう駒出池が古代人にとっても大切なキャンプサイトであったことが明らかになり、駒出池遺跡をはじめとする池の平遺跡群の重要性がより増してきている。しかし「朝日に輝く黒曜石の槍先をかざしつつ白樺林の溶岩台地を行く旧石器人の行く先、帰る宿を、また生き生きとした狩りの様子（池の平遺跡群、1986、あとがきより）」を復元するにはまだまだ時間がかかりそうである。

本報告書の出版をもってひとまず駒出池遺跡の発掘は幕を閉じるわけであるが、またいずれの日にか陣容も新たにこの事業が再開されることを望んで止まない。願わくばそこには、村の財産でもある遺物類を目の当たりにしたあるいは直接発掘を経験した希望に燃える八千穂村の若い人達の姿がみられることを祈っている。

引用文献

- 飯島南海男・田口今朝男・片岡健治・友野邦彦・六川忠信・小林将喜 1968 千曲川上流地方の第四紀地質(その1, 2) 地球科学, 22, 1-10, 78-85.
- 五十嵐幹雄 1955 長野県南佐久郡穂積村崎田原遺跡調査概報 信濃, 7, 4, 254-260.
- 1958 長野県南佐久郡八千穂村崎田原遺跡第二次調査概報 信濃, 10, 2, 107-112.
- 井出正義 1982 池の平遺跡 八千穂村の文化財, 57P.
- 井出正義 1990 八千穂村 角川日本地名大辞典・長野県, 1615-1618. 角川書店
- 稲垣 進 1972MS 北八ヶ岳東麓の火山岩類の層序と古地磁気 信州大学理学部卒業論文, 1-63.
- 河内晋平 1961 八ヶ岳火山列 I・II 地球科学, 55, 1-8, 56, 11-17.
- 1974 蓼科地域の地質, 5万分の1地質図, 同解説書 1-10 地質調査所
- 北八ヶ岳サブ・グループ 1980 八ヶ岳北東麓における鮮新-更新統 島弧変動No.2, 39-47.
- 木村純一 1987 長野県における後期更新世の降下火山碎屑物層序 第四紀研究, 25, 247-263
- 近藤和子 1988 八ヶ岳北・東麓に分布するガラス質火山灰層について 地団研専報, 34, 127-135
- 塩川団体研究グループ 1976 八ヶ岳東麓のローム層 第24回地団研総会資料集, 51-56.
- 信濃史料刊行会編 1956 信濃史料, 第一巻上.
- 信州研究グループ 1969 中部地方山間盆地の第四系 地団研専報 15, 217-262.
- Suzuki Masao 1973 Chronology Prehistoric Human Activity in Kanto, Japan. Part II Time-Space Analysis of Obsidian Trans Portation—J.Fac.Sci, Univ, Tokyo, Sec. V. vol.IV, 395-469.
- 数土美幸 1988MS 千曲川上流域における河岸段丘の形成過程 信州大学大学院理学研究科修士論文, 1-85.
- 田中美恵子 1990MS 千曲川上流域の河岸段丘 信州大学理学部卒業論文, 1-55.
- 武智国加 1989MS 長野県佐久市周辺千曲川中流域の河岸段丘の発達史 大阪市立大学理学部卒業論文, 1-72.
- 長野県編 1981 長野県史 考古資料編 遺跡地名表
- 長野県教育委員会編 1983 長野県の中世城館跡—分布調査報告書—
- 早津賢二 1988 テフラおよびテフラ性土壌の堆積機構とテフロクロロジー—ATにまつわる議論に関係して— 考古学研究, 34, 4, 18-32.
- 町田 洋・杉原重夫・横山秀司 1981 矢出川遺跡の地形・地質学的調査報告. 野辺山シンポジ

- ウム1980報告書, 5-8.
- ・新井房夫 1992 火山灰アトラス 日本列島とその周辺 東京大学出版会, 276 P.
- 松本盆地団体研究グループ・木曾谷サブグループ 昭和59年度長野県西部地震による地盤災害と御岳山南麓の第四系(その1) 地球科学, 39, 89-104.
- 中谷 進 1972 大町テフラ層とテフロクロロジー 第四紀研究, 11, 305-317.
- 野尻湖火山灰グループ 1993 野尻湖底ボーリングN J 88試料の火山灰層 地団研専報, 41, 1-26.
- 野尻湖地質グループ 1994 下部神山ローム層の層序 野尻湖博物館研究報告, 2, 43-50.
- 八木貞助 1928 信州南佐久郡畑八村産象歯化石と其地層に就いて 地学雑誌, 40, 308-322.
- 八千穂村池の平遺跡発掘調査団 1986 池の平遺跡群—八千穂村大反遺跡・塩くれ場遺跡の尖頭器文化— 89 P
- 八ヶ岳団体研究グループ 1976 八ヶ岳火山活動の概要—とくに中期洪積世以降の火山活動について— 地球科学, 30, 87-94.
- 1978 ノッチの形成について 第四紀, 23, 63-68.
- 1982 八ヶ岳山麓に分布する更新統一火山活動にともなう湖盆の変遷について— 地団研専報, 24, 287-298.
- 1988 八ヶ岳山麓の第四系 地団研専報, 34, 275 P

発掘参加者名簿

第3回（駒出池、1986. 7. 23～27）

浅田泰弘	飯森康博	池田科子	石塚二侍子	上田 光	大島 浩	大森省吾
岡田憲明	小倉徹也	角谷 豪	金井章子	金川和人	鎌 秀樹	鎌形武史
上加世田聡	亀田直美	鴨田知幸	木村志のぶ	熊井久雄	小林和宏	小林正明
小宮山一美	近藤洋一	斉藤佐知	斉藤尚人	酒井知子	新堀友行	杉田正男
鈴木義昭	関本真一	反町忠雄	竹内 健	田中美恵子	田辺智隆	塚本千明
寺尾真純	中村由克	二階堂学	西山和代	畠山幸司	林 秀子	深澤哲治
畚野 匡	堀井昭宏	増田信吾	松橋 均	三隅佐知子	三原 哲	矢口裕之
山根妙子	由井修二	横田とし子	(以上52名)			

第4回（駒出池、1989. 10. 7～10）

会田夕紀子	麻生賢司	新井雅之	嵐 路博	荒 隆	安藤清宏	池田科子
石崎孝之	石塚二侍子	伊藤公夫	稲富英彦	入西智彦	鶴浦武久	大久保天
大久保輝	大竹幸恵	大竹憲昭	大野淳之	大見元子	大村昭三	鬼束詠子
加藤宗彦	桂田 保	金井章子	金川和人	蟹 功	蒲地 剛	鴨田知幸
北爪智啓	北原祐子	熊井久雄	小池幸夫	小坂 淳	小林正昇	小林雅弘
齊藤和博	佐々木早苗	佐藤 全	嶋津 薫	新海正博	須藤隆司	杉田正男
数土美幸	関本真一	相馬秀人	滝川義治	竹内 健	竹村健一	田中俊廣
田中美恵子	茶塚俊一	津金達郎	塚本千明	堤 隆	中村健司	中村由克
西村玲子	丹羽章夫	芳賀謙一郎	長谷川桂子	平井清之	平林正晴	深澤哲治
間室幸仁	嶺野仁美	三原 哲	宮川ちひろ	茂木正和	百瀬孝治	森田栄一
矢口裕之	山根妙子	(以上72名)				

第5回（駒出池、1990. 7. 30～8. 4）

会田夕紀子	新井雅之	石塚二侍子	伊藤公夫	大野淳之	大橋麻衣子	大見元子
加藤宗彦	金川和人	上垣内純子	河合小百合	木崎恵子	国信ゆかり	熊井久雄
小池幸夫	齊藤和博	佐々木早苗	渋谷美奈子	清水秀夫	新海正博	菅沼 亘
鈴木真純	須藤智美	関本真一	高橋 誠	滝川義治	田中美恵子	塚本千明
津金達郎	土井康裕	長橋良隆	中村由克	二階堂学	野村 哲	長谷川桂子
深澤哲治	畚野 匡	藤井哲也	間室幸仁	三橋貴之	嶺野仁美	三原 哲
宮川ちひろ	宮崎 隆	森田栄一	森田英夫	森田 亮	矢口裕之	吉田磨美

(以上49名)

第6回 (駒出池、1991. 10. 9～13)

会田夕紀子	青木香央子	秋葉善克	新井久美子	新井雅之	池田科子	石塚二侍子
門 美木子	金子良仁	上垣内純子	草野広詩	小亀 出	小林美智子	佐々木早苗
佐藤 全	新海正博	鈴木 保	関 和子	関 政智子	関本真一	高橋 誠
田中和徳	田村知栄子	津金達郎	土橋由理子	外山智賀	中村由克	野村祐一
長谷川桂子	平山 均	深澤哲治	間室幸仁	三原 哲	森田 亮	矢口裕之
渡辺哲也	(以上36名)					

Abstract

Ikenotaira sites, consisting of seven paleolithic are situated on the eastern slope of the Yatsugatake Volcanoes, Yachiho Village, Nagano Prefecture. Two of them, namely Osori and Shiokureba sites, have been excavated in 1983 and 1984 respectively by Yachiho-Mura Ikenotaira Sites Excavation Research Group (1986) thus forming the first and second Ikenotaira Excavations. The third, fourth, fifth and sixth Excavations were carried out intermittently from 1988 to 1991 at the Komade-ike site. This site is located along the north shore of a small pond named the Komade-ike, at an altitude of about 1,300m situated downslope of the Osori and Shiokureba sites, having an altitude of about 1,700m. These sites are distributed along a narrow area composed of the Late Pleistocene Ikenotaira lavas. Seemingly forming a route to the quarry site exposing obsidian. An objective of these excavations was to reconstruct the life of Paleolithic men at such high lands, especially the relationship between the paleolithic sites and the obsidian quarry exposure.

Each time, the excavations were carried out in several grids (3m×3m). Total area excavated include nine grids (75m²) and one trench (1m×12m) with an average digging depth of about 1m. Stratigraphically, Komade-ike site consists of lower and upper Saku Loam formations covered by Kuroboku (black soil). The relics were yielded in situ from "Deka Pm" (pumice with obsidian lapilli), "Deka Pm Loam" (brownish weathered volcanic ash), "Moya" (light brownish weathered volcanic ash) and Kuroboku in ascending order. A total of about 1,400 relics were yielded including scrapers, points, graters, notches, cores and used flakes. In addition, many arranged cobbles were found on the upper bedding plain of the "Deka Pm Loam". On account of the assemblage, the Komadeike site might be assigned as a campsite complex during same epoch of the last Glacial Stage. The culture reconstructed from the yielded tools indicates that the age of the site is correlated with the last stage of Paleolithic age and the site seems to be a life center of many ancestor generations.

圖 版

図版1 駒出池遺跡発掘地の全景



1



2

1：駒出池南方から発掘地を望む 左手建物のうらが駒出池(第3回)、2：北方より発掘地を望む(第5回)

図版2 発掘地の風景



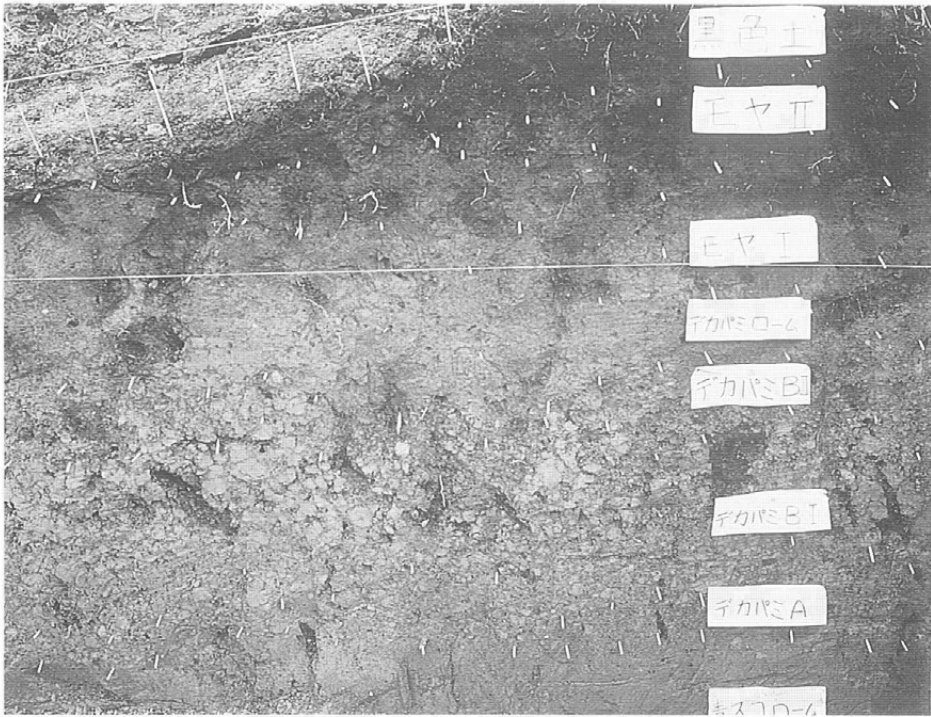
1



2

1：駐車場地点K-49付近（第4回）、2：バンガロー地点イ-21付近（第4回）

図版3 発掘地の層序



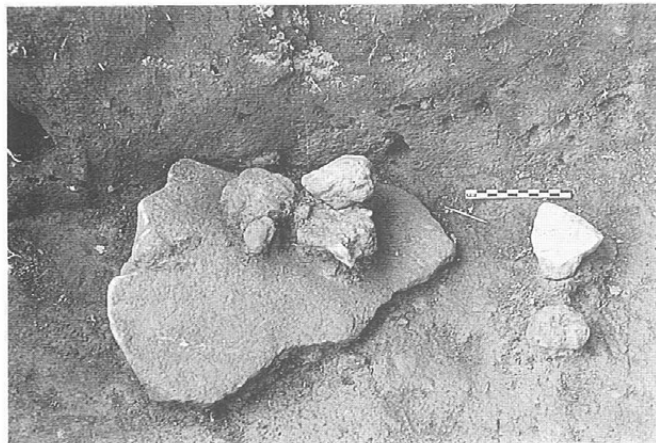
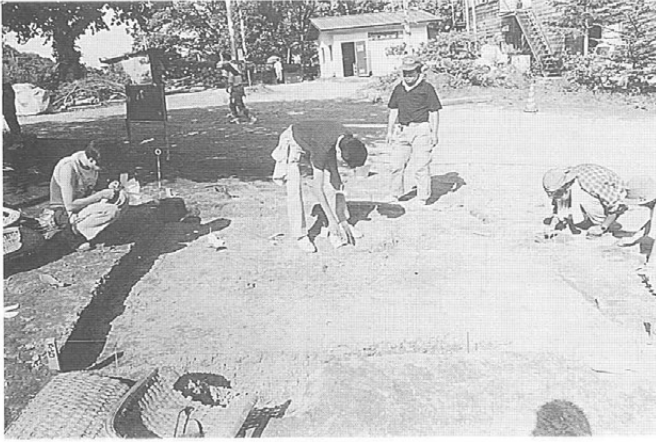
1



2

1：駐車場地点グリッド壁面、2：バンガロー地点イ-21グリッド壁面

図版4 遺物出土状況(1)

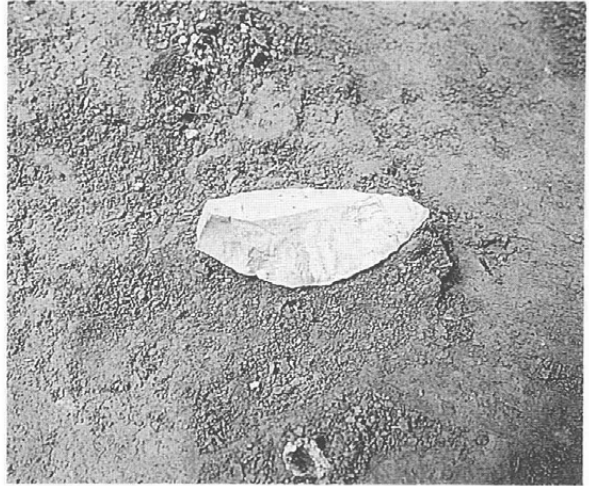


1 : 遺物集中区K-49 (第5回)、 2 : 遺物集中区イ-21 (第4回)、 3 : 配石イ-21 (第5回)

図版5 遺物出土状況(2)



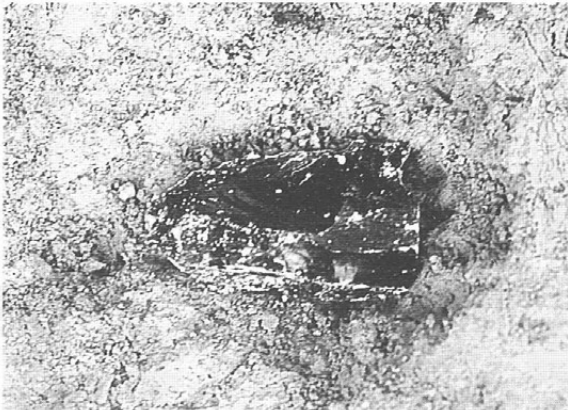
1



2



3



4



5

1・4・5：尖頭器、2・3：スクレイパー

図版 6 発掘風景(1)



1



2



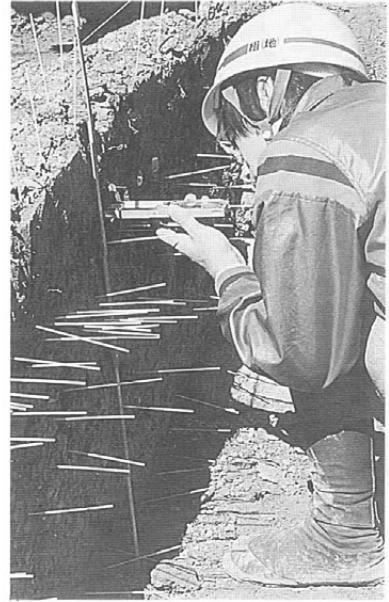
3

1 : 第3回、2・3 : 第4回

図版7 発掘風景(2)



1



2



3



4

1 : 第4回、2 : 第4回サンプル採取、3 : 第5回、4 : 第5回麦草峠黒曜石原産地の見学

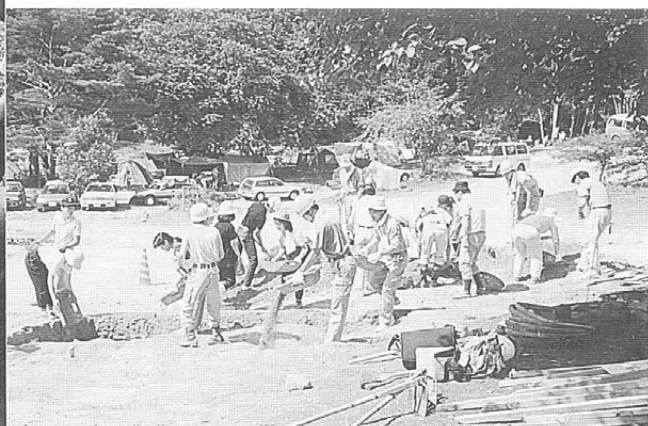
図版 8 発掘風景(3)



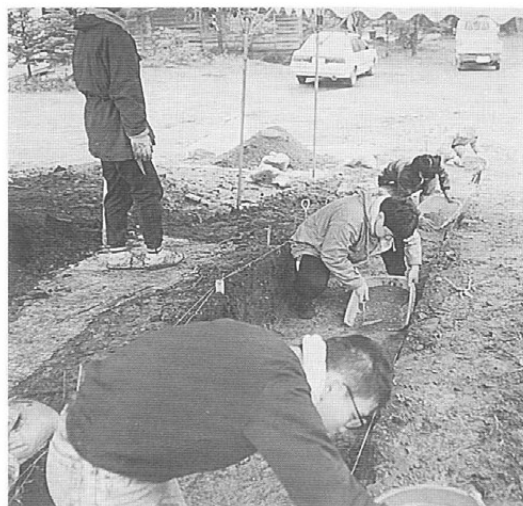
1



2



3



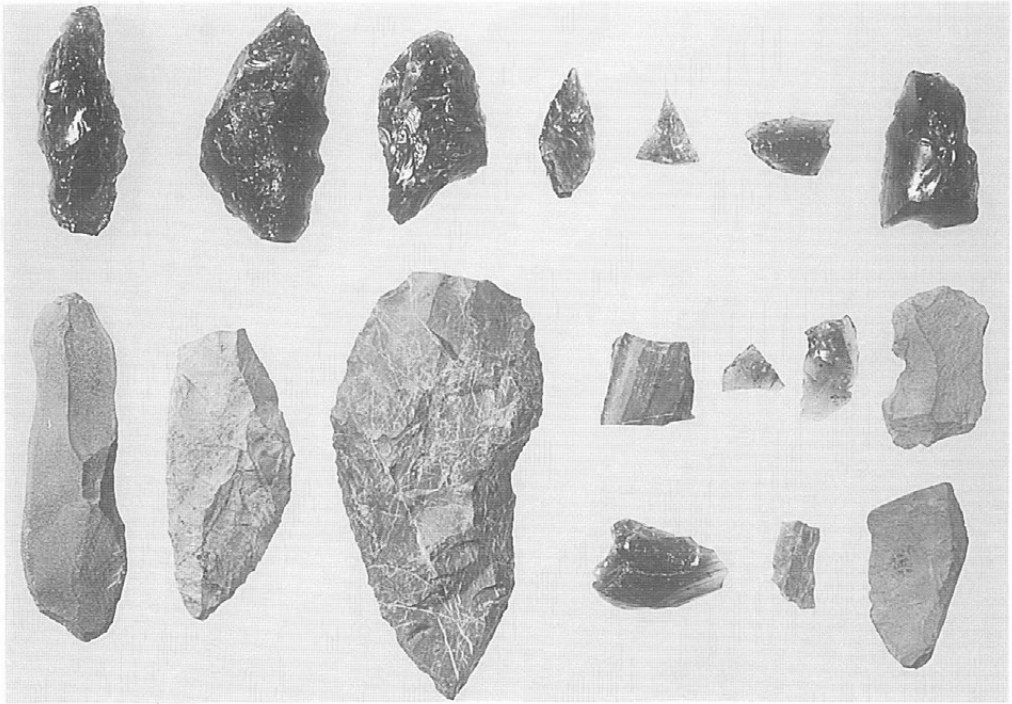
4



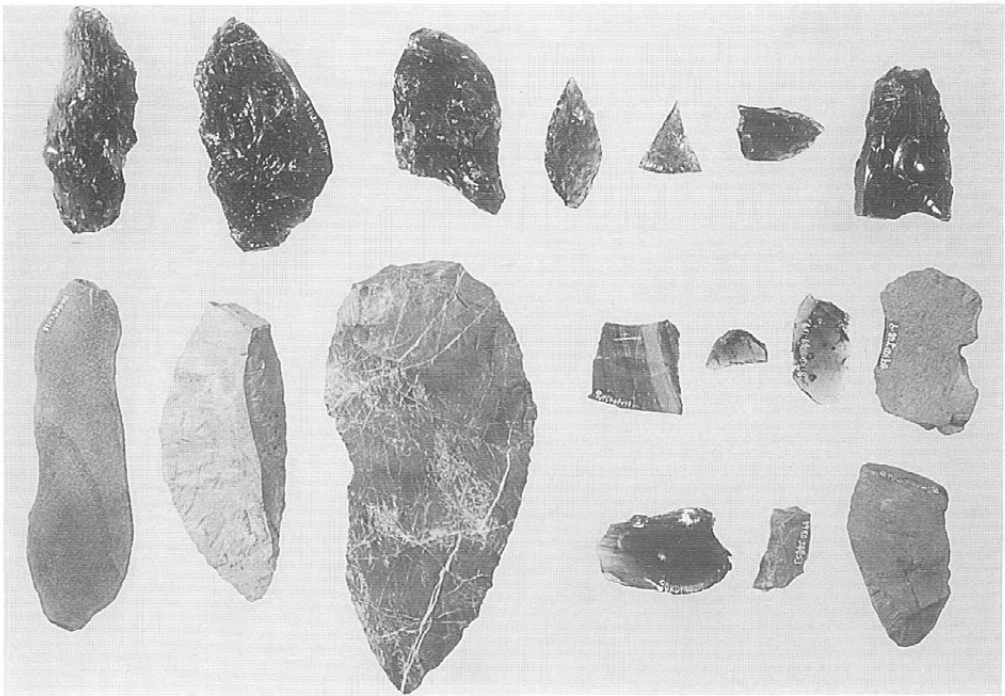
5

1・2・3：第5回、4・5：第6回

図版9 駒出池遺跡の石器



1

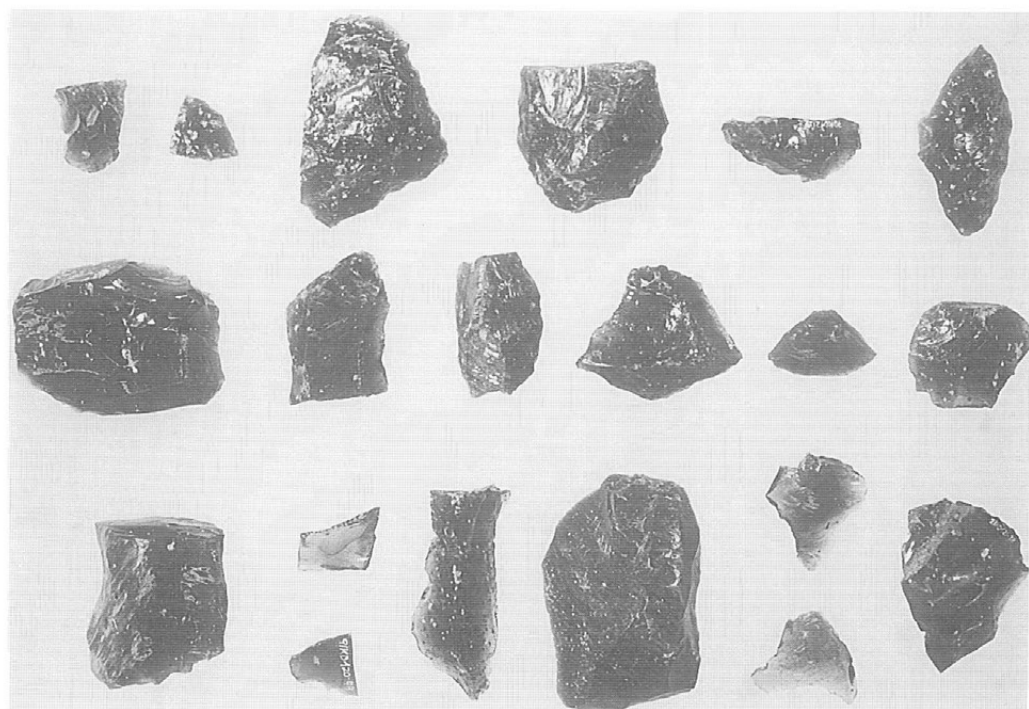


2

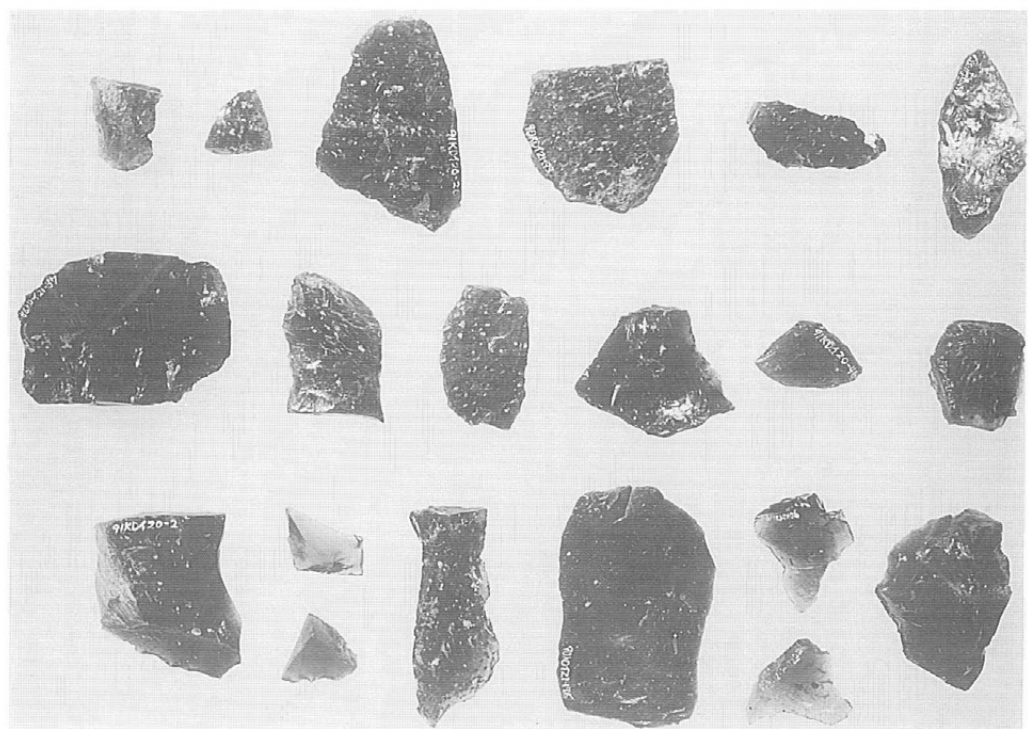
1 : No. 1 ~No.17表面、 2 : No. 1 ~No.17裏面

0 5 cm

図版10 駒出池遺跡の石器



1

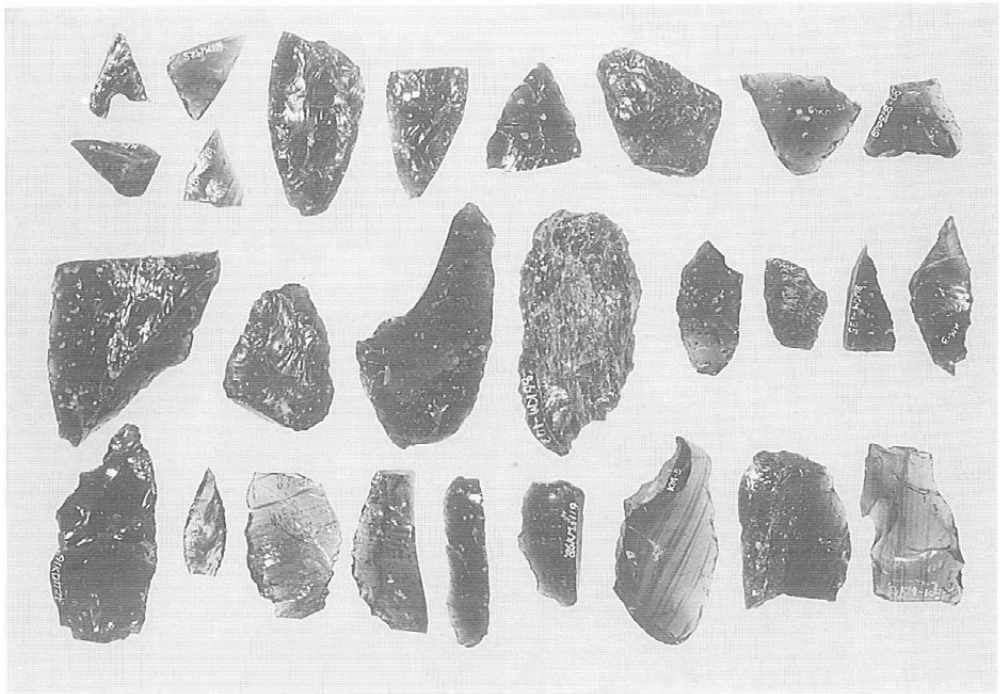
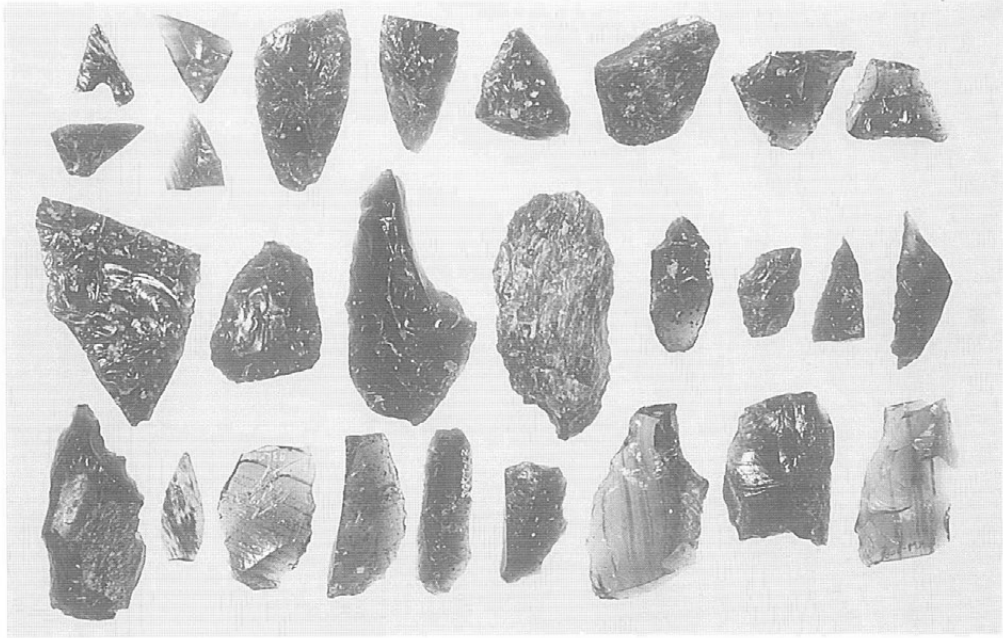


2

1 : No.19~No.38表面、 2 : No.19~No.38裏面

0 5 cm

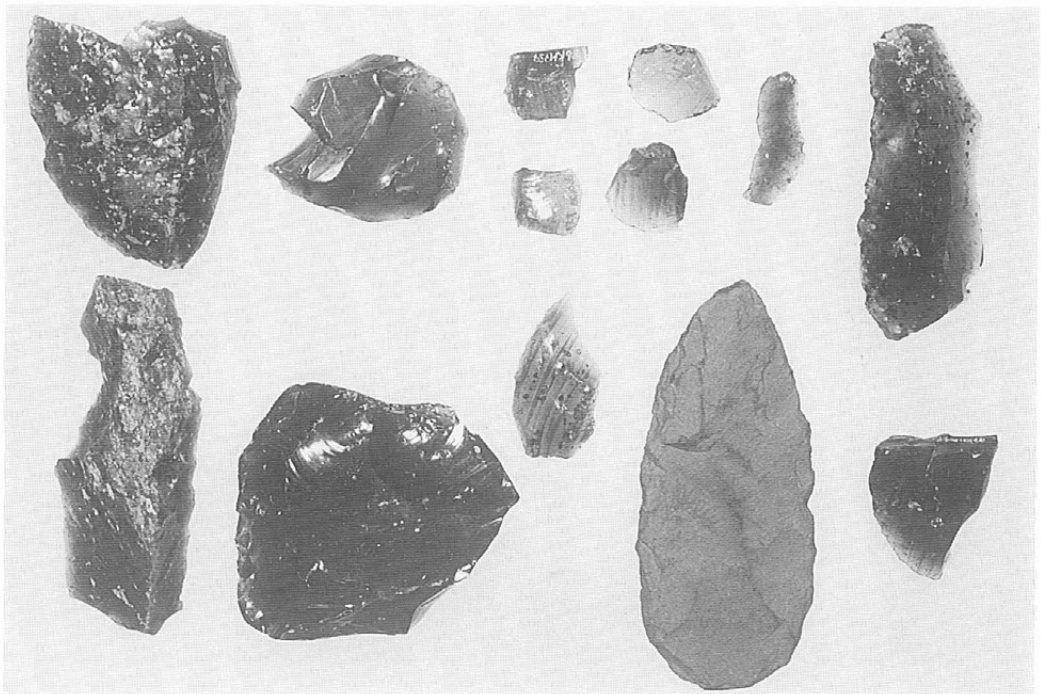
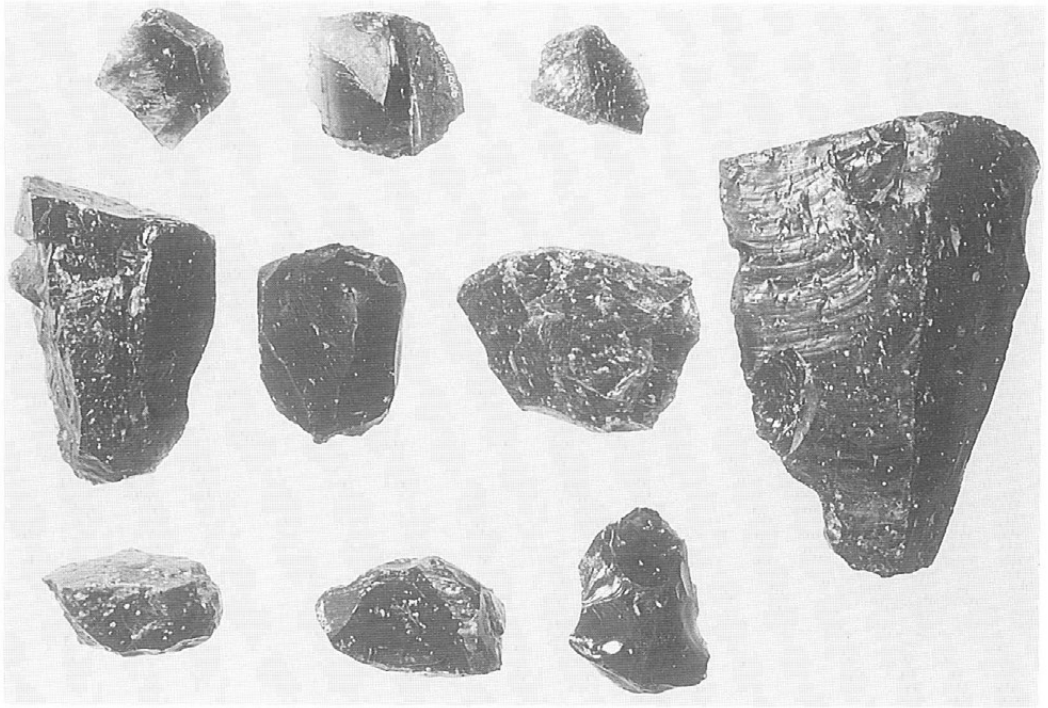
図版11 駒出池遺跡の石器（表採遺物）



1 : No.49～No.75表面、 2 : No.49～No.75裏面

0 5 cm

図版12 駒出池遺跡及び周辺遺跡の石器



1 : No.39~No.48、No.18表面、2 : No.76~No.85表面、周辺遺跡の石器

0 5 cm

報告書抄録

ふりがな	いけのだいらいせきぐんに							
書名	池の平遺跡群 II							
副書名	やちほむらこまでいけいせきのせんとうきぶんか 八千穂村駒出池遺跡の尖頭器文化							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	八千穂村池の平遺跡発掘調査団（編集責任者・新海正博）							
編集機関	八千穂村池の平遺跡発掘調査団							
所在地	〒384-07 長野県南佐久郡八千穂村畑143番地1 八千穂村教育委員会気付							
発行年月日	西暦1996年3月30日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	°′″	°′″			
こま で いけ 駒 出 池	ながのけんみなみさく 長野県南佐久 ぐんやちほむらやつ 郡八千穂村八 がたけした ヶ岳下 2049番地	203084	30	36度 4分 48秒	138度 24分 52秒	19860723) 19911013	103.5	学術調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
駒出池	散布地	旧石器 縄文	配石1基	尖頭器 25点 スクレイパー32点 ノッチ 1点 土器片 4点 など 合計 3,169点		後期旧石器時代から縄文時代前期にかけての複合遺跡。尖頭器文化のブロックを検出。黒曜石の原産地における尖頭器文化の一樣相が明らかとなった。		

池の平遺跡群Ⅱ

——八千穂村駒出池遺跡の尖頭器文化——

発行日 平成8年3月30日

編集者 八千穂村池の平遺跡発掘調査団

発行者 八千穂村教育委員会

印刷所 ほおずき書籍株式会社
